

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第244集

青木原遺跡Ⅱ

平成21・22年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第244集

青木原遺跡Ⅱ

平成21・22年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

三島市内に流れる御殿川は、狩野川水系の一支川である。昭和45年より、大場川との合流部から上流側に向て、隨時、洪水対策の護岸整備が進められ、これら関連工事によって破壊が免れない遺跡については、三島市教育委員会と当研究所が発掘調査を実施し、記録保存につとめてきた。

これら御殿川流域遺跡群では、河岸に接する微高地より検出される集落跡や墓域、埋没した旧河道から大量に出土する遺物など、弥生時代以降、近世・近代に至る時代毎の調査成果が上がっており、当該地域の歴史復原に多くの資料を提供している。

青木原遺跡は、御殿川中流部左岸に位置する埋蔵文化財包蔵地である。過去、その遺跡範囲及び隣接部において、宅地分譲・個人住宅建設、河川改良工事に伴った埋蔵文化財発掘調査が幾度も行われ、成果が上げられてきた。

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される小銅鐸が出土した。小銅鐸は、九州、関東など、いわゆる銅鐸分布圏の外側にも分布する小型祭器で、静岡県内で6例、全国でも50余例と、その事例数は、銅鐸に比べ遙かに少數である。銅鐸祭祀の終末、他地域との交流など、当時の社会状況を考察する上で重要な資料となるものである。

御殿川旧河道中から出土した遺物の数々は、御殿川上流の古人の活動を反映したものであり、古代、伊豆国府が在所し、中世三嶋神社の門前町、近世東海道宿場町として栄えた三島の姿の一端を示してくれている。

最後に本調査の現地調査並びに報告書作成にあたっては、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会文化財保護課、三島市教育委員会をはじめとした関係機関各位に多大なる援助・協力・理解を得た。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

平成23年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 石田彰

例　　言

- 1 本書は、静岡県三島市南二日町262-4他所在の青木原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成21・22年度一般河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託として、静岡県沿津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（平成21年度は、文化課）の指導のもとに、財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成21年6月から22年2月に渡り現地調査を実施し、資料整理を平成22年6月から平成23年3月まで行った。
- 3 調査体制は、以下の通りである。

平成21年度　（現地調査）	常務理事兼研究所長　天野忍	研究所次長兼総務課長　松村享
（事業担当）	研究所次長兼調査課事業係長　稻葉保幸	調査課副主任　青井拓司
（調査担当）	研究所次長兼調査課長　及川司	研究所次長兼調査課東部統括係長　中鉢賢治
	調査研究員　久瀬要	常勤嘱託員　三好元樹
（保存処理）	調査課保存処理室長　西尾太加二	調査研究員　大森信宏
- 4 出土した木・金属製遺物の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
- 5 本書の執筆は、第Ⅰ～Ⅳ章について、調査研究員岩名建太郎が行った。また、出土木製品の樹種同定を東北大学植物園鈴木三男氏に、動物遺体の同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果を付録に掲載した。
- 6 石器・石製品の石材鑑定は、研究所職員森崎富士夫が行った。
- 7 平成21年度、現地での基準点測量・空中写真撮影・写真測量業務を株式会社フジヤマに委託した。
- 8 本書の図版は、財团法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 9 本調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化財保護課が保管している。

凡　　例

- 1 測量については、現地工事図面との整合を図るため、日本測地系（改正前）を使用した。国土地理院直角座標系のX=-99170.000、Y=+39650.000を原点（A1）として、座標方位を基準に1辺5mの方眼（グリッド）を、南から北へ向かって、A・B・C…、西から東へ向かって、1・2・3…と設定している。
- 2 本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産技術会議事務局監修1992）に準拠した。
- 3 拡大・縮小率は、各図中に示したスケールのとおりである。また、写真図版の拡大・縮小率は、任意である。
- 4 図中の網掛け表現で、特に表記が無いものの内容は、以下のとおりである。

遺物図	土器赤色顔料・木製品赤漆塗布部分	土器黒色処理・木製品黒漆塗布部分
-----	------------------	------------------

目 次

序	(3) 石器・石製品	19
例 言	(4) 金属製品	19
凡 例	(5) 木製品	23
	(6) 瓦子類	33
第Ⅰ章 調査概要		
第1節 調査の経過	1	
第2節 調査の経緯	2	
第3節 調査の方法	2	
第Ⅱ章 位置と環境	5	
第1節 地理的環境	5	
第2節 歴史的環境	5	
第3節 基本土層	7	
第Ⅲ章 遺構と遺物	8	
第1節 遺 構	8	
第2節 遺 物	9	
(1) 土 器	9	
(2) 瓦	19	
	第Ⅳ章 まとめ	42
	第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の 銅製品出土地點についての考察	42
	第2節 古代瓦搬入経路についての考察	43
	付編 1 静岡県三島市青木原遺跡出土木材 の樹種	45
	付編 2 青木原遺跡の自然科学分析	59
	写真図版	
	報告書抄録	

插図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	調査区位置図	3
第3図	グリッド配置・土塁柱状図	4
第4図	周辺遺跡分布図	6
第5図	近世・近代杭配置図	6
第6図	出土遺物実測図（土器1）	10
第7図	出土遺物実測図（土器2）	11
第8図	出土遺物実測図（土器3）	12
第9図	出土遺物実測図（土器4）	13
第10図	出土遺物実測図（土器5）	15
第11図	出土遺物実測図（土器6）	16
第12図	出土遺物実測図（土器7）	18
第13図	出土遺物実測図（瓦）	20
第14図	出土遺物実測図（石器・石製品）	21
第15図	出土遺物実測図（金屬製品）	22
第16図	出土遺物実測図（木製品1）	23
第17図	出土遺物実測図（木製品2）	25
第18図	出土遺物実測図（木製品3）	26
第19図	出土遺物実測図（木製品4）	27
第20図	出土遺物実測図（木製品5）	28
第21図	出土遺物実測図（木製品6）	29
第22図	出土遺物実測図（木製品7）	30
第23図	出土遺物実測図（木製品8）	31
第24図	出土遺物実測図（木製品9）	32
第25図	川焼台遺跡出土1号小銅鏡	43

挿表目次

第1表 土器観察表1 (縄文土器・弥生土器・土師器・中世煮燒土器)	33
第2表 土器観察表2 (須恵器・灰釉陶器・山茶碗)	37
第3表 土器観察表3 (輸入磁器・炻器・瓦器・国産陶磁器・土製品)	38
第4表 瓦観察表.....	39
第5表 石器・石製品観察表.....	39
第6表 金属製品観察表.....	39
第7表 木製品観察表.....	40

図版目次

図版1 1. 調査区南東部 (西側より撮影)	3. 中近世瀬戸・美濃系陶器
2. 汎査区北西部 (北西側より撮影)	(皿類 志野釉塗布)
図版2 小鏡鑑	図版12 1. 中近世瀬戸・美濃系陶器 (天目碗)
図版3 1. 銅鏡再加工品 2. 縄文土器	2. 中近世瀬戸・美濃系陶器 (捲鉢)
3. 敷石 4. 弥生土器 (壺)	3. 近世瀬戸・美濃系陶器
図版4 弥生土器・土師器 (壺・小型壺・鉢)	(鉢類・片口・灯籠皿)
図版5 1. 弥生土器・土師器 (壺・台付壺集合)	4. 中近世瀬戸・美濃系陶器
2. 弥生土器・土師器 (高坏集合)	(壺・花瓶類)・瓦器
図版6 弥生土器・土師器 (壺・高坏・台付壺)	図版13 1. 近世瀬戸・美濃系陶器
図版7 1. 土師器 (壺) 2. 土師器 (坏)	(腰錐碗・香炉・灰落し)
3. 土师器 (坏・柱状高台)	2. 近世瀬戸・美濃系陶器 (仏像具)
4. 須恵器 (坏壺)	3. 近世瀬戸・美濃系陶器 (瓶類)
5. 須恵器・灰釉陶器・山茶碗	4. その他の近世陶器 (鉢類・輪禪皿)
(坏・碗類)	5. 肥前系磁器
6. 須恵器 (壺・壺類)	図版14 1. 石器 (砾石・硯)
図版8 1. 管玉 2. 石製漆油品	2. 石器 (火打石)
3. 中世常滑產灰器	3. 近世・近代瓦
4. 中世煮沸具 (垢・羽釜)	4. 金属製品 (刀子・錢貨・漆管)
5. かわらけ瓦類	5. 土製品 (土器片加工円盤)
図版9 1. 古代瓦集合 2. 古代瓦	6. 土製品 (土人形)
3. 中世輸入磁器	7. 種子 (胡桃)
図版10 1. 中世瀬戸・美濃系陶器	8. 種子 (桃または、梅)
(緑釉皿 灰釉塗布1)	図版15 1. 漆製品集合 2. 栓集合
2. 中世瀬戸・美濃系陶器	図版16 木製品 (容器・食事具)
(緑釉皿 灰釉塗布2)	図版17 木製品 (蓋板1)
3. 中世瀬戸・美濃系陶器	図版18 木製品 (蓋板2・側板・底板)
(緑釉皿 鉄粘塗布)	図版19 木製品 (下駄1)
図版11 1. 中世瀬戸・美濃系陶器 (折縫皿)	図版20 木製品 (下駄2・その他の木製品1)
2. 中世瀬戸・美濃系陶器 (鉢皿)	図版21 木製品 (その他の木製品2・部材類)

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査の経緯

三島溶岩流末端部、慈池に湧出する、富士山からの伏流水を起源とする御殿川は、三島扇状地の東部に位置する三島市街地中央部を南流し、大場川へと合流する流域6km²、流域延長9.5km、流域面積2.3km²の狩野川二次支川である。

御殿川自体が流域途中に多くの蛇行部を持つ上、合流する大場川や、さらにこれが下って合流する狩野川下流部の河床勾配は、比較的緩やかであり、その背水影響の及ぶ流域では、短時間の急激な降雨に対して、排水処理能力が追いつかないため、溢水・浸水被害が度々もたらされて来た。

静岡県は、昭和45年より、排水能力の向上と流域面積確保を目的とした御殿川蛇行部の直進化及び護岸整備工事事業を断続的に進めてきた。

同時に工事計画箇所にある埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の必要が生じたため、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、三島市教育委員会の間で協議のもと、大場川合流部より御殿川を遡る方向で遺跡分布調査・発掘調査が順次実施された。

昭和49年、御殿川と大場川合流部に位置する中島（城内）遺跡調査の後、昭和55年に中島地区、昭和57年には、鶴ヶ八反田・中地区で分布調査が実施され、発掘調査対象地の選定がされた。

中島地区の御殿川流域部に包蔵地登録されている中島B遺跡の範囲内では、昭和56年に下舞台地点、昭和61年に上舞台地点、平成2年以降は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査担当を三島市教育委員会から引き継ぎ、平成2～4年に中島西原田・梅名大曲田地点で発掘調査を行った。



第1回 遺跡の位置

その上流部の西岸側に位置する鶴喰広田遺跡では、平成3年に八反田前田地点、平成6年に鶴喰前田地点、平成7・8年には、鶴喰前田地点の南側に1～3区と設定した地点を発掘調査した。

東岸側の中地区では、平成8・9年に（中）手乱遺跡の一部について、調査を行った。

この平成6～9年に実施された鶴喰広田・手乱遺跡の調査時に作業安全確保のための横衝用地として未着手となっていた河岸部を対象にした範囲について、平成20～22年に発掘調査を実施した。

さらに上流部の南二日町地区で、平成10～11・17～18年に発掘調査を実施した（青木原遺跡）。

今回の青木原遺跡調査区は、水路直進工事の連続する場所で、前回調査区の南東側に当たる。平成20年11月に静岡県教育委員会文化課によって試掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代の土器が出土されたことを受け、本調査の実施が協議・決定された。

第2節 調査の経過

平成21年6月末より現地草刈り作業を開始する。7月上旬、基準点測量実施、同月中旬、機材搬入、同月下旬、周囲防塵フェンス設営を完了した。

調査区は、堆土搬出・管理上の制約より、2区に分割した。先行調査箇所である中・東部分については、7月27日より重機・草綱（バックフォー・クローラーダンプ）を用いた表土除去作業を開始して、これを8月19日まで終了させた。ベルトコンベア・水中ポンプ等の機械用電源の架線・配線工事後、人力による包含層掘削を8月25日より11月18日まで実施し、11月19日に当該区の空中写真撮影と写真測量を行った。

調査対象区の西部分については、11月24日から12月1日まで表土除去作業を行い、機材等を再配置した後、12月8日より平成22年1月6日まで包含層掘削を実施。当該区の空中写真撮影と写真測量は、1月9日に行った。

1月13日より機材・仮設建物の撤去・搬出を開始し、1月20日から28日まで整め直し作業、2月2日から4日まで防塵フェンス撤去、入場口道路復旧工事を行い、現地撤収工を完了した。

第3節 調査の方法

現地調査にあたり、測量基準点は、平成10・17・18年度実施調査と同様、改正前の日本測地系標系に基づいて設定された方向軸を利用することとした。グリッドは、新規に設定し、5m間隔で、南北方向は、南から順にアルファベットを用い、東西方向は、西から順にアラビア数字を用いた。

土層図は、縮尺率1/20で作成した。

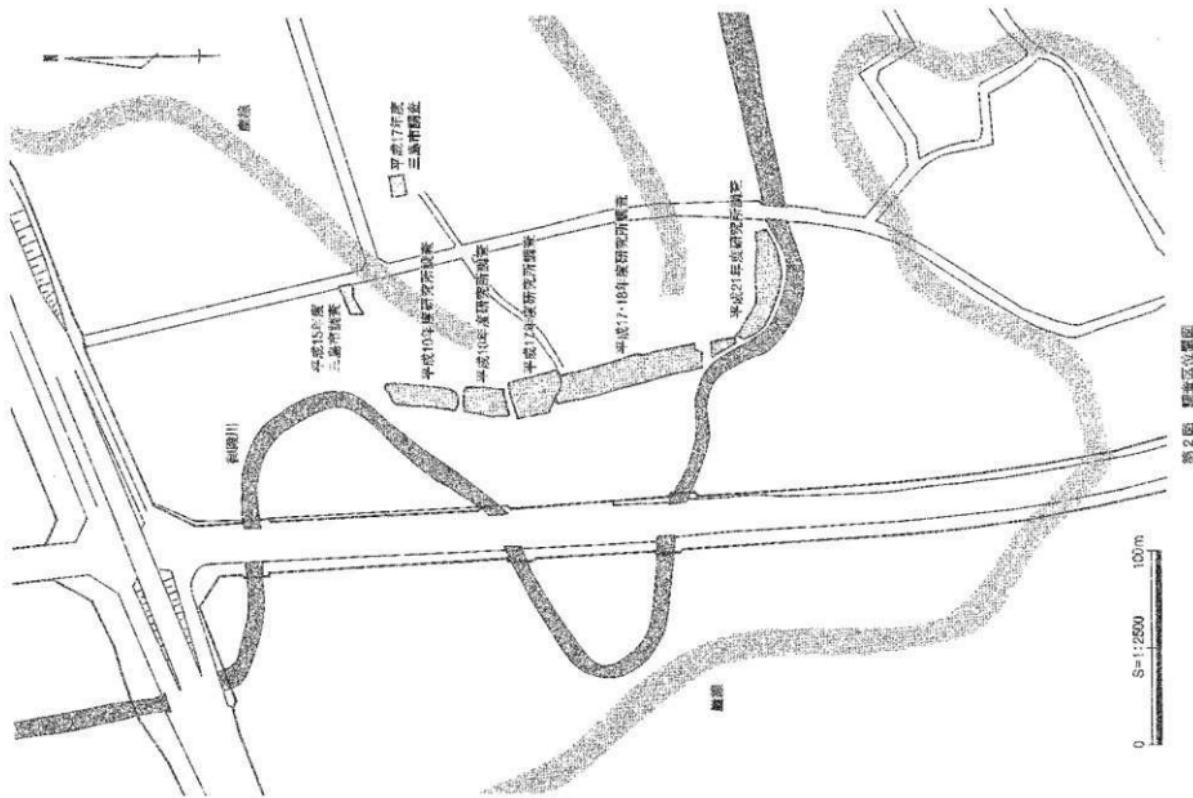
遺物の取上げは、出土位置について、3次元位置をトータルステーションで記録している。包含層最上位の砂層中より検出された木製品集中については、その平面図を縮尺率1/5で作成した。

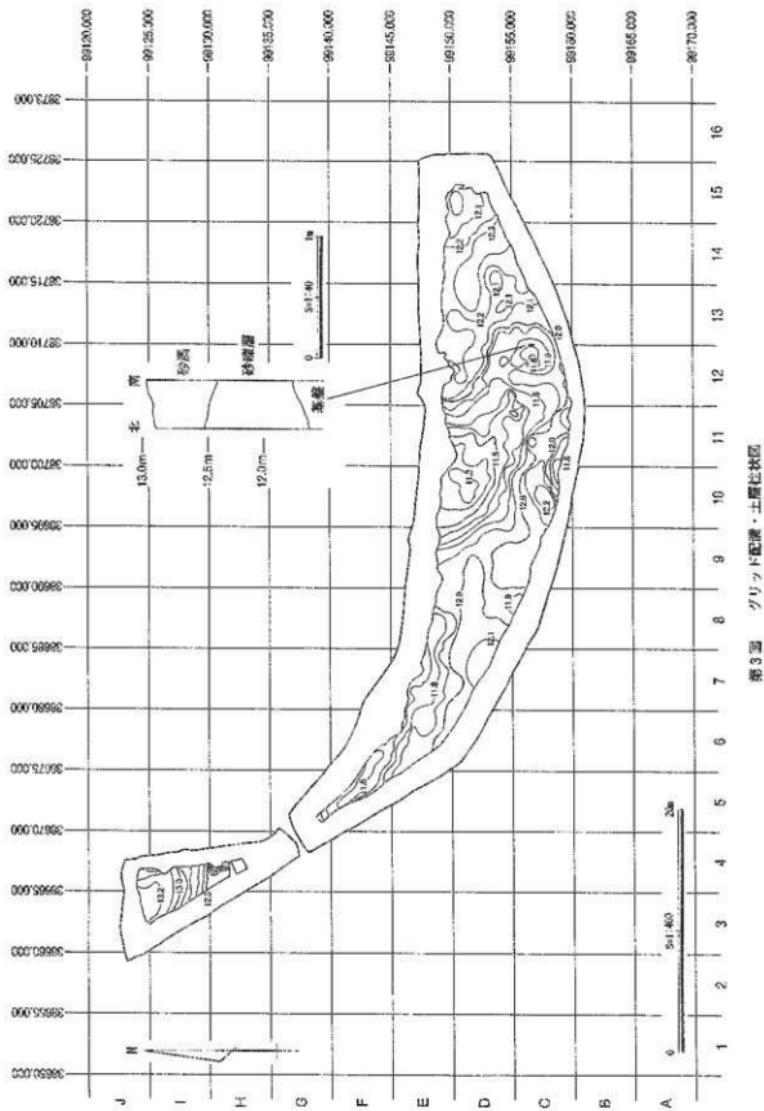
また、一部の遺物について、グリッド・層別一括取上を行った。

最終測削面の写真測量による標高図作成と空中写真撮影は、株式会社フジヤマに委託した。

写真撮影は、現地調査では、35mm判小型カメラでカラーネガを、6×7判中型カメラで、モノクロとカラー・リバーサルフィルムを使用し、資料整理では、遺物の撮影に6×7判中型カメラで、モノクロとカラー・リバーサルフィルムを、4×5判大型カメラでカラー・リバーサルフィルムを使用した。

第二章 病理概要





第3圖 ゲリットド配溝・土層柱状圖

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

静岡県東部、伊豆半島の本州付け根の西方に当たる、北西側を愛鷹山、東側を箱根山、南側を静浦山地によって囲まれた、黄瀬川・狩野川下流域に広がる平野の形成経過は、およそ現沼津市東部から三島市街地南部付近、西走する狩野川の南北で二分される。

北側は、三島・沼津平野と通称される地域の東部に当たり、愛鷹山・箱根山間の谷に富士火山溶岩（三島溶岩流／約1万年前）が流れ込んだのち、縄文海進・海退を経て、富士山体崩落により発生した火山砂礫層（御殿場泥流／約2,900年前）の被覆により形成された扇状地（三島扇状地）である。

南側は、田方平野または、狩野川平野と通称され、縄文時代前期の海進時に入江（古狩野湾）であった地域が、海退後に天城カワゴ平火山の降下軽石及び火碎流に由来する磐石質砂層によって埋められた谷底平野である。

堆積が先行した三島扇状地の南端部は、静浦山地の手前まで延び、これに行く手を阻まれる形で狩野川の流れは、静浦山地に寄り添いながら、北上から西走へと方向を変化させ、三島溶岩流が形成した台地端部より湧出する富士山の伏流水や箱根山を源流とする小河川との合流を重ね、静浦山地の北側で、南下して来る黄瀬川と合流したのち、静浦山地北西麓を廻り込むようにして駿河湾に注がれる。

富士山伏流水の湧出地である嵐池を起源として、三島市街南部に相当する扇状地上を南東方向に蛇行を繰り返しながら走る御殿川は、狩野川の一次支川である大場川へと合流する。

御殿川の中・下流域では、蛇行流路の消長により開拓谷が形成され、一部段丘が発達している。その内側の谷底平野部には、砂・砂礫質の氾濫物が堆積している。

青木原遺跡は、この狩野川二次支川の中流域蛇行帯の左岸で、西方向へ半島状に突出する標高地を中心とした東西約240m、南北約200mの範囲に設定された埋蔵文化財包蔵地であり、今回の調査範囲は、包蔵地南部の流路に接地する河岸部が対象となった。

なお、青木原遺跡の北西と南東側には、御殿川蛇行により広く形成された谷底平野が広がっている。北西側の西大久保遺跡では、埋没河道方向に重なる珪壁が検出され、御殿川の流水を利用した初期の農業生産域の状況が確認されている。青木原遺跡は、最も開拓率の小さい地点の北側に位置し、対岸側（南側）は、岬状に突出した標高地となっていて、二つの谷底平野の連続を分かつ地形になっている。

第2節 歴史的環境

箱根西麓の裾部に沿って南流する大場川は、三島市北部に位置する青木橋付近より、西側へ派生川が分岐している。現在その上流部は、渓谷になっているが、途中、湧水や工場排水を集め、大場川本流と同様に狩野川へ合流している。この狩野川一次支川は、現在、境川と呼称され、その東西で表面水田条里の方向が異なることなどから、旧駿河・伊豆2国との境界と目されている。

駿東・伊豆北地区において、旧石器・縄文時代遺跡の立地は、三島溶岩流・御殿場泥流の被覆により下層の状況が不明な地域を除き、縄文海進による冠水影響を受けていないと目される、富士・愛鷹・箱根山丘陵部に集中する。

三島扇状地上に認められる明確な人間の生活痕跡は、弥生時代中期に遡る。当該期の遺物出土例は、多數認められているが、明確な遺構としては、境川左（東）岸の長伏遺跡で当該期の住居跡を1軒検出



第4図 同じ遺跡分布図

縮尺1:25,000地図 みしま(地図2号-1)使用

1 青木原遺跡	11 猿道山遺跡	21 平日前日遺跡
2 伊豆國分寺跡	12 深白山遺跡	22 金沢遺跡
3 芝山町遺跡	13 鶴岡川遺跡	23 手番遺跡
4 三崎火社・塔ノ森遺跡	14 春町出遺跡	24 鶴崎広田遺跡
5 三島御殿跡	15 道下遺跡	25 中島日遺跡
6 三島代官所跡	16 西大久保遺跡	26 梅田遺跡
7 市ヶ原廬跡	17 齋真橋向遺跡	27 長伏遺跡
8 上才原遺跡	18 梅添遺跡	28 向山古墳群
9 谷田天台遺跡	19 鹿沼原遺跡	29 上河旁院遺跡
10 清平山遺跡	20 青木日遺跡	30 中島遺跡

しているほか、御殿川中流西岸に位置する青木B遺跡で1基、下流東岸の中島B遺跡上舞台地点で6基の方形周溝墓が検出されているにすぎない。

弥生時代後期に入り、平野部での当該期の遺物出土地点は、中期と同様、多数認められる。明確な住居跡の検出は、境川流域で、清水町瀬戸川遺跡（24軒）、岩崎屋敷跡（3軒）等の例が挙げられる。御殿川流域では、現在のところ、中島B遺跡上舞台地点（2軒）のみである。三島扇状地の周辺で住居跡を検出する確実な集落遺跡は、三島市谷田押切遺跡（2軒）、夏目本遺跡群（2軒）、函南町向原遺跡（3軒）、伊豆通信病院遺跡（4軒）など箱根西麓丘陵上に集中している。

墓域については、青木B遺跡で1基の方形周溝墓が検出され、また、平成17・18年の青木原遺跡の調査でも弥生時代後期～古墳時代前間に比定される方形周溝墓が3基検出されており、御殿川を挟んだ、南北での展開が認められる。

古墳時代に入り、集落の展開は、大きく変化する。古墳時代前期に比定される住居跡を検出する遺跡は、箱根西麓丘陵部（夏目本遺跡群7軒、伊豆通信病院遺跡9軒）のみならず、大場川・御殿湯川間でも広がりを見せる（中島B遺跡上舞台地点1軒、金沢遺跡10軒、毫町田遺跡1軒、西大久保遺跡で弥生時代末から古墳時代初頭に比定される住居14軒）。

古墳時代中期以降の集落立地は、狩野川本流北岸部にも拡大する反面、箱根西麓では、現函南町の「平井の台地」と通称される地域に限定される。

湧水源流が集中する溶岩台地末端部で、現三島市街中心地に当たる箇所（御殿川西岸側）に奈良時代、国分寺が建立され、政治的位置関係上、この近隣に伊豆國守が存在していたと想定されている。

しかし、古代の寺院・官衙関連遺跡は、大場川・御殿川間（御殿川東岸側）に集中を見る（市ヶ原磨寺、塔ノ森磨寺、上才塚遺跡）。現在もここに三島大社より南側へ旧下田街道が延びており、古代以降、この地域の重要な交通起点の一つとなっていたことは、状況的に明らかである。

近世に入り、御殿川上流部と西側に流れるその支流を跨ぐ形で、三島宿が整備される。東海道以南で宿場から近隣の村落部は、半径1.5km程度の環状に並んだ配置を見せている。青木原遺跡は、三島宿から見て、その近隣村落配置の内側に位置するため、狩野川からの背水影響を考慮しなければ、この時代に比定される御殿川源着物の供給は、ほぼ三島宿内と旧下田街道沿線に並んでいた町屋からの投棄物に限定される。

第3節 基本土層

今回の調査対象区は、流水量の変化により、浸食と堆積が繰り返された御殿川氾濫原内に当たる。

表層は、堤防築用盛土であり、その下の一部に水田床として搬入・敷設されたとみられる粘土が続く。これより下層に位置する、御殿川旧河道は、砂・砂礫層によって埋められ、これを除去すると堅く締まった褐色を呈する三島扇状地の基盤を形成する火山砂礫再堆積層（通称マサ）が表層する。

遺物は、いずれも、砂・砂礫層中より出土しているが、それぞれの年代觀は、層序の上下に対応しておらず、細片化し、表面に流跡痕が観察される土器が多数あり、増水に伴う流路の変更や底部攪拌に伴い、二次堆積が繰り返されて来たことが分かる。

包含層最上位は、一部に礫を含む黒色砂を主体としており、近世・近代以降の河道を埋めている。中位以下の砂礫層は、平面に、分離困難で、重複が予想される旧流路の把握は、出来なかつた。

包含層最下位の砂礫層中には、玄武岩質の小尖頭大から径1mに達する亜円礫・岩が多く含まれる。湧水部の三島溶岩流の端部が崩落、流下したものと推定される。下流の鶴喰広田・手亂遺跡河岸部の堆積層中から、これだけの大きさのものは、検出されていない。

第Ⅲ章 遺構と遺物

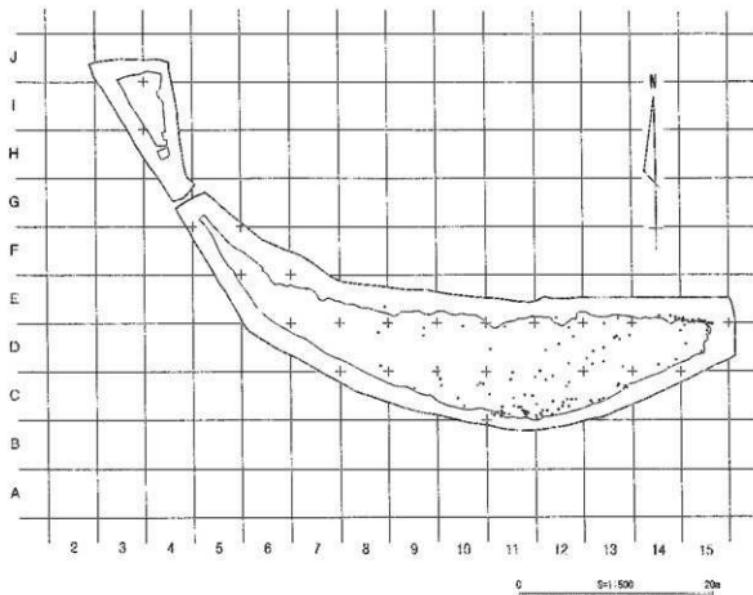
第1節 遺構

近世・近代の杭列（第5図）

今回の調査区内では、最終堆積砂層下に、合計183本の丸太材の打設が確認された。いずれも先端部を尖らせた丸で、一部、腐食防止のため焼いているものも認められた。

検出高がほぼ等しく、見掛け上、列を成す群もいくつもあり、旧御殿川流路の河岸部に設定された護岸・整流用の杭列と目されるが、これらの具体的な組み合わせや、新旧について、判断する材料を得ることが出来なかった。頻繁な流路変更に伴い必要に応じて杭打設が繰り返された結果とみられる。

杭が打設されていた砂疊層中に近世の陶磁器が含まれ、護岸客土が盛られる以前のものであることから、帰属時代は、近世・近代に比定される。



第5図 近世・近代杭配図

第2節 遺 物

今回の青木原遺跡の調査区は、旧河道埋没部に相当し、その遺物包含層の上・中位は、幾度も河川漫食と再堆積を繰り返している。出土する遺物の多くが、川中で転回して細片化し、表面も磨滅している。遺物の様相は、一部の完形品や残存率の高い品、重量物を除いて、御巣川上流沿岸部の古人の活動の反映と捉えられる。

以下、包含層中より出土した土器、瓦、石器・石製品、金属製品、木製品、種子類について、その内容を記載する。なお、動物遺体の詳細については、59頁からの付録2を参照されたい。

(1) 土 器

1 繩文土器・弥生土器・土師器・中世窯焼土器（第6～10図1～95／第1表／図版3～8）

1～95は、縄文時代から中世に比定される酸化焼成された土器である。

1は、縄文時代中期後半に比定される、曾利ⅠないしⅡ式土器の深鉢胴部片である。器面は、半纏竹管内皮を用いた縱方向の条線文が施された後、隆蒂を貼付けている。年代的に三島・沼津の現平野部が形成される以前の遺物である。青木原遺跡東方の箱根西麓に位置する縄文遺跡からの流れ込みは、大場川によって遮断されたため想定し難いので、現三島市北部、萩・猿倉付近に占地していた縄文遺跡が2900年前の富士山体崩落に伴い発生した御巣場泥流により破壊され、流出してきたものと考えられる。

2～38は、弥生時代～古墳時代前期に比定される、弥生土器・土師器の壺である。

2は、弥生時代中期以前に比定される、器面を条線調整した壺の胴中位～底部で、胎土には、多量の花崗岩片が含まれており、比較的薄手で、硬く焼き締まっている。

3～5は、弥生時代中期に比定される壺で胴下位～胴上位に文様帯を持つものである。3は、2段の文様帯が残存し、上段は、原体L R 単節縄文を横方向に施し、下段は、沈線によって互い違いの重三角区画し、逆三角形区画側に刺突文を充填している。4は、原体L R 単節縄文を横方向に施した後、沈線で多段に区画し、1段の縄文を磨消す。1は、原体L R 単節縄文を施した後、沈線で枠状の区画をし、外洋区内に流水文を施し、内枠内を磨消している。

6は、広口壺の口縁部で内側に連弧文を施する。7・8は、いずれも網代痕が残る底部である。

9～11・33・34は、弥生時代後期に比定される、胴下位～胴上位に羽状縄文・擬似羽状縄文の文様帯が設定される壺である。9・34は、然りの方向の異なる縄文原体を平行して器面に押し当て、羽状縄文帯をつくる。9は、縄文原体の端部を結節している。10・11・33は、ハケ工具先端を段別に傾きを変え連続刺突し、擬似羽状縄文帯をつくる。33・34は、円形の粘土夜を文様帯に貼付ける。

32は、胴下位～胴上位に文様帯を持たない壺で、外面は、丁寧に磨かれている。

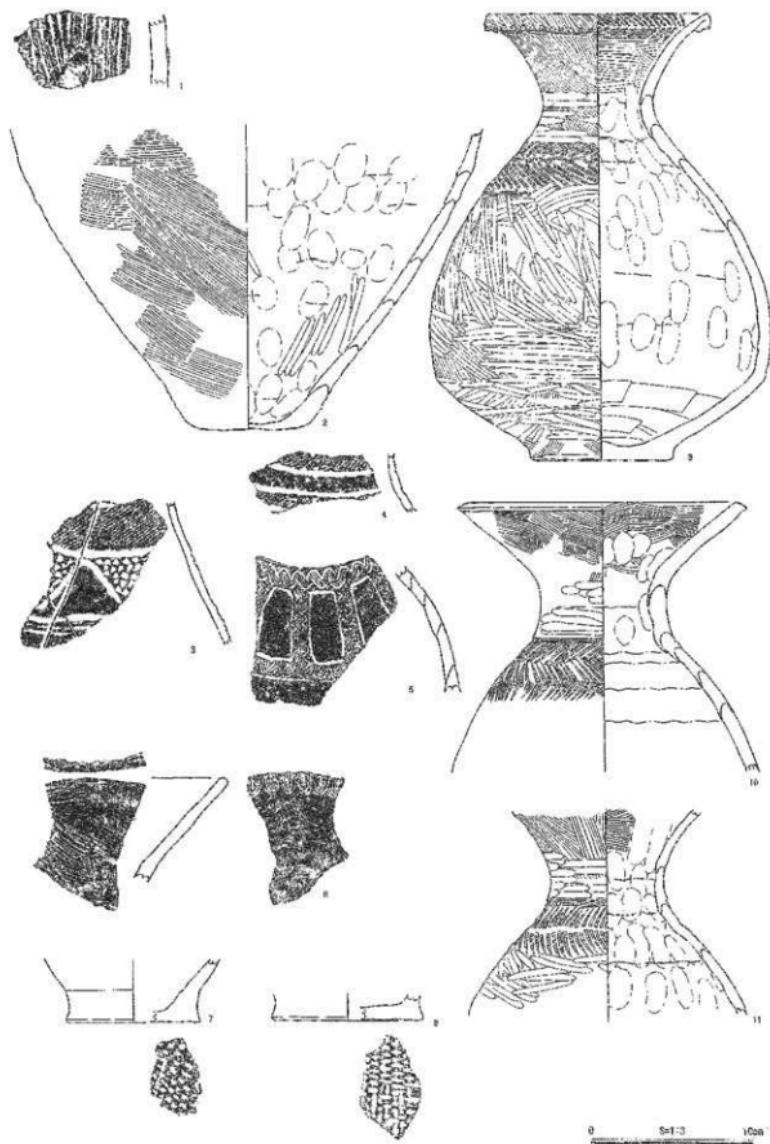
12は、直口壺の口縁部である。9・13～19は、折返口縁壺である。9・18・19は、外縁部にハケ工具先端による連続刺突が施されている。9・14・16・17は、縄文による文様帯がつくられる。17は、短突帯が貼付けられる。20は、折返部の断面形が三角形を呈す。

なお、9は、ほぼ完品の状態で出土しており、表面に流磨痕も観察されない。今回の調査の出土土器の内、埋没後、原位置を移動していないとみられる数少ない資料である。

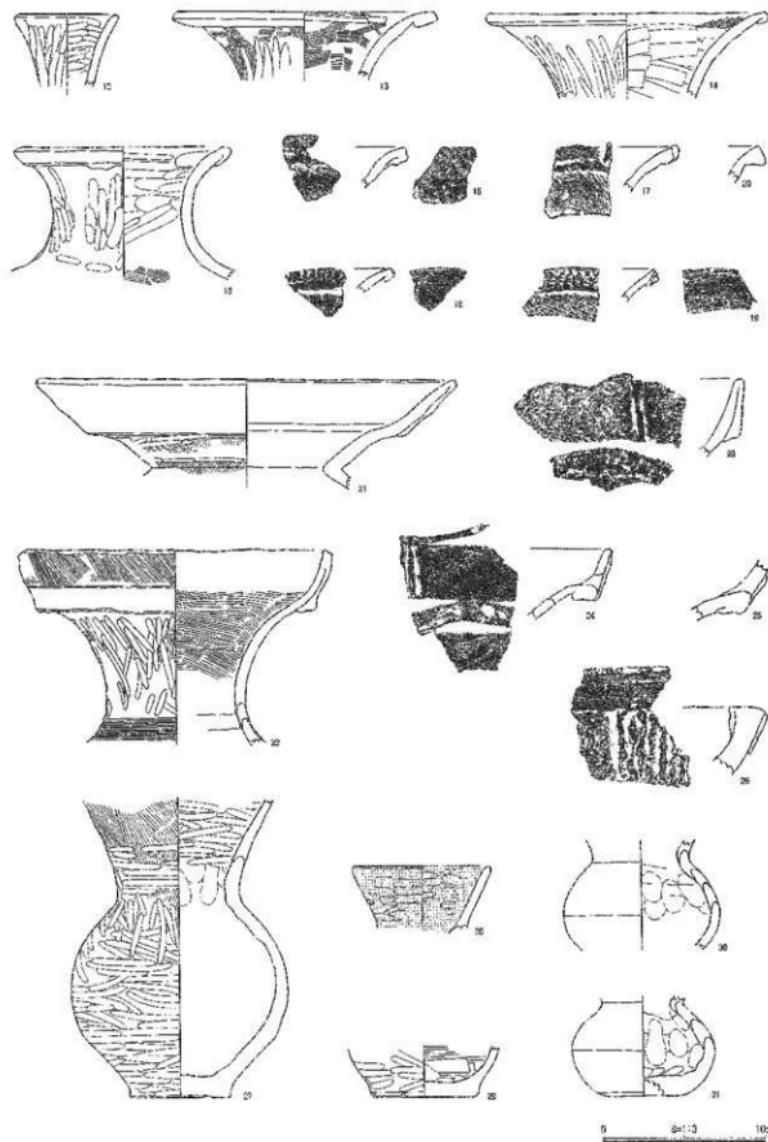
21～26は、複合口縁壺の口縁部である。断面上の観察より、21～23は、口縁部の外側に粘土を貼り合わせ、肥厚させたつくりなのに対し、24・25は、折返口縁の上に筒型の口縁部を積み上げたつくりになっている。21の口縁部は、大きく広がり、26の口縁部は、内側に突出する。23～26は、断面三角形の突帯が縱方向に貼付けられる。

27は、比較的小形の壺である。外面は、ハケ調整の後、丁寧に磨かれている。

28～31は、小型壺である。28は、直口縁、29は、底部、30・31は、やや扁平な胴部を残す。



第6圖 淚土遺物實測圖(上層1)



第7图 出土遗物分类图(土器2)

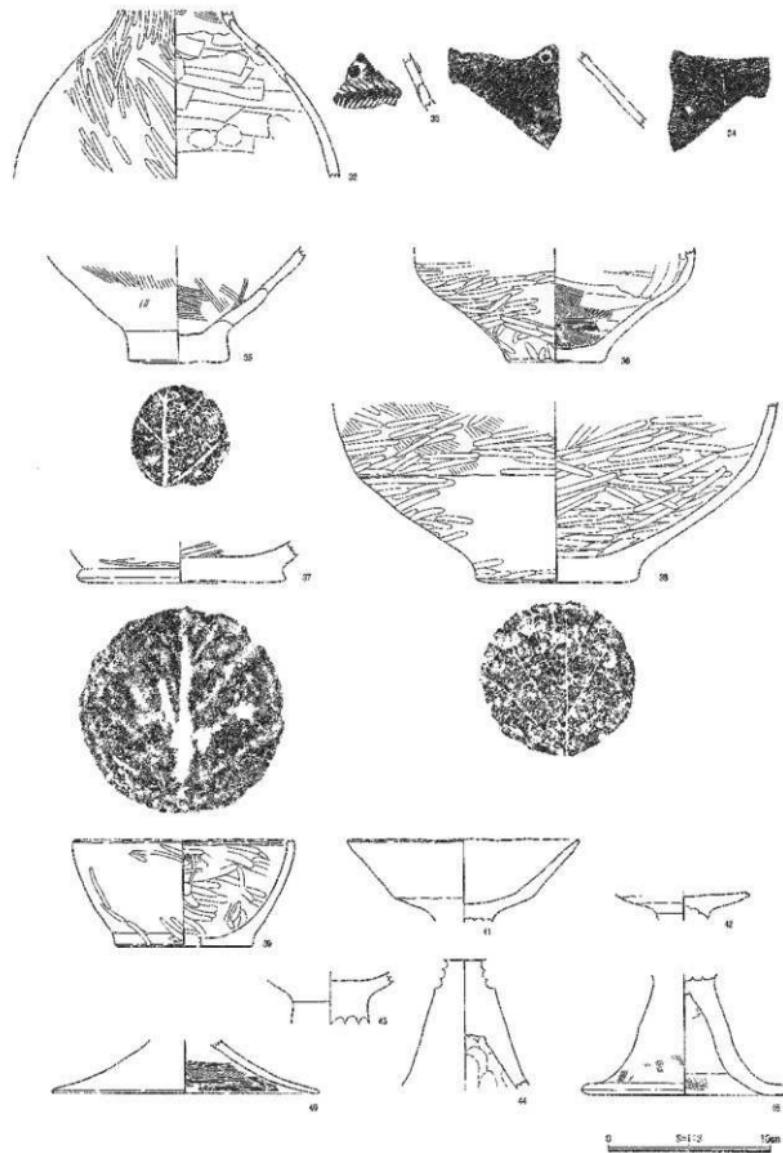
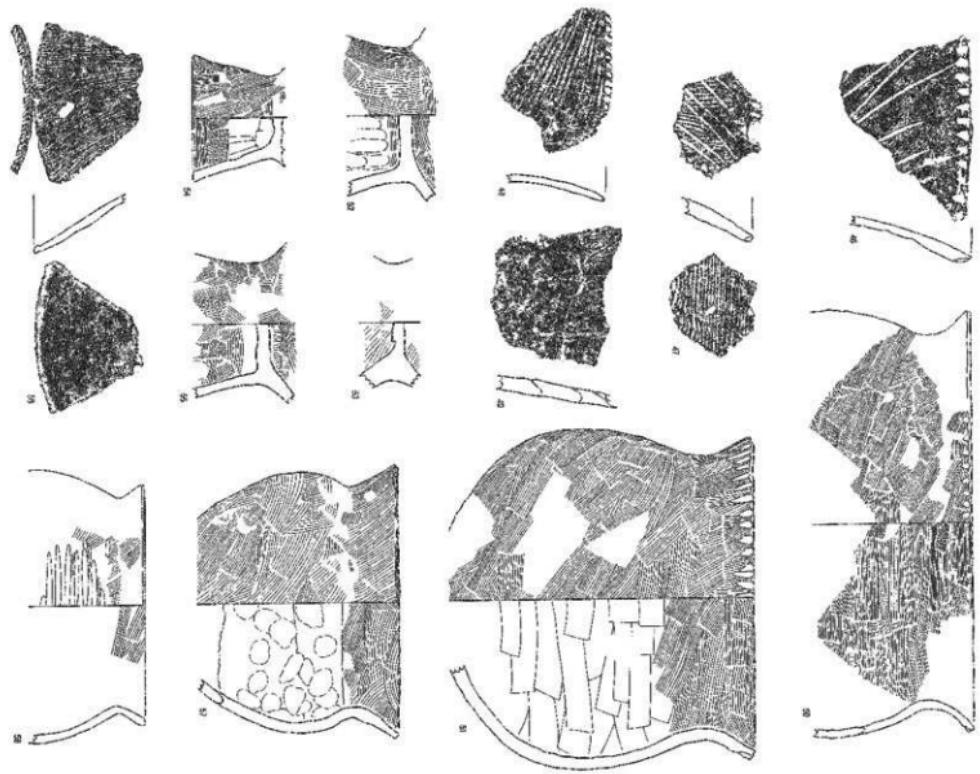


图28 出土物実測図 (土器3)



第9图 出土遗物整理图 (土器4)

0 5cm 10cm

35~38は、壺の胴下位～底部である。35の肩部最大径は、比較的高い位置にあり、36・38は、肩下位に屈折部を持つ。35・37・38の底面には、木葉痕が残る。

39は、鉢である。内外面とともにミガキ調整がされ、口唇部は、内側に若干突出する。

40~45は、肩坏である。41は、坏の下位に屈折があるもの、42は、坏内底が比較的平坦なものである。40は、器が下に広がる脚部、45は、下位にゆるやかな屈折が認められる脚部である。

46~66は、弥生土器・土師器の亮類である。

46・47は、斜方向の沈線文が外面に施される。48は、比較的薄手硬質なつくり、49は、肥厚なつくりになっている。

52~55は、台付壺の臺底～台上位を残すもので、外側は、縦方向のハケ調整と共通するが、台上位内面の調整方法が、52は、指ナデ、54は、ヘラナデ、53は、縦方向、55は、横方向のハケ調整と違いがある。56は、台部で、下端部は、羽状の連続刺突がされ、内側に若干突出する。

50・51・57は、残存率が比較的高い台付壺の口縁～肩部部分である。それぞれ外面縦・斜方向のハケ調整、口縁内面横方向のハケ調整と共通するが、肩内面の調整は、50が横方向のハケ、51が横方向のヘラナデ、57が指ナデ調整と異なる。

58は、外面に横方向のミガキ調整が施された壺である。

59・60は、S字口縁壺で、いずれも薄手硬質な作りである。

61~63も薄手の壺の口縁部である。61の頸部は、横方向のハケメを施文した後、間隔を空け、縦方向に短くハケメ施文を行っている。61・62は、外反し、63は、直に広がる器形をしている。

64・65は、口縁下位～頸部が最も厚くなる壺である。64の頸部内面は、内側に強く突出し、65のそれは、緩やかである。

66は、上端面が広く、比較的平坦で、外側に突出する、いわゆる清秀型の壺の口縁部である。

67~78は、土師器の坏である。67~71は、内湾する口縁部で、67は、下位に向かって体部が窄まり、68は、口唇部が直立し、71は、外面で凹部が一層する。70は、内面に赤色顔料が塗布されている。これらは、古墳時代後期～古代初期に比定される。

74は、丸底の櫻倣坏で、口縁部が外反するが、流磨のため、表面の細かい調整は、捉えられない。75は、ヘラケズリで形作られた丸底の坏で、内面は、丁寧に磨かれている。全体的に黒色処理が施されている。76も丸底の坏であるが、底面に木葉痕を残す。

72は、直に広がり、73は、内湾しつつ、口唇部は、外反する坏口縁で、古代の製品に比定される。77は、焼成の良好な箱形の坏で、底内面には、放射状に暗文が捺かれている。78は、底面に回転糾切痕が残る坏で10~11世纪代に比定される。

79は、高台付坏または、碗である。80は、柱状高台である。

81~89は、中世の煮沸具で、81は、壺の口縁、82は、壺の耳、83~89は、羽釜の口縁～羽部である。いずれも器壁は、薄くつくられ、色調は、灰白色系である。

90~94は、いわゆるかわらけの皿類で、90は、粘土糰の巻き成形が観察される。92~94は、籠成形されたとみられる製品である。95は、口縁部片であるが、口唇部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたことが分かる。



第10圖 出土遺物實測圖 (上指 5)

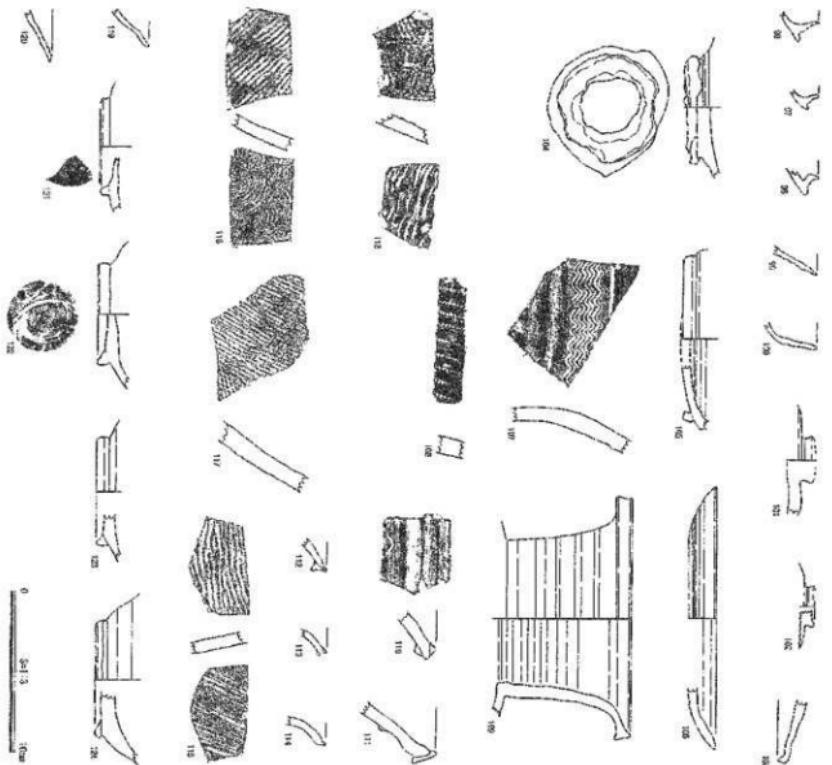
2 痢窓器・灰陶腰器・山茶碗 (第11図96~124／第2表／図版7)

96~124は、痢窓器とその系統の席内焼成土器である。

96~100は、痢窓器の坏の口縁部片である。96~98は、蓋の受け口が作られ、99は、体部から直に広がる口縁、100は、体下部が若干厚らむ器形である。

101~102は、坏蓋の構み部である。101は、扁平な宝珠形、102は、凹形を呈する。103は、坏蓋の縁部である。

104は、平底の坏の底部で、窓内用いられた輪ドテが残着したままの製品である。輪ドテの下部は、引き剥がされた破損面が認められる。105は、底部が高台よりも下に突出する高台付坏で、年代的に7世



第11図 出土實物測量図 (上巻6)

紀末～8世紀初頭に位置付けられている。106は、残存部の水平軸の傾きから皿と判断した。

107～114は、壺または、甕の口縁・頸部片である。107・110の頸部には、流水文が、108には、列点状の連続刺突が施されている。

115～118は、大型の甕または、甕の胴部片であり、各々、外面にタタキ目が残っており、115・116の内面には、青海波文、118の内面には、ヘラナデ調整が確認される。

119～123は、灰釉陶器である。119は、碗、120は、皿の口縁部である。121～123は、断面三日月形の高台を持つ碗の底部である。121・122の底面には、回転糸切痕が残る。

124は、山茶碗である。比較的厚手で、低い高台が貼付けられる。断面より觀察される胎土は、粗い。

3. 輸入磁器・炻器・瓦器・國產陶磁器・土製品（第12図125～168／第3表／図版8～14）

125～134は、中世輸入磁器である。

125は、青白磁の合子蓋で、天井と体部の上下2段に蓮弁文が巡る。

126・127は、白磁の端反碗で、各々体上位内面に126は、1条綱沈線が巡り、127は、総輪挿文が施される。いずれも12世紀後葉の製品である。128は、白磁の口禿碗で、口唇部は、最外縁とそれに直角に重なる内側の2箇所が面取され、脚が外されている。13世紀後半～14世紀前半の製品である。

129～134は、いずれも龍泉窯系青磁製品である。129は、体下位に屈折部がある。本來、見込に割花文が入る皿で、12世紀後葉に比定される。130は、鎬蓮弁文碗で、13世紀中葉～14世紀前葉。131は、外面に、134は、内面に蓮弁文が施される折縁皿で、13世紀後半～14世紀前半。132は、内面に蓮弁文が施される盤の口縁、133は、底・高台部で14世紀代に比定される製品である。

135～141は、中世常滑産灰器である。比較的粒径の大きい長石、石英を胎土に含む。

135・136は、壺または、甕の口縁部で断面N字形を呈す。135は、6a型式（中野1994以下同じ）、136は、9型式に比定される。137は、大型甕の胴部片で、外面には、格子状のタタキ目、内面は、ヘラナデ調整が認められる。138は、玉縁状に折返し、下端を掲み出した、甕の口縁部である。10型式に比定される。139・140は、片口鉢の口縁、141は、底～高台部に当たる。

142は、瓦器の火鉢または、香炉である。外面に連珠・菊花の印文が施される。

143～159は、中世瀬戸・美濃系陶器である。

143は、削出高台の皿で、外面の一部に灰釉が付着する。144・145は、折縁皿で、内外面ともに灰釉が塗布される。145の内面には、蓮弁文が施されており、大窯第4段階に比定される。

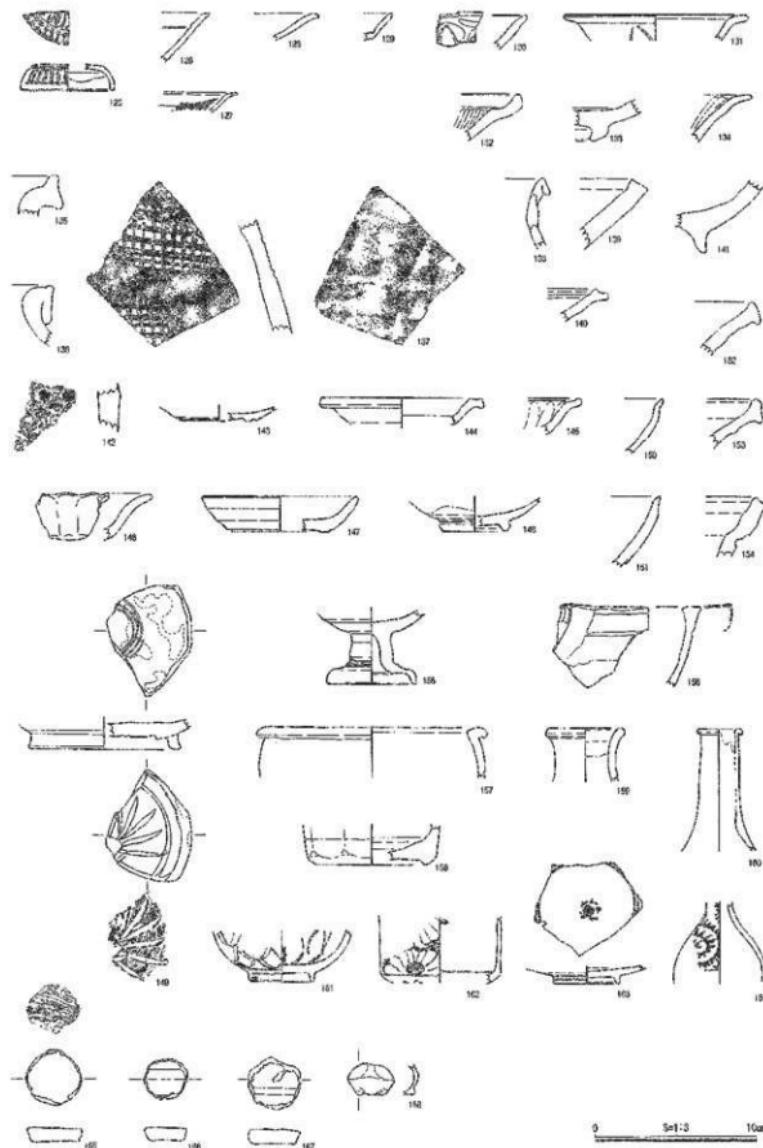
146・147は、厚く長石釉（志野釉）が塗布された皿類で、146は、菊皿、147は、丸皿である。148は、内底面に幅9mm程度を環状に残し、灰釉を塗布した輪禿皿である。いずれも17世紀代に比定される製品である。

149は、底～高台部が残存する陶器で、底内面に同心円状の沈綱文が施され、灰釉が塗布されている。底外面には、回転糸切痕が残り、焼成前にヘラ状工具で放射状の刻みが入れられる。貼付高台で、胎土は、須恵質であるが、具体的年代は、特定出来ない。

150・151は、天目茶碗である。いずれも内外面に鐵釉を厚く塗布する。

152～154は、擂鉢の口縁部である。152・153は、大窯期、154は、18世紀後半に比定される。155は、仏龕具である。墨灰釉が塗布される。18世紀前半に比定される。156は、18世紀後半に比定される片口、157は、19世紀前半に比定される練鉢である。いずれも内外面に灰釉が塗布される。158は、八角形の香炉で、外面を面取りし、鐵釉を塗布している。159・160は、18～19世紀代の瓶の口縁～頸部で鐵釉が塗布される。

中世瀬戸・美濃系陶器は、このほかにも、各種皿類（縁禿皿・端反皿・折縁皿・鉢皿・灯明皿）、



第12圖 出土遺物總圖 (上卷 7)

碗（天目碗・壓錦茶碗）壺・花瓶・鉢類が、また、近世肥前系陶器（三島手の鉢）も少數出土している。しかし、器形などの内容を十分に復原出来るだけの情報を持たない小片がほとんどであり、図示に耐えられないため、代表的なものを集合撮影して図版掲載した。

161～164は、近世肥前系磁器で、いずれも染付である。161は、外面に二重の網目文が描かれた丸碗で、17世紀中葉以降に比定。162は、外面に菊花文が描かれた筒型の湯呑み用碗、163は、見返に中央に退化した五弁文が入れられる底面が比較的平坦な碗、164は、外面に鶴唐草文が描かれた瓶で18世紀後半～19世紀に比定される製品である。

165～167は、土器片の周囲を研磨して円盤状に加工した土製品である。165は、弥生土器または、土器部を、166・167は、内外面ともに鉄軸が塗布された陶器（描鉢？）を素材としている。

168は、近世に比定される人形とみられる土製品の一部である。全体的に中空に形成し、脚と目される小突出部を設けている。

(2) 瓦（第13図169～178／第4表／図版9・14）

169は、古代の軒丸瓦である。山田寺系の迦陵文軒丸瓦の一部で、残存する瓦当中央部は、厚く（最大厚37mm）、中房は、2段ある。大振りな蓮子の配置は、1+6と推定され、市ヶ原廬寺出土の三重圓文輪単弁八弁迦陵文軒丸瓦（8世紀前半に比定）と近似している。

170～177は、古代の平瓦である。いずれも凹面に布目痕を残し、174～177の凸面は、正格子叩きで成形されている。

これら古代瓦の胎土含有物には、カワゴ平パミスとみられる硅石粒が認められ、内部の施色成色調が橙色系を呈する個体も多数ある。その特長から、生産地は、現伊豆の国市に所在していた花坂瓦窯群と推定される。

178は、近世・近代とみられる軒丸瓦である。瓦当部の文様は、連珠文と巴文から成る。

(3) 石器・石製品（第14図179～187／第5表／図版3・8・14）

179は、輝石安山岩円盤を、180は、閃綠岩円盤を素材とした敲石である。それぞれ端・縁辺部に敲痕が並ぶ。弥生時代の所産か。

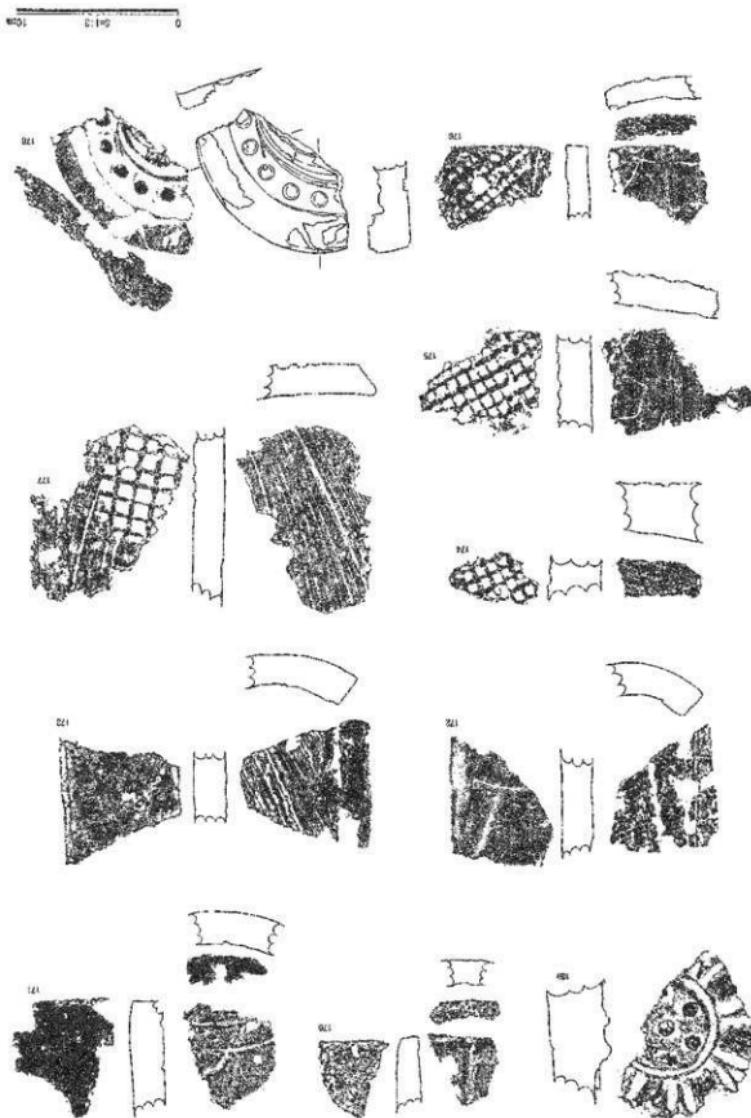
181は、清石製の石製儀禮品である。円板に加工した後、2箇所を回転穿孔する。182は、碧玉製の管玉である。古墳時代の製品である。

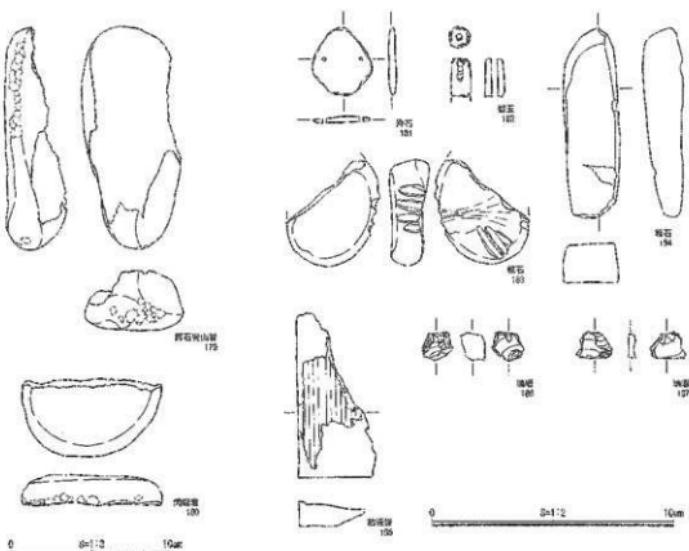
183・184は、軽石製の紙石である。183の複数面に棒状の擦痕（石材切り出しの際の擦痕か）が認められた。片側平面が使用に伴う消耗で、浅いV字形を呈している。184もまた、側面に1箇所、棒状の擦痕がある。全面を使用面とし、縦筋形を呈している。185は、粘板岩製の鏡である。186・187は、瑪瑙製の火打石で、どちらも多方向からの打痕が認められ、消耗・欠損し、小形化している。これらは、近世・近代の製品とみられる。

(4) 金属製品（第15図188～193／第6表／図版2・3・14）

188は、小鋼鏡で、尖鈕釦式銅鏡の小型品または、襷懐具と考えられる。計測値は、高さ126mm、径高28mm、舞部の長径34mm、同短径25mm、最大幅69mm、裾部短径39mmである。鏡身の正面は、舞から裾に向けて直線的に開く。鏡は、兜形を呈し、計5条の尖帶が表現される。鏡から裾部下端部まで縁が連続する。鏡身の上半部と裾部に表裏各々、2孔1対ずつ（計8箇所）長方形の型持孔が設定されるが、A面左下側の型持孔は、孔型が残るのみで開いていない。裾部外面に横位の綾杉文の文様帯が1条巡る。裾部の内面には、断面蕭鉢形の突帯が1条巡る。全体的に薄い作りになっており、製作の際の湯流れが不充分

图134 井干山带盖陶罐 (三)





第14図 出土遺物実測図（石器・石製品）

のため、発生した「巻」、「抜け」部分が複数箇所確認される。今回の調査区の東部（C-14グリッド北西。検出標高12.250m）の砂礫層下位（包含層最下位）より出土したが、周辺に掘り込み・落ち込み等は、確認されなかった。

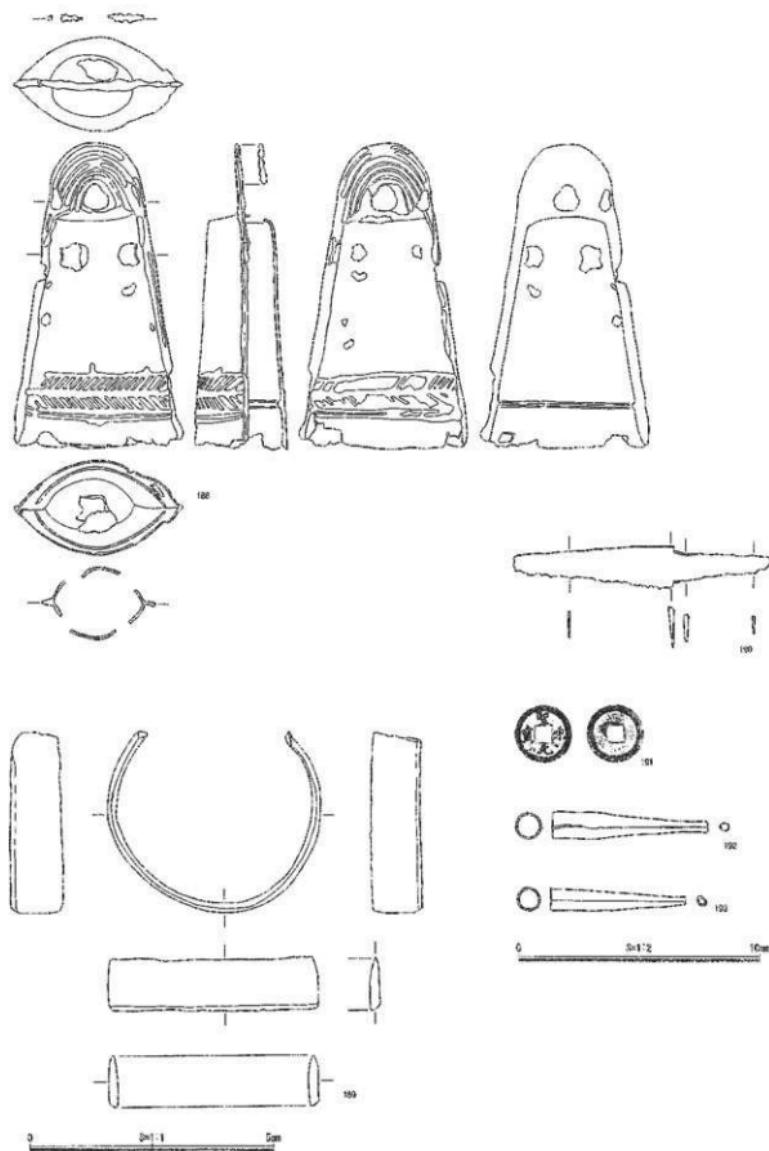
189は、帯状円環型鏡剣の再加工品である。推定径65mm程度の帯状円環型銅鏡をほぼ半分に切断した後、その片方を大きく3箇所で崩壊して、あらためて環状に加工する。環帶端部には、切り離し時に生じた角線の折曲が確認される。鋸帶の断面は、楔形で、幅10mm、厚さ2mm、展開長は、108mmを測る。小鏡鑄から北東側に5.7m離れた（現御殿川流路下流側）。D-15グリッド北西。検出標高12.316m）同層位中より出土した。

188・189の帰属時代については、同一層中より出土している残存率の比較的高い土器から判断し、弥生時代後期～古墳時代前期とする。

190は、鉄製の刀子である。

191は、中世渡来銭貨の聖宋元寶である。初綱年は、北宋の建中靖國元（1101）年であり、銘文は、行書体である。

192・193は、真鍮製の煙管の吸口である。両者とも内部に炭化した縦字の一部が残存していた。193の銛え部分が前歯の噛み潰しに起因するものか、横断梢円形に変形している。近世・近代に比定される。



第15図 出土遺物実測図（金属製品）

(5) 木製品（第7表）

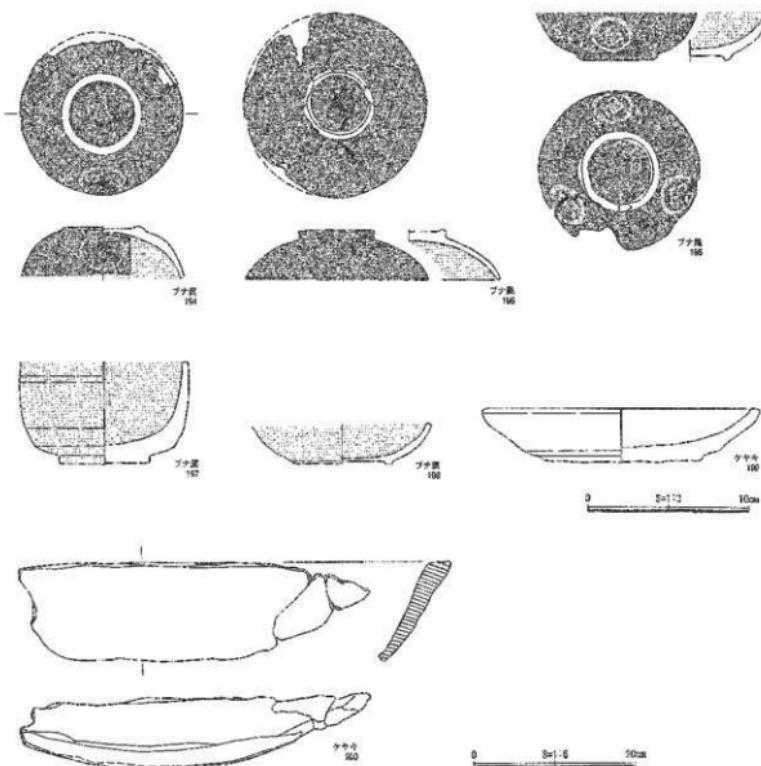
今回調査では、打設されていた部材（杭）を除いた木製品の多くは、御殿川増水後の灌水部に溜まった漂着物とみられ、調査区南部の最終堆積砂層中より集中して出土した。出土状況から、埋蔵時代は、近世・近代に比定される。

箸、栓、円板類を始めとして、欠損品を含め、大量の出土を見ており、遺存状況の良好である代表的なものを選別して掲載した。図示した資料75点の素材樹種の詳細とその分析については、45頁からの付録1を参照されたい。

1 容器（第16図194～200／図版15・16）

194～198は、漆塗容器である。全て素材の樹種は、ブナ属で、木取りは、横木取りである。

194・195は、漆塗椀蓋である。194は、内面に赤色、外面に黒色の漆が塗布される。把手見込（頂部）に草花、体部に3箇所、丸に横の文様が配される。195は、内面に赤色、外面に黒色の漆が塗布され、頂～体部に渡り、花弁の芯部を赤、他を黒で、菊花葉文様を描いている。



第16図 山土遺物実測図（木製品1）

196～198は、漆塗椀である。196は、内面に赤色、外面に黒色の漆が塗布される。体部に3箇所、赤塗で、丸に四つ菱文様が配される。197・198は、内外面とも赤色の漆が塗布される。

199は、皿である。欠損しているが、高台を備えていた痕跡がある。ケヤキを素材とする。

200は、楕である。口縁上面部を広く平坦につくり、器下位になるにつれ、器厚が薄くなる削り物である。ケヤキを素材とする。

2 食事具（第17図201～206／図版16）

201～203は、箸である。その横断面は、基～中央部は、扁平に、先端は、円に近い多角形に加工される。素材は、スギとモミ属である。

204は、やや内湾したクリの柾目取り材の加工品で、その形状から、しゃもしの可能性がある。

205は、杓杓である。柄の一部と底板は、残存していない。外面は、黒色で、漆が塗布されていた可能性がある。杓部は、ヒノキの側板を櫛縞によって継じる。側板上端部を丸く削り、注ぎ口を作っている。断面長方形の柄（トウヒ裏を素材とする）は、杓側板縫口の脇のはば中央から斜方向に貫通させ、内側に木釘を打ち、先端を反対側の側板下位に差し込んで固定する。

206は、漆塗のサワラ素材の底板を軽用した俎板である。表裏両面に無数の刃痕が刻まれている。

3 柄（第18図207～222／図版15）

207～209は、棒状の下栓である。握部の断面形は、角線を落とした正方形で、基部も同様に角線を落としている。栓部の断面形は、ほぼ円形で、握部根本から先端に向けて緩やかに収束して細くなる。208の先端部は、変色している。いずれもヒノキを素材としている。

210～222は、逆台形の上栓である。径2～5cm大で、いずれも上面径と下面径の比差は、少なく筒形に近い形状をしている。比較的小形のものは、ヒノキ、大形のものは、スギが素材に用いられる傾向がある。

4 盖板・側板・底板（第18・19図223～239／図版17・18）

223～233は、蓋板である。素材は、モミ属・サワラ・ヒノキ・トウヒ属・スギが選択されている。いずれも中央に櫛縞の貫道やその穿孔等の把手を留めていた痕跡が認められる。233は、中央に木釘が打ちされていた。231は、表面に焼け焦げた痕が残っていた。232は、黒色を呈しており、漆が塗布されていた可能性がある。

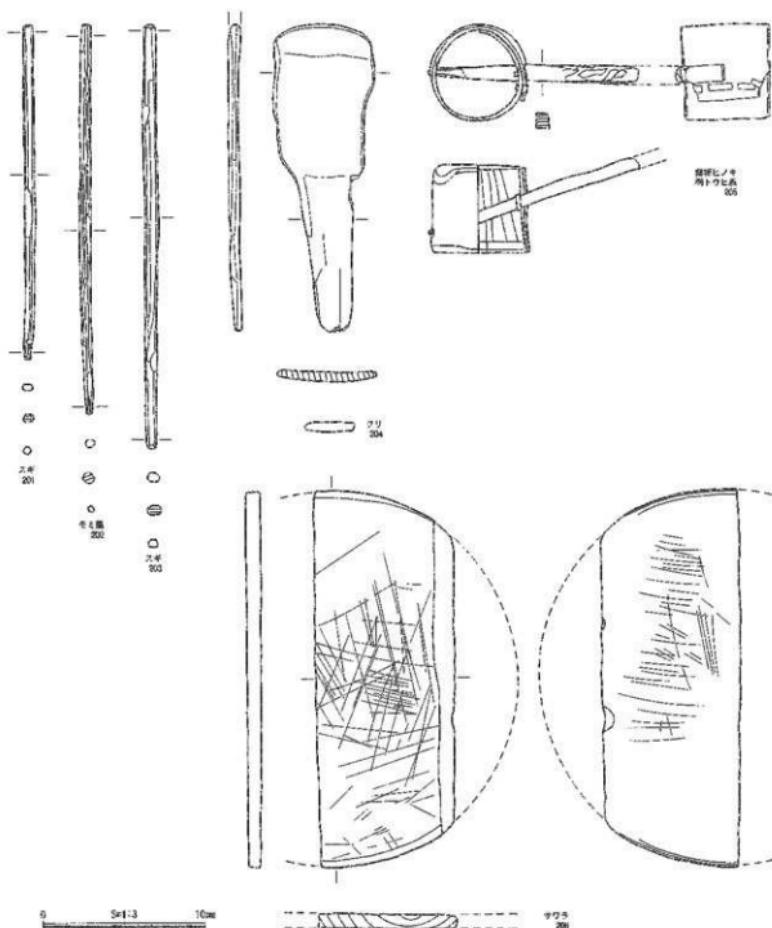
234は、桶の側板である。下端部を段状に加工する。イチイを素材とし、黒漆が塗布されている。

235～239は、桶・舟物類の底板である。素材は、モミ属・ヒノキ・トウヒ属が選択されている。238は、墨漆が塗布されている。

5 下駄（第20・21図240～248／図版19・20）

240・241は、草履下駄である。いずれも前方を厚く、後方を薄く作る。240は、中位部では、両縁から抉る加工して、横断面は、船底形を呈す。縫穴は、前に1箇所、後に2箇所設定され、上面側は、深い皿（または、実研）状に彫りこまれていている。また、後縫穴には、それぞれ、縫方向に二つの小穿孔が並び、後ろ側に木釘が残存していた。素材は、マツ属である。241は、裏面の前後縫穴間が長方形に削り抜かれ、この部分の横断面は、凹形を呈す。素材は、クリである。右側後縫穴に鼻緒の一部である、撚られた棕櫚状の繊維が残存していた。

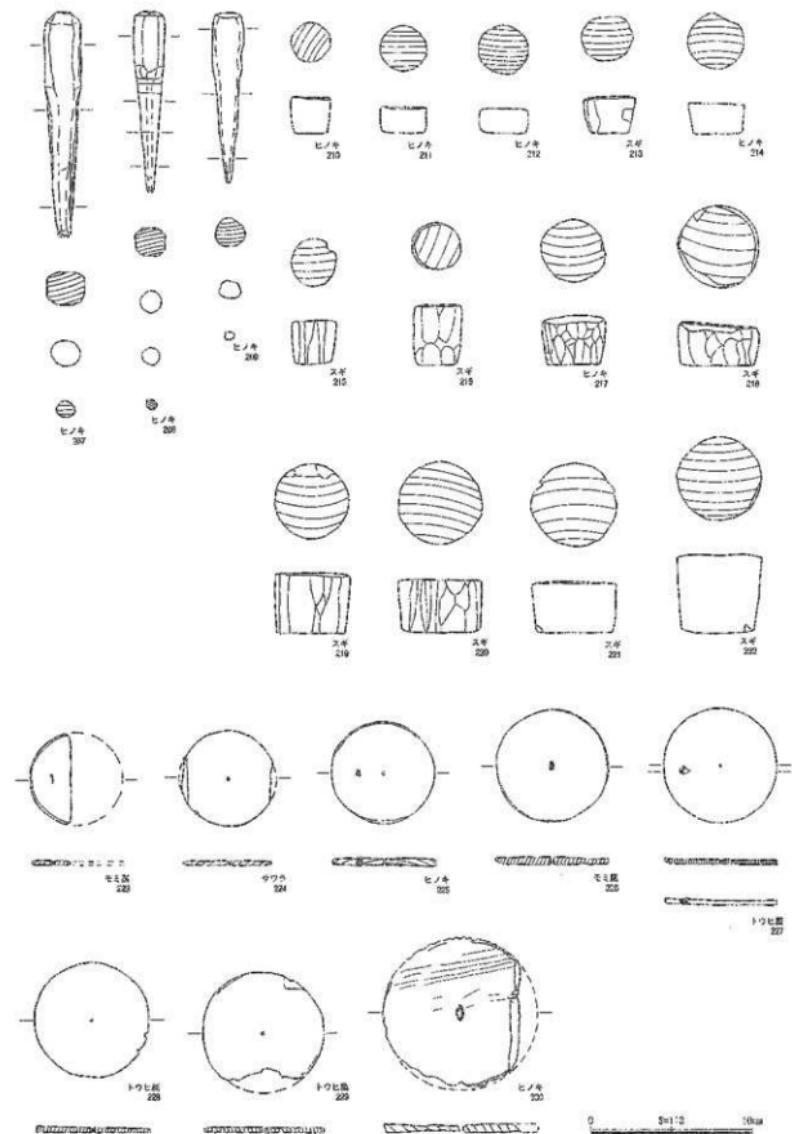
242・243は、一本作りの遮歛下駄である。242は、平面椭円形を呈し、後縫穴は、後曲の前側に設定



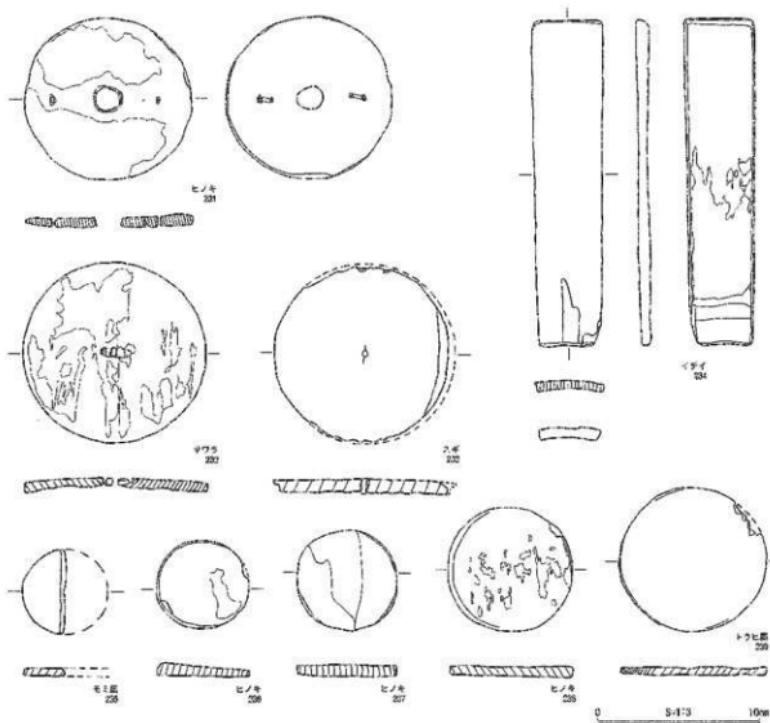
第17図 出土遺物実測図（木製品 2）

されている。素材は、クリである。243もまた、梢円形を呈す。後縫穴は、後歯の後ろ側に設定されている。前・後縫穴のほか、前歯の位置する上面側より、2箇所穿孔が（片側1箇所は、未貫通）なされている。素材は、エゴノキ属である。

244～247は、いずれも本体中位の横断面形が船底形を呈す差歛下駄である。244の後縫穴は、後歯よりも前側に設定されている。前後2条の差込溝に歯が固定されており、本体に枘穴と歯に枘差込部分は、作られていない。本体・前後の歯とともに素材は、キハダである。245は、後縫穴が無い。差歛固定用の



第18図 出土遺物実測図（木製品3）

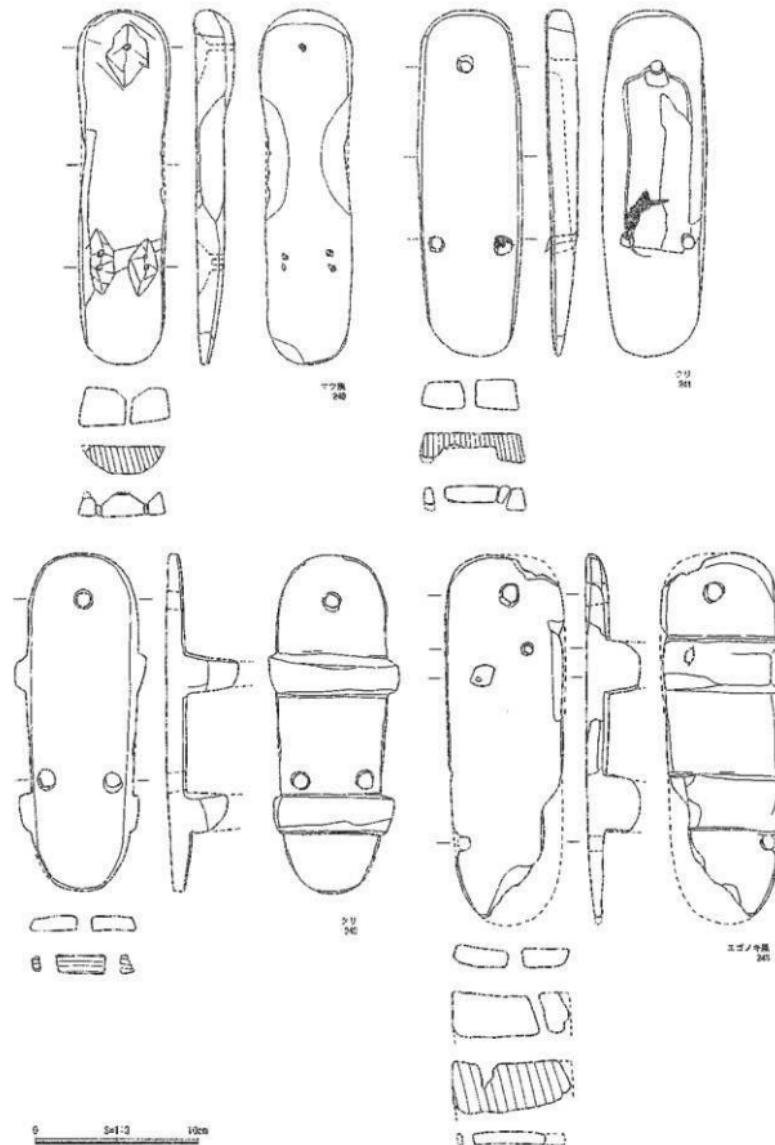


第19図 出土遺物実測図（木製品4）

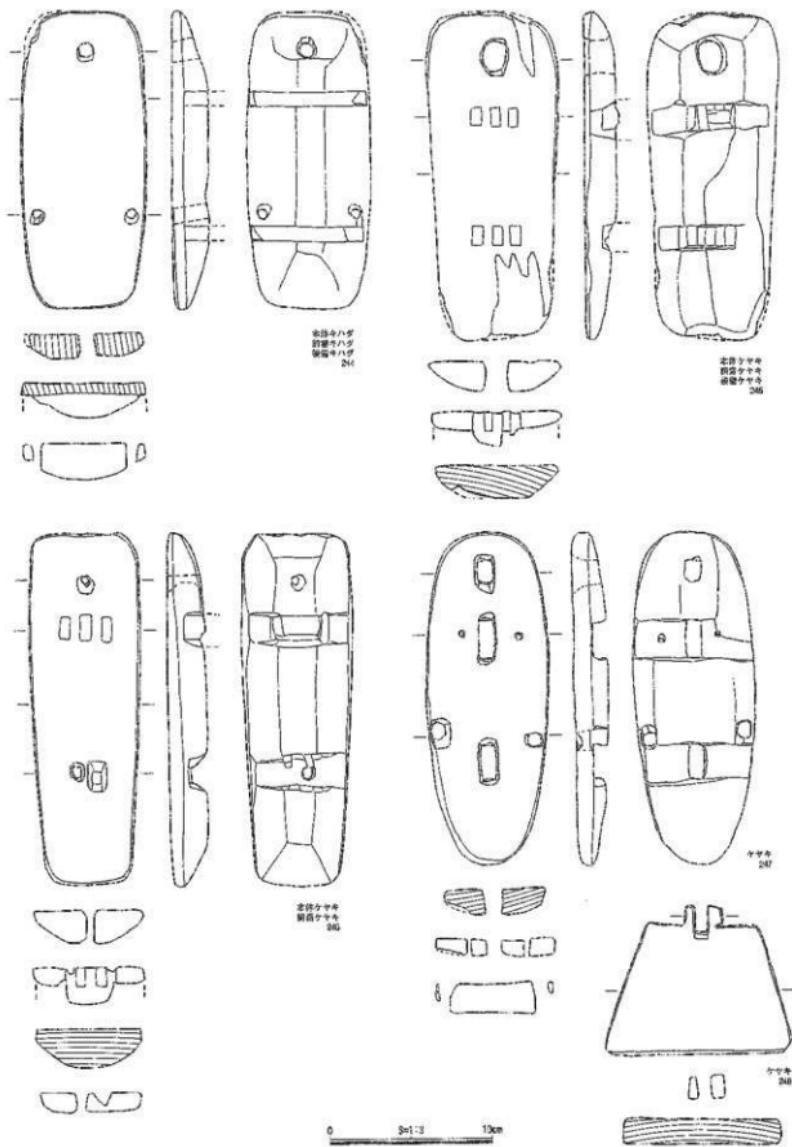
長方形の納穴が前方3箇所、後方3箇所設定されている。本体・前後の歯ともに素材は、ケヤキである。246もまた、後緒穴が無い。差歛面定用の柄穴は、前方3箇所、後方2箇所設定されているが、後方の右側の差込孔は、未貫通である。こちらも本体・前歯とともに素材は、ケヤキである。247の後緒穴は、後歯よりも前側に設定されている。差歛面定用の長方形の柄穴が前・後方それぞれ中央に1箇所設定されており、前方柄穴の両脇に釘穴がある。歯は、前後とも残存しておらず、下駄本体の素材は、ヒノキである。248は、下駄の差歛である。上部に柄差込部分が2本作られている。素材は、ケヤキである。近代三島町は、戰後に至るまで、手工業が盛んであり、下駄・傘等の生産量が多かった。緒穴や歯固定用柄穴が開いていないケヤキ材組下駄の未製品は、御敷川上流周辺の工房で発生した失敗品廢棄物の可能性がある。

6 その他の木製品（第22・23図249～261／図版20・21）

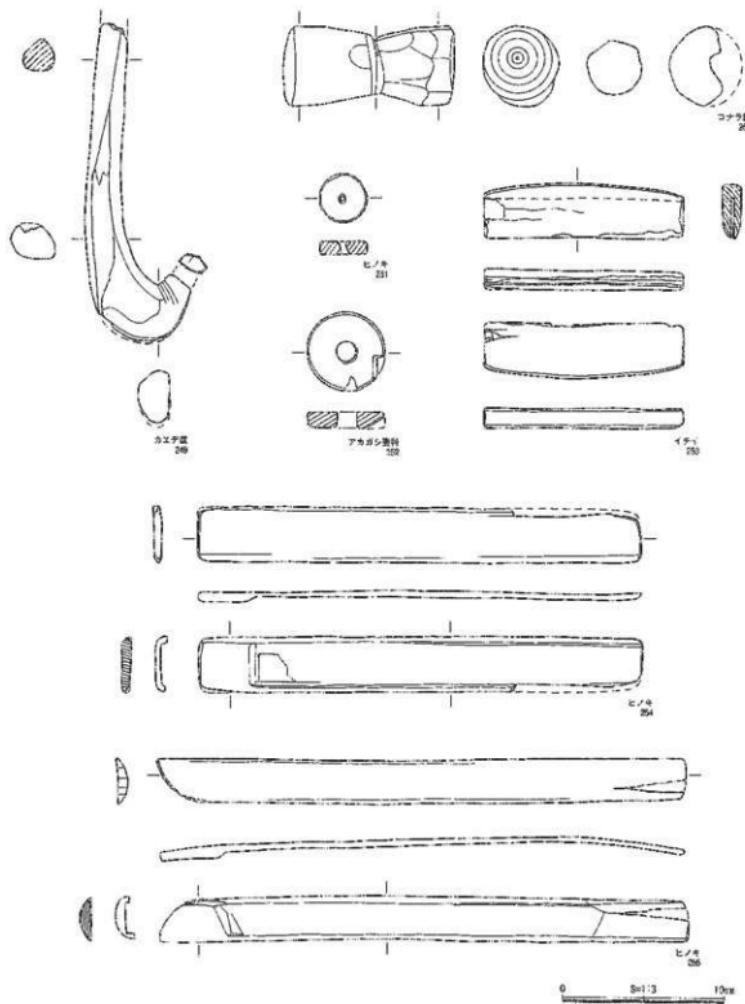
249は、カエデ属を素材とした自在鉤である。250は、コナラ節の芯持ち材を鼓形に削りだした繩錆で、中央の一部に切り込みを入れている。251・252は、紡錘草とみられる中央に穿孔された厚手の円板であ



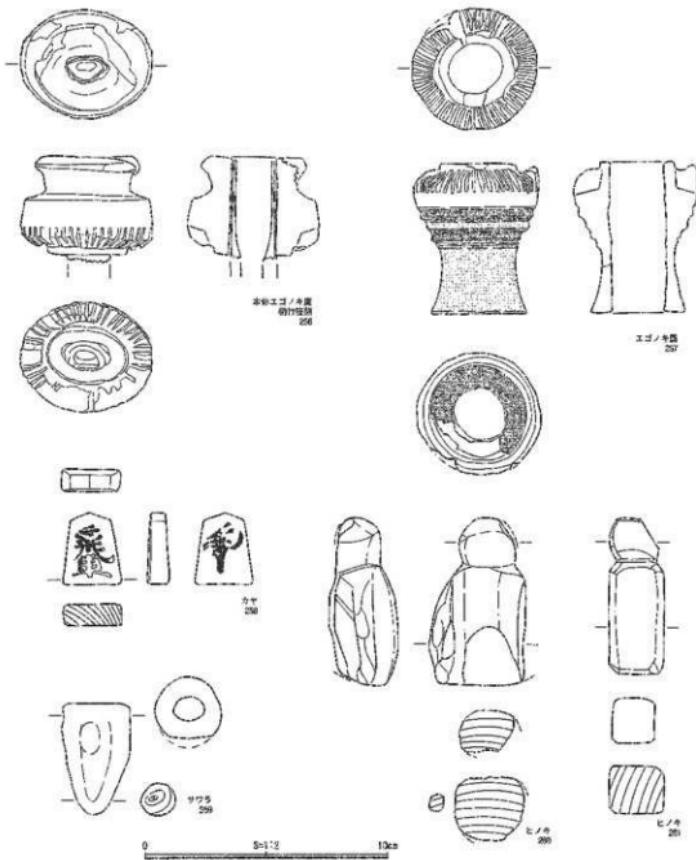
第20圖 出土遺物実測図(木製品 5)



第21図 出土遺物実測図(木製品 6)



第22図 出土遺物実測図(木製品7)

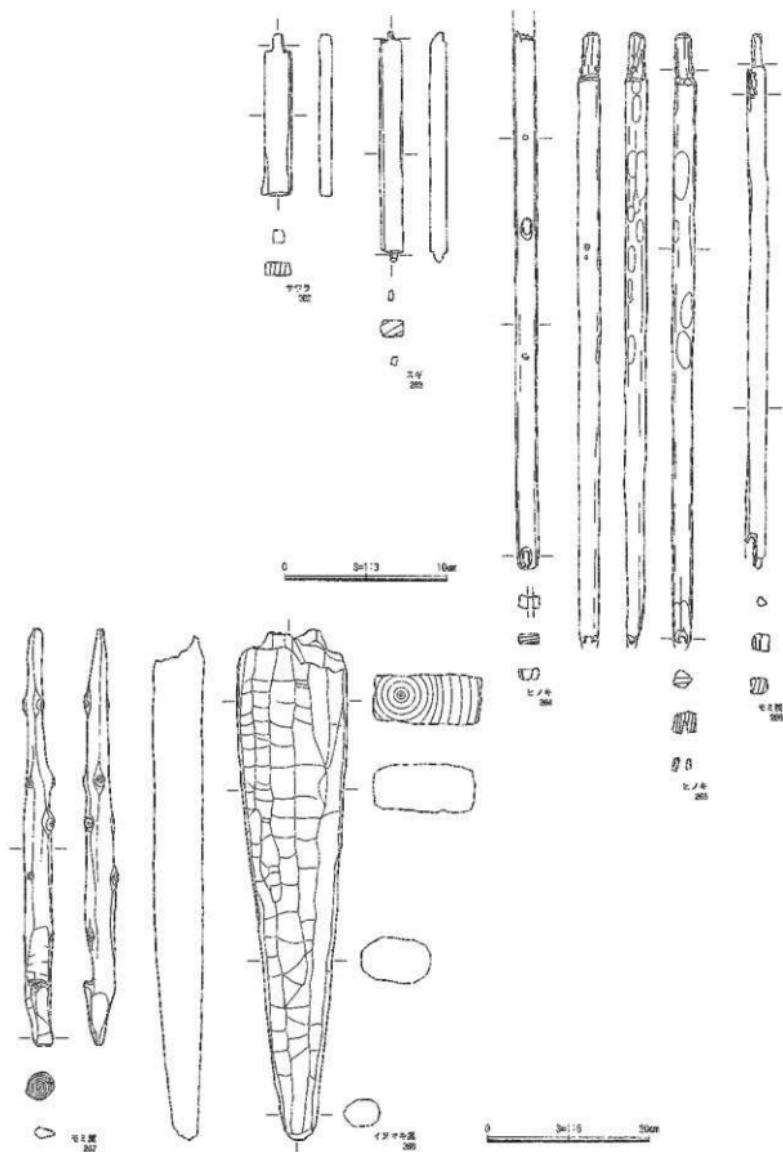


第23図 出土遺物実測図（本巣山8）

る。251は、ヒノキを素材とする。外縁最大径は、30mm、中央穿孔の径は、4mm大で、表裏両面から磨けられているが、若干ズレを生じている。252は、アカガシ亜科を素材とする。外縁最大径は、48mmで、中央円孔径は、12mmを測る。

253は、刃物の柄または、包丁の柄である。イチイを素材とし、外面には、漆が塗布されている。254・255は、刀の柄である。ともにヒノキを素材とする。

256・257は、傘籠軸である。256は、頭籠軸で、傘骨を嵌める溝は、残存部の状況から、推定50本前後とみられる。中央に挿入された傘の柄の一部が残存する。軸軸本体の素材は、エゴノキ属、柄の素材は、竹籠類である。257は、漆塗の手元籠軸で、先に黒漆を塗布した後、条の下面や手元部に赤漆を塗布する。傘骨を嵌める溝は、推定54本。素材は、エゴノキ属である。



第24圖 出土遺物実測図（木製品 9）

258は、将棋の駒である。材面に直接墨書きがされており、表面に「飛車」、裏面に「駒」字の一部が読み取れる。素材は、カヤである。

259は、サワラを素材とした円錐状の木製品である。上端中央を深さ12mm程度削り抜き、窄まる下端を丸く加工する。外観的特徴から叩き楽器の可能性がある。

260・261は、木彫像である。人物を象り、頭部と胴体部を削り出している。260は、腕を作り、全体的に丸みを帯びるが、261は、四肢の作り出しをせず、頭部・胸部に相当する箇所の横断形は、角線を落とした方形である。どちらもヒノキを素材とする。

7 部材類（第24図262～267／図版21）

262～266は、柄材である。262は、サワラを素材とし、残存する片側端部に、263は、スギを素材として、両端部に枘差込を作り出している。264は、ヒノキを素材とする四角細律の途中に長方形の枘穴が2箇所設定され、ほかに2箇所、木釘が打たれている。265もヒノキを素材とする四角細律で、片側端部に枘差込部分、反対側端部に長方形の枘穴を設定している。枘差込部分に2箇所、本体に1箇所、木釘が打たれている。266は、モミ属を素材とする四角細律で、片側端部に枘差込部分、反対側端部に長方形の枘穴を設定している。264～266は、格子状に組み立てられる部材であり、障子の棊のようなものが推定される。

267は、杭で、モミ属の筋が残る丸太加工材を転用したものである。先端部は、打設時に生じた潰れが観察される。268は、イヌマキ属を素材とした矢板である。表裏両面に削りだしの加工痕が認められる。267同様、先端部に打設時に生じた潰れが観察される。

（6）種子類（図版14）

包含層中からは、植物遺体である胡桃や桃または、梅の種子が多数出土している。いずれも食用となる部分があり、焼については、祭祀行為との関わりも考慮されるが、半割状態にあった胡桃の種子で、胚部分が取り出されず残っていた個体があり、自然物か、栽培物・人為的な採集物であるかとの判断がつきかねた上、帰属時代も不明であるため、参考資料として、集合撮影して、写真図版に掲載した。

第1表 土器総観表1（縄文土器・弥生土器・土師器・中世窯焼土器）

番号	団体名	出土地名	内訳	出程	測量締合	測定値	計測値	形状		出土状況	出土品名	文様・器面模様	備考
								内面	外側				
1 5 3	近文 土器	井戸	切削	1/100倍	既存品Ges	5.975±0.005cm	5.975±0.005cm	10.975±1.000cm	10.975±1.000cm	内面：手動仕事台を用いた南北方向の小孔 外：點打き留め	新石器時代 中期後半。 資料：さざけ 本体：木		
2 6 3	近文 土器	鉢中底～ 鉢上部	切削 1/100倍	既存品Ges 既存品Ges		2.575±0.005cm 2.575±0.005cm	2.575±0.005cm 2.575±0.005cm	2.575±0.005cm 2.575±0.005cm	2.575±0.005cm 2.575±0.005cm	内面：横・縦方向の切削孔。 外面：既存品Gesに既存品Ges。	新石器時代 中期後半。 資料：さざけ 本体：木		
3 6 6	近文 土器	鉢上部～ 鉢上部	切削 1/100倍	既存品Ges		7.575±0.2 に少し誤差	7.575±0.2 に少し誤差	7.575±0.2 に少し誤差	7.575±0.2 に少し誤差	内面：既存品Gesと並んで上方に丸打で る小孔群。下方は二重丸打を施した 丸打により更に内底面、底盤両面 に凹凸が現れる。	内面：既存品Ges。		
4 6 6	近文 土器	鉢	切削 1/100倍	既存品Ges		7.075±0.3 に少し誤差	7.075±0.3 に少し誤差	7.075±0.3 に少し誤差	7.075±0.3 に少し誤差	内面：序盤の段階で大きめに丸打し た後、竹製工具を丸底を向いた位置 を先方側に置いて多打に成る。底盤 底面の縦溝を認める。	底盤大きい。		
5 6 6	近文 土器	鉢上部	切削 1/100倍	既存品Ges		2.675±0.4 に少し誤差	2.675±0.4 に少し誤差	2.675±0.4 に少し誤差	2.675±0.4 に少し誤差	内面：既存品Gesと並んで丸打を施す。 外：既存品Ges			
6 5 2	近文 土器	口縁～ 腰部分	切削 1/100倍	既存品Ges		10.775±0.2 に少し誤差	10.775±0.2 に少し誤差	10.775±0.2 に少し誤差	10.775±0.2 に少し誤差	内面：既存品Gesを複数した後、赤 色の漆喰を充填して丸打を施す。赤 色の漆喰が内側に残る。	内面：既存品Ges		
7 6 8	近文 土器	口縁	切削 1/100倍	既存品Ges 既存品Ges		2.575±0.2 に少し誤差	2.575±0.2 に少し誤差	2.575±0.2 に少し誤差	2.575±0.2 に少し誤差	内面：既存品Gesを複数した後、赤 色の漆喰を充填して丸打を施す。 内面：既存品Ges。	底面に 既存品Ges。		
8 5 8	近文 土器	腰下部～ 腰部分	切削 1/100倍	既存品Ges 既存品Ges		9.750±0.2m 9.750±0.2m	9.750±0.2m 9.750±0.2m	9.750±0.2m 9.750±0.2m	9.750±0.2m 9.750±0.2m	内面：既存品Gesを複数した後、赤 色の漆喰を充填して丸打を施す。	底面に 既存品Ges。		

番号	深積 堆積 層名	内面	外縁	被覆	地表形	剖面	全周		出土物	文獻・参考文献	備考	
							内面	外縁				
5	8	3	低窪 口縁壁	口縁～ 底縫	1/6切替 1/6底縫	底窪口縫 底縫高10mm 底窪高32mm	DE=10mm 底窪高10mm 底縫高10mm 底窪高32mm	10YR6/4 に少し黄褐色	10YR6/3 に少し黄褐色	石英・白各色子・ 黑色粒子(少見)	外縁：口縫傾斜のハケ傾斜の底、下縫 間にハケ工事残構による底側傾斜。 底窪底面ハケ工事による底、中・下 縫に底側傾斜のハケ傾斜。頂上は上 縫に底側傾斜のハケ傾斜。底窪底 の取除れ又はハケ工事による底側傾 斜の底面ハケ傾斜の底、底窪底 のミラクル面。	
19	6	3	底口縫	口縁～ 底子段	1/6底縫 1/6底縫	底窪口縫9mm 底縫高10mm 底窪高10mm	10YR6/5 灰白色	10YR6/2 灰褐色	石英・白・黑色粒子	外縁：底窪傾斜・柄側面ハケ傾斜、底窪 傾斜方向にミラクル面、底窪底面ハケ 工事傾斜による底側傾斜。頂上は上 縫に底側傾斜のハケ傾斜を呈す。底窪底 のミラクル面。		
11	6	3	基	基～ 窓の中位	1/6切替 1/6底縫	底窪口縫5mm 底窪高12mm	10YR6/2 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	白色子・ 黑色粒子(少見)・ 灰色粒子	外縁：底窪傾斜・柄側面ハケ傾斜、頂上は上 縫に底側傾斜のハケ傾斜、底窪底面ハケ 工事傾斜による底側傾斜。頂上は上 縫に底側傾斜のハケ傾斜を呈す。底窪底 のミラクル面。		
12	7	6	底窪口縫	口縁傾	1/4底縫	底窪口縫5mm 底窪高4mm	10YR6/3 に少し黄褐色	10YR6/3 に少し黄褐色	石英・霞	外縁：底窪傾斜のミラクル面。		
13	7	6	低窪 口縫底	口縁～ 底上位	1/6底縫	底窪口縫15mm 底窪高10mm	5YR6/5 に少し黄褐色	5YR6/5 に少し黄褐色	石英・白色粒子	外縁：底窪傾斜のハケ傾斜の底、底窪 底面ハケ工事による底側傾斜。		
14	7	6	低窪 口縫底	口縁～ 底上位	1/6底縫	底窪口縫15mm 底窪高10mm 底窪高5mm	5YR6/5 灰白色	10YR6/2 灰褐色	石英・石英・ 白色子	外縁：底窪傾斜のハケ傾斜の底、底窪 底面ハケ工事による底側傾斜。	複数あり。	
15	7	4	低窪 口縫底	口縁～ 底上位	1/6底縫	底窪口縫15mm 底窪高10mm 底窪高5mm	7.5YR6/3 に少し黄褐色	7.5YR6/4 に少し黄褐色	石英・石英・黑色粒子 字	外縁：底窪傾斜のミラクル面。		
16	7	6	低窪 口縫底	口縫	1/6底縫	底窪高20mm	10YR6/3 に少し黄褐色	10YR6/3 に少し黄褐色	石英・白・ 黑色粒子	外縁：口縫底傾斜・底窪底面ハケ傾斜の底、底窪 底面ハケ工事による底側傾斜。頂上は上 縫に底側傾斜のミラクル面。		
17	7	5	低窪 口縫底	口縁～ 底上位	1/10底縫	底窪高10mm	7.5YR6/6 灰褐色	10YR6/3 灰褐色	分離	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。底窪底面ハケ 工事による底側傾斜、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
18	7	6	低窪 口縫底	口縁～ 底上位	1/10底縫	底窪高10mm	5YR7/4 に少し黄褐色	5YR7/4 に少し黄褐色	石英・石英	外縁：口縫底傾斜・底窪底面ハケ傾斜の底、底窪 底面ハケ工事による底側傾斜。頂上は上 縫に底側傾斜のミラクル面。		
19	7	5	底窪 口縫底	口縁～ 底上位	1/10底縫	底窪高20mm	7.5YR7/3 に少し黄褐色	7.5YR7/2 明褐色	白・ 黑色粒子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
20	7	6	底窪 口縫底	口縁～ 底上位	1/10底縫	底窪高20mm	10YR6/2 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	白・ 黑色粒子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
21	7	6	底窪 口縫底	口縁～ 底中位	1/9底縫	底窪另口縫10mm 底窪高10mm 底窪高10mm	10YR6/3 に少し黄褐色	10YR6/3 に少し黄褐色	石英・(少見)・ 白色子・ 黑色粒子(多量) 白色子(少見)	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。頂上は上 縫に底側傾斜のミラクル面。	複数あり。	
22	7	4	底窪 口縫底	口縁～ 底縫	1/4底縫	底窪另口縫10mm 底窪高10mm 底窪高10mm	10YR6/3 に少し黄褐色	10YR6/3 に少し黄褐色	石英・ 白色子	外縁：口縫底傾斜のハケ傾斜。底窪 底面ハケ工事による底側傾斜。		
23	7	6	底窪 口縫底	口縫	1/10底縫	底窪高4mm	7.5YR6/4 灰褐色	7.5YR6/4 灰褐色	石英・ 白色子	外縁：口縫底傾斜のハケ傾斜。	複数あり。	
24	7	6	底窪 口縫底	口縫～ 底上位	1/10底縫	底窪高4mm	10YR6/2 灰褐色	2.5YR7/2 灰褐色	白・ 黑色粒子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
25	7	5	底窪 口縫底	口縫～ 底上位	1/10底縫	底窪高4mm	7.5YR6/4 に少し黄褐色	10YR6/4 に少し黄褐色	石英・ 白色子	外縁：口縫底傾斜のハケ傾斜。底窪 底面ハケ工事による底側傾斜。		
26	7	6	底窪 口縫底	口縫～ 底上位	1/10底縫	底窪高4mm	10YR6/2 灰褐色	2.5YR7/2 灰褐色	白・ 黑色粒子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
27	7	5	底窪 口縫底	口縫～ 底上位	1/10底縫	底窪高4mm	7.5YR6/4 に少し黄褐色	10YR6/4 に少し黄褐色	石英・ 白色子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
28	7	6	底窪 口縫底	口縫	1/10底縫	底窪高4mm	10YR6/4 に少し黄褐色	10YR6/4 に少し黄褐色	白・ 黑色粒子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
29	7	4	基	基～ 窓	球状6/1	底窪另口縫7mm 底窪另口縫10mm 底窪另口縫10mm	10YR6/4 に少し黄褐色	10YR6/4 に少し黄褐色	石英・ 白色子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。		
30	7	6	小窓底	口縫等	1/6底縫	底窪口縫24mm 底窪高4mm	10YR6/4 に少し黄褐色	10YR6/4 灰褐色	石英・霞	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。	内井耕一参考書。	
31	7	6	小窓底	口縫等	1/6底縫	底窪口縫24mm 底窪高4mm	10YR6/4 に少し黄褐色	10YR6/4 灰褐色	石英(少見)・ 白色子	外縁：底窪底面ハケ傾斜の底、底窪底面ハケ 工事による底側傾斜。	内井耕一参考書。	

番号	種類 別名	種類 別名	内容	記録	所持部位	所持率	新規登録	色相	紹介者有り	文様・基準構成	備考
30	7	6	小腰袋	腰袋	1/6腰袋	中腰袋式大袋6mm 腰袋6mm	7.2.VSY6/2 腰袋	石灰・白色粒子	内面：綿上生地指紋模様。	直角底あり。	
31	7	4	小腰袋	腰袋	4/6腰袋	腰袋6mm 腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	薄青（多色）・ 黑色粒子	内面：綿260g/m ² 。	直角底あり。	
32	8	6	五	腰袋生～ 腰中袋	1/5腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	白色粒子 黄色子	内面：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
33	8	6	五	腰袋	1/6腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 腰袋	白色	外面：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
34	8	3	五	腰袋～ 中袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/4 にない腰袋	青石・石英・ 白色粒子	外面：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
35	8	4	五	腰袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・石英・ 白色粒子（多色）	外面：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
36	8	4	五	腰袋～ 腰袋	1/2腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子（多色）	外面：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
37	8	0	五	腰袋	日替1/1	腰袋6mm 腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	白色粒子 黑色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
38	8	4	五	腰袋～ 腰袋	日替1/1	腰袋6mm 腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・石英・ 白色粒子（多色）	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
39	8	4	五	腰袋～ 腰袋	1/2腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子（少・多） 黑色粒子（多色）	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
40	8	5	五	腰袋～ 腰袋	1/2腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
41	8	5	五	腰袋	1/2腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
42	8	5	五	腰袋	1/2腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
43	8	5	五	腰袋	1/2腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石（少） 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
44	8	5	五	腰袋～ 腰中袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	白色粒子 黑色粒子（少）	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
45	8	6	五	腰袋	4/6腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 腰袋	白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。綿上、 内面：綿260g/m ² 。		
46	8	8	五	腰袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：竹糸縫目による筋状の糸痕。 内側：竹糸縫目による筋状の糸痕。		
47	8	6	五	腰袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：竹糸縫目による筋状の糸痕。 内側：竹糸縫目による筋状の糸痕。		
48	9	6	合付腰	口袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子（少） 黑色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
49	9	6	合付腰	口袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
50	9	5	合付腰	口袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
51	9	5	合付腰	口袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
52	9	6	合付腰	口袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
53	9	5	合付腰	口袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
54	9	5	合付腰	口袋～ 腰袋	1/10腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
55	9	6	合付腰	口袋～ 腰中袋	1/6腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
56	9	6	合付腰	口袋～ 腰中袋	1/6腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
57	9	6	合付腰	口袋～ 腰中袋	1/6腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	青石・ 白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	
58	9	6	合付腰	口袋～ 腰中袋	1/6腰袋	腰袋6mm	7.2.VSY6/2 にない腰袋	白色粒子	外側：綿子と織物のミクサ地模様。口袋部にハ ナモテ立上を施した跡。	直角底あり。	

第2表 土器觀察表2（須惠器・灰釉陶器・山茶碗）

番号	西面	南面	北面	内面	計測値	計測値	色彩		施工者有無	文部・機器整備	備考
							内色	外色			
96	11	7	井	口吹壁 (裏)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
97	11	7	井	口吹壁 (表)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子(少量)	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
98	11	7	井	口吹壁 (左壁)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
99	11	7	井	口吹壁 (右壁)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
100	11	7	井	口吹壁 (天井)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子(少量)	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
101	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子(少量)	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
102	11	7	井	口吹壁 (天井上部)	2/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子(少量)	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	鏡面塗装。
103	11	7	井	口吹壁 (柱)	2/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子(少量)	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	鏡面塗装。
104	11	7	井	天井(管 配線)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子(少量)	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
105	11	7	井	壁下部 (左側)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	床下部に極太ドット付。
106	11	7	井	天井(管 配線)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。	丸洗の影響で苔台下より剥落する跡。
107	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
108	11	7	井	口吹壁 (天井上部)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子(少量)	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	
109	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	外観既上塗、内面既上塗剥離。
110	11	7	井	口吹壁 (天井上部)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
111	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	外観既上塗、内面既上塗剥離。
112	11	7	井	口吹壁 (天井)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
113	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	壁:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
114	11	7	井	口吹壁 (天井上部)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
115	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
116	11	7	井	口吹壁 (天井)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
117	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
118	11	7	井	口吹壁 (天井上部)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
119	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
120	11	7	井	口吹壁 (天井)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	内面既上塗剥離。
121	11	7	井	口吹壁 (柱)	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:北方の暖ナチュラル。 床:北方の暖ナチュラル。	新面積既知地盤。
122	11	7	井	壁下部 -底面部	3/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:新面積既知地盤。 内面:既知地盤。	新面積既知地盤。
123	11	7	井	底	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:既知地盤。	新面積既知地盤。
124	11	7	井	壁	1/10標準 清涼感100%	10YR1/1 暖白色	10YR1/1 暖白色	白色粒子	無	天井:既知地盤。	新面積既知地盤。

第3表 土器觀察表3 (輸入磁器・炻器・瓦器・國產陶磁器・土製品)

番号	件名	器種	形態	測定値	特徴	文部・郵便局製	備考
125	12 9 青白磁 金子盤	另一式	1/10倍鏡	底径高さ5mm 底面15mm	外縁：1段の邊縁文		
126	12 9	口沿付 盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm	内縁：外上に青白磁邊縁文。	120番前。	
127	12 9	地窓付 口沿付 盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm	内縁：外上並列紋文。	120。	
128	12 9	口沿付 盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm	内縁：口沿側縁附。	130番後～140番前。	
129	12 9	盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm	外縁：底向外側縁附。	直線に斜め丸が入る事。130番前。	
130	12 9	鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	外縁：邊付文。	130中後～140前半。	
131	12 9	湯呑付 洋食器	1/10倍鏡 外上付	底径口高さ11mm 底存高さ5mm	外縁：邊付文。	130後半～140前半。	
132	12 9	鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	内縁：邊付文。	140。	
133	12 9	盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm		140。	
134	12 9	口沿付 盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm	内縁：邊付文。	130後半～140前半。	
135	12 8	盤 金子盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm	灰石、 白・黄白斑子	H字口。H字型底附。130後半。	
136	12 8	器皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm	灰石	H字口。1整式底附。130前半。	
137	12 8	大皿付 鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	灰色粒	外縁：底外斜タキ目。 内縁：前方のヘラテ斜縫。	
138	12 8	湯呑	1/10倍鏡	底径高さ5mm	灰石・淡白斑子	140整式底附。130後半。	
139	12 8	片口付 鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	石灰・白斑子		
140	12 8	片口付 鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	米白・石灰・ 淡白斑子		
141	12 8	片口付 鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	白色粒・淡白斑子		
142	12 12 茶器 金子山 茶器	1/10倍鏡	底径高さ5mm	緑石粒	外縁：邊脚・邊連の細足。		
143	12	盤	1/10倍鏡	底径高さ5mm	白・淡白斑子	外縁：一整脚外縫。	黒頭底附。
144	12 11	湯呑付 鍋	1/10倍鏡	底径口高さ5mm 底存高さ5mm	外縁：底脚無し。 内縁：底脚無し。		
145	12 11	前挽付 鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm		外縁：底脚無し。 内縁：底脚無し。	
146	12 11	張付 鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm		外縁：底脚無し。 内縁：底脚無し。	
147	12 11	丸周 鍋	1/10倍鏡	底径口高さ5mm 底存高さ5mm	石灰	外縁：長毛足（邊脚無）連脚。 内縁：長毛足（邊脚無）連脚。	脚出底附。
148	12 11	湯呑付 鍋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	白色粒子	外縁：底脚無し。 内縁：底脚無し。	脚出底附。
149	12	蓋	1/10倍鏡	底径高さ5mm	底存高さ5mm	底脚無し。底存底に笠状突起物。 底存底に蓋子。蓋に刃を入れる。	盤土は薄底質、厚底高。
150	12 12	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
151	12 12	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
152	12 12	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
153	12 12	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
154	12 12	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
155	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
156	12 12	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
157	12 12	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
158	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
159	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
160	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
161	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
162	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
163	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
164	12 13	豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm			
165	12 14 加工付 豆皿	底付 豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm 底存高さ5mm	外縁：2段脚の内縁及び、高部部S曲の模文。 内縁：底脚無し。	(脚付)	
166	12 14 土鍋 豆皿	底付 豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm 底存高さ5mm	外縁：底足無。 内縁：底足無。	(脚付)	
167	12 14 土鍋 豆皿	底付 豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm 底存高さ5mm	底足無。 内縁：底足無。	(脚付)	
168	12 14 土器	底付 豆皿	1/10倍鏡	底径高さ5mm 底存高さ5mm	底足無。 内縁：底足無。	(脚付) 盆子。	
169	12 14	土鍋	底付 豆皿	底径高さ5mm 底存高さ5mm	石灰・ 白・淡白斑子	底足無。底付と土鍋片を接着する。	
170	12 14	土鍋 豆皿	底付 豆皿	底径高さ5mm 底存高さ5mm	粗目と堅板。内底面とも堅板接合。	粗目。粗目堅板片を接合している。	
171	12 14	土鍋 豆皿	底付 豆皿	底径高さ5mm 底存高さ5mm	粗目と堅板。内底面とも堅板接合。	粗目。粗目堅板片を接合している。	

第4表 瓦製造表

番号	地図 番号	地図 番号	内面	表面	計測値	内面	外観	既存者等	又株・若田周辺	場所
169	13	9		新瓦	赤大厚2mm	赤色 黒色	赤色 黒色	陶器質、中算2名。既存の記述は既定1+3。	外在条件 2.25m×0.45mの形状。 内在 50kgの目安。	
170	13	9		平瓦	赤大厚1mm	7.50V1/2 黒色	7.50V1/2 黒色	既存、省略、凸凹、ナメ脱落。	側面凸凹感強度を認める。	
171	13	6		平瓦	赤大厚2mm	7.50V1/2 黒色	7.50V1/2 黒色	既存、省略、凸凹、ナメ脱落。	内在 SYRに近い傾色。	
172	13	9		平瓦	赤大厚2mm	2.50V1/2 黒色	2.50V1/2 黒色	既存、省略、凸凹、ヘラナデ質感。	内在 SYRに近い傾色。	
173	13	9		平瓦	赤大厚2mm	PSV1/ 赤色	PSV1/ 赤色	既存、省略、凸凹、ヘラナデ質感。	内在 SYRに近い傾色。	
174	13	9		平瓦	赤大厚2mm	PSV1/ 赤色	PSV1/ 赤色	既存、省略、凸凹、省子色。	内在 SYRに近い傾色。	
175	13	6		平瓦	赤大厚2mm	1.50V1/2 黒色	1.50V1/2 黒色	既存、省略、凸凹、ヘラナデ質感。	内在 2.25m×0.45mの形状。	
176	13	9		平瓦	赤大厚1mm	PSV1/ 黒色	PSV1/ 黒色	既存、省略、凸凹、省子色。	内在 1.05m×0.45mの形状。	
177	13	9		平瓦	赤大厚1mm	7.50V1/ 黒色	7.50V1/ 黒色	既存、省略、凸凹、省子色。	内在 1.05m×0.45mの形状。	
178	13	14	佐佐木	新瓦	赤大厚2mm	2.50V1/ 黒色	2.50V1/ 黒色	既存、省略。	巴ナナ脱落。	

第5表 石器・石製品観察表

番号	地図 番号	地図 番号	内面	表面	計測値	特徴		説明
179	9	3		磨石	直径約12mm 底面溝約1mm 底面溝約1mm	内部に溝状。		既存金山山内側を運搬とする。
180	9	3		磨石	底面溝約1mm 底面溝約1mm 底面溝約1mm	端部に溝状。		既存金山側を運搬とする。
181	9	3		石器製造品 (滑石) (円盤)	直径約20mm 厚さ2mm	内部の鋸歯状孔(底)・半球性状 2箇所。		滑石盤。
182	9	3		磨石	底面溝約1mm 底面溝約1mm			既存。
183	9	14		磨石	直径約15mm 底面溝約1mm 底面溝約1mm	全面に溝状。鋸歯4条。反対側溝1条。平面側面に3条の溝がある(石材切り出しの裏の跡 か?)。片側平頭底面V字溝の點石使用例と共に溝。		滑石盤。
184	9	14		磨石	直径75mm 厚さ22mm 底面溝約1mm	全面に溝状。方形溝1箇所状態(刃削り出しの跡の跡か?)。		滑石盤。
185	9	14		研磨	直径約25mm 厚さ10mm 底面溝約1mm			半球状。
186	9	14		火打石	直径約15mm 厚さ5mm 底面溝約1mm	多方向より叩打音。		滑石盤。
187	9	14		火打石	直径約15mm 厚さ5mm 底面溝約1mm	多方向より叩打音。		滑石盤。

第6表 金属製品観察表

番号	地図 番号	地図 番号	内面	種類	計測値	特徴	説明	
188	15	2		小刀	刃長12mm 刃幅1mm 刃厚0.5mm 刃長12mm 刃幅1mm 刃厚0.5mm	文様: 目 開放性底。 底: 密封底?		既存。 全面的に細い溝走りがびく。 底は、長い目。底蓋をもる 隙間引出の見方。是、底蓋裏に 止まるのでなく、底蓋わり不 規則な感じ。
189	15	3		曲刀	刃長18mm 刃幅1mm 刃厚0.5mm 刃長18mm 刃幅1mm 刃厚0.5mm	刃長底。 刃底18mm、刃幅1mmの事例(刃面底溝跡を詳説牛会に記載した後、その方方に大きくな換用を請承 し、現物に実装)。		
190	15	11		刀子	刃長15mm 刃幅1mm 刃厚0.5mm 刃長15mm 刃幅1mm 刃厚0.5mm			新鋭。 刃先を屈筋、折筋。
191	15	14		鉄鏡	底径3.5mm (底付先端) 孔径3.0mm	鏡面研磨。		既存。 鉄鏡年号: 北宋铁镜残闕元(1111)年。
192	15	14		鏡	全鏡6mm 底付3mm	底付鏡。		既存。 内面にカットマーク(加工しての跡)。 鏡面研磨、底付鏡にしてあるのか?
193	15	14		鏡	全鏡5mm 底付3mm	底付鏡。		既存。 内面にカットマークが存在して鏡面 底付鏡。

第7表 木製品觀察表

番号	商品名	固有名	階層	被説明者	操作名	計数単位	手数目	類別	又名・特長	登録番号
194	15	15	西	天井板～ 床下板	8/10枚組	枚葉取り	枚木板	ブナ風	外見：原産地由来で季節による変化。体幹に3段死穴に伴う虫食い跡。 内面：沙彦吉。	登録番号1294
195	25	15	東	記念 櫻盤	8/10枚組	枚葉取り	枚木板	ブナ風	外見：桜花紋を施す。桜花紋は高級な装飾品としている。	登録番号1293
196	15	15	和	社上板～ 床下板	8/10枚組	枚葉取り	枚木板	ブナ風	外見：純正地由来。表面に8度斜丸に向つ葉の文様を施す。	登録番号1294
197	16	15	和	社上板～ 床下板	8/10枚組	枚葉取り	枚木板	ブナ風	外見：純正地由来。表面に8度斜丸に向つ葉の文様を施す。	登録番号1294
198	16	15	和	社上板～ 床下板	8/10枚組	枚葉取り	枚木板	ブナ風	外見：純正地由来。表面に8度斜丸に向つ葉の文様を施す。	登録番号1294
199	16	15	和	口板～ 萬能板	8/10枚組	枚葉取り	枚木板	ブナ風	外見：純正地由来。表面に8度斜丸に向つ葉の文様を施す。	登録番号1294
200	16	16	東	口板～ 地巾板	1/10枚組	枚葉取り	一枚板	ケヤキ	外見：原産地由来。口板と地巾板を組合せたもの。	登録番号1295
201	17	16	東	壁板	1/10枚組	枚葉取り	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
202	17	16	東	壁板	1/10枚組	枚葉取り	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
203	17	16	東	壁板	1/10枚組	枚葉取り	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
204	17	16	東	セミモジ	1/10枚組	枚葉取り	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
205	17	18	西	壁板	1/10枚組	枚葉取り	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
206	17	16	西	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
207	16	15	下水	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
208	18	15	下水	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
209	18	15	下水	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
210	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
211	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
212	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
213	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
214	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
215	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
216	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
217	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
218	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
219	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
220	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
221	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
222	18	15	上壁	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1296
223	17	17	壁板	8/8枚組	枚葉取り	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
224	16	17	壁板	8/10枚組	一枚板	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
225	18	17	壁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
226	18	17	壁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
227	18	17	壁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
228	18	17	壁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
229	17	17	壁板	4/9枚組	一枚板	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
230	18	17	壁板	4/9枚組	一枚板	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
231	18	17	壁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1297
232	19	18	梁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1298
233	19	17	梁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1298
234	19	18	梁板	壁板	1/10枚組	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1298
235	19	15	梁板	1/2倍組	一枚板	一枚板	一枚板	スギ	外見：純正地由来。	登録番号1298

第IV章 まとめ

今回の青木原遺跡の調査区は、二次堆積を繰り返していた旧河原橋没箇所であり、近世・近代の整流・護岸用の杭打設を除いて遺構は、検出されず、出土遺物の大多数は、上流からの漂着物と目される。

しかし、包含層最下位では、流磨痕の認められない完形品、比較的残存率の高い個体や量産物といった、埋没時の原位置を大きく動いていないとみられる資料が、弥生時代後期～古墳時代前期において、少數ながら存在する。過去の周辺遺跡の調査結果と合わせて、限局的ながらも、この地点の意味合いを考える。

また、御殿川上流部には、古代寺院・官衙関連遺跡が集中しているが、包含層中から多くの古代瓦が出土している。その歴史についても考察を行なうために代える。

第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の銅製品出土点についての考察

調査区東部で弥生時代後期～古墳時代前期に比定される銅製品が比較的近接した地点で2点出土した。小銅鏡（188）と銅鏡再加工品（189）がそれであり、小銅鏡は、検出時に鮮やかな金属光沢を残し、銅鏡の還存状況も安定していた。

金属製品であるため、比重が高く、土器片と同じ様に川中に転回する可能性は、小さいが、それでも、水中で沈される砂・礫に曝された様な傷は、一切認められなかった。このことから、これら銅製品が検出時まで、まったく空気や流水に触れず、潜水している河岸部に堆積（堆積されていた可能性がある）していたと判断がされる。

この地点にこれら銅製品が置かれた意味について考察を進める。

「小銅鏡」は、弥生時代の本州・四国で盛行した青銅祭器である銅鏡の祖型と目される朝鮮式小銅鏡とその系統に属する品及び、銅鏡の小型品・模倣品を総称する語として使われている。その性格差の確認を描いた上で見える分布域は、九州から関東に及び、いわゆる銅鏡分布図の外側にも広がっている。また、土坑に埋納することの多い銅鏡と異なり、住居や墓から出土する例が多い。

静岡県内出土の小銅鏡の事例は、6例確認される。その内訳は、西から浜松市伊場遺跡、袋井市愛野向山II遺跡、静岡市駿河区有東遺跡、富士市（旧浮島村）陣ヶ沢、沼津市（旧浮島村）岡峯、三島市青木原遺跡の出土例であり、現時点での分布図の太平洋側東縁となっている西の崖遺跡（磐田市敷地）から、5地点が京に越えて位置する。

愛野向山II、有東、陣ヶ沢、岡峯の小銅鏡は、いずれも断面菱形または、長円形の鉢を備え、鏡を持たず、身の上位に2箇所、表裏で計4箇所に型持ち孔を持つ。紐・身それぞれの表面に文様は、認められないなどの共通点がある。この種の小銅鏡は、滋賀県南部から南関東にかけ分布域を持ち、分布図の重複から、三連式銅鏡の工房で製作された可能性が指摘されている。なお、愛野向山II例の内部には、銅鏡転用の舌が入っており、「開かせる」機能が備わっていた（松井2004）。

これに対し、伊場例は、紐を持つ（表裏両面の型合わせが若干上下にずれていることから、バリの可能性も指摘されている）特徴から、外縁付紐式銅鏡または、肩平紐式銅鏡の小型品・模倣品と見なされている（太田2005・松井2005）。

青木原例は、突線鋸式銅鏡の小型品・模倣品と見なされ、形態上の特徴は、他の静岡県内の事例と一緒にを期す。近似例は、身外面に綾杉文が擬・横位に巡る千葉県市原市川焼台遺跡1号小銅鏡（第25回住居覆土中より出土）が挙げられる。これは、据内面の突唇を失っている。「聞くもの」から「見るもの」

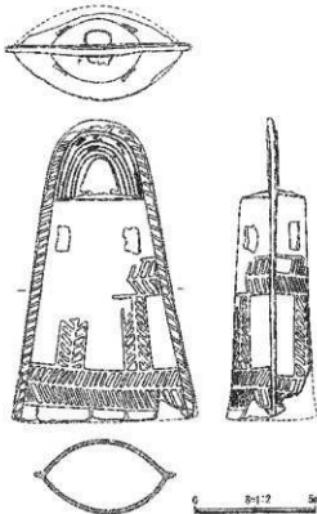
への変質、すなわち舌を用い鳴らす機能の有無を新旧の判断材料とすると、青木原例が古相に位置づけられるが、外見的特長に共通点の多い2点の制作時間差は、少ないとみられる。

今回の調査区の北側に当たる、平成17・18年度に
微高地上で行われた青木原遺跡の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期に位置付けられる方形周溝墓が断片的ながら合計3基検出されており、内1基の方形周溝墓の周溝内から、箱清水式土器に比定される甕がほぼ完形の状態で出土している。当該期の中部地方との交流、人・物品の移動を窺わせる。

また、御殿川対岸側に立地する青木B遺跡では、
弥生時代中期後半と後期前半、古墳時代前期の方形周溝墓が検出されていて、古墳時代前期の外来系土器の受容と在地化について報告・言及がされている
(渡井2002)。断続的ながら、川を挟んで南北方向に他地域との関わりを持つ人々の墓域が設定されていることになる。

これら墓域を形成した人々の居住域は、特定され
ていないが、生産域は、状況的に青木原・青木B遺跡の北西と南東側に広がる沼澤原がそれに当たるとみられる。

人々の移動・活動の起点・原点となる、墓域と生
産域の交差部は、死と生の世界の交差部とも言え、
祭器を据え置く場所として相応しいと言える。



第25図 川戸台遺跡出土1号小鏡鉢
(千葉吉ニュータウン(XLU) 2001より転載)

第2節 古代瓦の搬入経過についての考察

伊豆北地域の遺跡では、近接して古代寺院・官衙関連遺跡が無いにもかかわらず、古代瓦が出土する事例が数多くあるが、今回の青木原遺跡の調査でも包含層中より、古代瓦がプラスチックコンテナ2箱分出土した。

これらは、御殿川旧河道に落ち込んでいたもので、上流部より流下して来たものと考えられる。
出土した古代瓦のほとんどは、平瓦であったが、市ヶ原廃寺出土瓦と共通の特長を持つ折丸瓦が1点検出されている。市ヶ原廃寺は、御殿川上流東岸側の大場川との間の微高地のほぼ中央に立地していたと想定されているので、底塀部分も含め、建物の崩落に伴った瓦の御殿川への自然流出は、考えにくい。
人为的となれば、寺の修理・建替え時に発生した不要瓦の川への投棄が浮かび上がる。傍証になるか微妙であるが、出土瓦片の大きさは、皆、泰大か、それより小さくなっているながら、破面の磨耗がそれ程発達していない個体が多い。廃棄場所への運搬を簡便にするため、細かくする破碎作業が行われた可能性が指摘される。

現地調査及び本報告書の作成にあたっては、以下の方々に御指導・教示・助言を頂いた。ここに記し
て御礼申し上げる。(50音順 敬称略)

芦川忠利　土屋了介　松井一明　村上　睦

〔参考文献・報告書〕

- 芦川忠利 御庭直日 2005 「第1章 発掘調査 第2節 青木原遺跡第2地点」
『三島市埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』 三島市教育委員会
- 池田 治 2004 「東日本の弥生鋼刀 一帯状円錐型鋼刀の地域的特色と製作地推定…」
『白門考古学叢書 稲佐典太郎先生追悼考古学集』 中央考古会・中央大学考古学研究会
- 池谷初恵 芦川忠利 1996 「西大久保、奈良編跡遺跡 一日清 ブラザ歴史に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」
三島市教育委員会
- 岩名慶太郎 小川とみ 美木三男 2007 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第172集
『青木原遺跡 平成9・10年度一般河川御殿川人にやさしい地域づくり河川整備事業 平成16・17・18年度一般河川御殿川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 白居道之 2000 「再生される鋼刀 一帯状円錐型鋼刀に関する「視点一」」
『長野県埋蔵文化財センター紀要8』 長野県埋蔵文化財センター
- 太田好治 2005 「伊場遺跡出土の小銅鏡」『浜松市博物館報』第17号 浜松市博物館
- 大橋康二 1995 考古学ライブラリー-55 「肥前陶磁」 ニューサイエンス社
- 佐藤圭祐夫 牧野谷正宏 鈴原和大 2002 「第1章 各池岸の様式と福年 5 造江・駿河地盤 (4) 東駿河地盤」
『先土器の様式と福年 京阪神』 加藤修介・石黒立人編・木耳社
- 佐野五十二 岩木 實 1998 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第104集
『御殿川流域遺跡群Ⅱ 平成7・8年度一般河川御殿川小堀橋河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 岩崎広田・中手乱遺跡
- 杉浦幸雄 1995 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第67集
『御殿川流域遺跡群Ⅲ 平成6年度一般河川御殿川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏中 2003 「第3章 主要遺跡の概要 上草原遺跡 中島B遺跡 塚ノ森遺跡 市ヶ原鹿寺 伊豆山分寺跡」
『市ヶ原山内寺院・官衙の諸相 第1節 伊豆国と駿河国東部』
- 鈴木敏中 岡本範之 前嶋秀哉 池谷初恵 2004 「第1章 伊豆国と駿河国東部」
『静岡県埋蔵文化財調査報告書第57集』 静岡県教育委員会
- 鈴木敏中 佐々木知子 渡井英美 2002 「第1章 青木原遺跡 第2節 青木原遺跡」
『三島市埋蔵文化財調査報告書Ⅺ』 三島市教育委員会
- 秋父重昭 山内昭二 鈴木敏中ほか 1983 三島市文化財調査報告第3集『中島下町遺跡』 三島市教育委員会
- 守田光一郎 2007 「第1章 弐掘・蛭認調查 第1節 青木原遺跡第1地点」
『三島市埋蔵文化財調査報告書Ⅻ』 三島市教育委員会
- 寺田光一郎 鈴木敏中 2009 「第1章 先鋤編発見 第1節 青木原遺跡第4地点」
『三島市埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』 三島市教育委員会
- 高橋雅彦 恒澤啓一 1996 「小堀廬の墓誌的研究」『碧園學院大學考古學資料館紀要』第11輯
國學院大學考古學資料館
- 中野昭久 1994 「赤羽・中野「生産地における龜牛について」」「全国シンポジウム「中世常滑窯をめぐる」資料集」
日本復古大学知多平尾総合研究所
- 峰原孝之 白井久美子 四川博幸 2009 千葉県常滑窯與財团開拓委員會報告610集
『千葉県ニユーワンズ』 一市原市川幡賀立野(上巻)一
独立行政法人都市再生機構 財団法人千葉県教育振興財團
- 橋本敬之 1993 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第44集
『御殿川流域遺跡群』 平成2・3年度一般河川御殿川小堀橋河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中島西原田遺跡 八反塙前田遺跡 勇名大畠田遺跡
- 1994 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集
『御殿川流域遺跡群Ⅱ 平成2・3年度一般河川御殿川小堀橋河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 中島西原田遺跡 八反塙前田遺跡 勇名大畠田遺跡』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 原 康志 1995 「第Ⅱ章 異文化の底質 第4節 近畿開墾(考古学的遺跡) 一横地氏向遺跡群と周辺の特徴についてーー(1) 新筑開拓地の分類について」
『狭地城跡 一總合調査報告書ーー』 菊川町教育委員会
- 北田井克仁 1991 「鶴来における「小堀廬」祭祀について」『考古學雑誌』第86卷2号 日本書考古學會
- 藤澤良祐 1996 「中世郷戸窯の動態」『浜松市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム』
古窯口をめぐる中世陶器の世界 ~その生産と流通~ 資料集
- 松井一則 1988 「静岡県後井市愛野向山II遺跡出土の小堀廬」『考古學雑誌』第75卷2号
日本考古學會
- 2004 「小堀廬と稱御祭記」『季刊考古學』第86号 愛野山麓
- 2005 「伊場遺跡出土小堀廬にかかるコメント」『浜松市博物館報』第17号 浜松市博物館
- 森 成史 武田英俊 1992 「上草原遺跡第1地点 一中世高層住宅遺跡に伴う発掘調査報告書」 三島市教育委員会
- 森 成史 山田方祐 小金澤保雄 1994 「花坂古窯址発掘調査報告書」 伊豆長岡町教育委員会

付録1 静岡県三島市青木原遺跡出土木材の樹種

小川とみ・小林和貴・鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県三島市南二日町の青木原（あおきばら）遺跡から出土した近世の木材82点の樹種を調べた。青木原遺跡は標高18mほどの扇状地～沖積平野に相当する位置にあり、御殿川の河川改修工事に伴って発掘されたものである。それらの材は曲物、杣、柄杓や檜樽類の栓など（容器類）が44点、箸が3点、下駄が14点、土木材、部材がが7点、その他傘の軸、刀の鞘、木彫像、紡錘車、舟檻の駒、自在鉤など様々な木器類が14点である。これらの材から18もの樹種が同定された。これらの樹種の識別の根拠となつた形質について略記し、2006年度に報告した青木原遺跡出土の中・近世の木材の結果も合わせて用材等について考察を試みた。

同定された樹種

1 モミ属 *Abies* マツ科

写真図版I:1a～c (木材番号12867)

垂直・水平洞衛脂道とも持たない、年輪が明瞭な針葉樹材。仮道管は蓋然と並び、早材から晩材への移行は緩やかでスギに似る。放射組織は、単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁及び垂直壁に多くの单穿孔（モミ型壁孔）がみられる。分野壁孔は小型のスギ型で、一分野に2から4個ある。以上の形質から、マツ科のモミ属の材と同定した。

我が国に分布するモミ属には北海道のトドマツから、亜高山帯のアオモリトドマツ、シラベ、冷温帶のウラジロモミ、暖温带のモミがあり、材構造は互い似よく似ていて、材構造での樹種の識別は出来ないが、本州、四国、九州の低山地から山地帯に広く分布するモミ *Abies firma Siebold et Zucc.* がもっとも普通なものである。モミは成長が早く、幹がまっすぐに立つので大材が得易く、加工も容易でスギやヒノキと同じ用途の代用品に用いられることが多いようである。当遺跡出土のモミ属材は曲げ物の蓋3点、箸1点と、柄のある部材1点、杭1点であり、蓋、箸はそれぞれヒノキ、スギの代用とも言える。

2 トウヒ属 *Picea* マツ科

写真図版I:2a～c (木材番号12883)

水平・垂直の両樹脂道をもつ針葉樹材で、晩材は量多くなく、早材から晩材への移行はゆるやか。早材の仮道管径は小形で、晩材とは蓋厚の変化によって区別される。放射組織の上下縁辺には放射仮道管があり、孔口の狭い有縫壁孔が見られ、その断面は角張ることからカラマツから区別される。分野壁孔はトウヒ型で小さく、一分野に2～5個ある。これらの形質からトウヒ属の材と同定した。

本州中部に分布するトウヒ属の樹木にはトウヒ、バラモミ、ハリモミなど幾つかの種があるが、量的にやや多いのはトウヒである。これらは冷温帶から亜高山帯にかけて生育することと現在でもほとんど植林はされていないことから、奥地の天然林を伐りだして木材を商品として流通させたものと考えられる。材は木理通直、割裂性が良く、軽軟で切削加工が容易で仕上がりは美しい。本遺跡出土材は曲げ物の蓋4点と塗塗り柄杓の柄1点で、いずれもヒノキの代用と言える。

3 マツ属 *Pinus* マツ科

写真図版I:3a～c (木材番号12902)

表1 平成22年度 青木原遺跡 樹種同定一覧表

標本番号	採取場所	地上高	見付	樹種名	樹種名	部位	計数	寸法	備考	時期
10638	550	1002	サヤキ	楓	楓	葉	1	葉身	葉身	近世
12522	159	495	サヤキ	楓	楓	葉	1	葉身	葉身	近世
12649	157	1705	ブナ系	楓	楓	葉	1	葉身	葉身	近世
12641	155	2685	ブナ系	楓	楓	葉	1	葉身	葉身	近世
12642	156	2695	ブナ系	楓	楓	葉	1	葉身	葉身	近世
12643	156	2701	ワツク	楓	楓	葉	2	葉身	葉身	近世
12644	156	3522	ブナ系	楓	楓	葉	2	葉身	葉身	近世
12645	202	5502	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12646	202	684	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12647	706	4286	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12648	216	3455	スギ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12649	214	4745	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12650	219	3380	スギ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12651	217	5101	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12652	211	5331	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12653	211	5334	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12654	210	3550	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12655	205	473	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12656	218	157	スギ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12657	213	2464	スギ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12658	222	2490	スギ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12659	216	2095	スギ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12660	212	3444	ヒノキ	松(油杉)	松(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12661	202	851	セイヨウ	梅	梅	葉	1	葉身	葉身	近世
12662	201	258	セイヨウ	梅	梅	葉	1	葉身	葉身	近世
12663	203	6910	スギ	松	松	葉	1	葉身	葉身	近世
12664	201	2841	フリ	ミヤマヒバ	ミヤマヒバ	葉	1	葉身	葉身	近世
12665	205	4594	ヒノキ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12666	トウヒ属			柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12667	213	149	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12668	223	1427	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12669	270	5311	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12670	226	3429	トウヒ属	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12671	214	2945	サウラ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12672	225	4874	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12673	227	4992	トウヒ属	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12674	229	49325	トウヒ属	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12675	226	3510	セイヨウ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12676	221	5344	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12677	222	25	サウラ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12678	238	293	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12679	256	4936	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12680	209	4255	サウラ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12681	227	1267	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12682	226	2829	モミ属	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12683	219	3609	トウヒ属	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12684	242	312	アカガシ属	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12685	281	3411	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12686	251	7	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12687	216	4671	セイヨウ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12688	225	402	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12689	214	4104	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12690	215	2727	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12691	259	5142	サウラ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12692	299	2310	コウラ属	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12693	257	842	エゾノヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12694	216	2026	エゾノヒノキ	柏類(油杉)	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12695			柏類	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12696	249	4523	カエデ属	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12697	203	4963	スギ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12698	202	517	サウラ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12699	264	5373	ヒノキ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12700	226	2655	ヒノキ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12701	266	2255	モミ属	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12702	249	5346	マツ属	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12703	241	3126	クリ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12704	242	3131	クリ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12705	242	3247	エゾノヒノキ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12706	246	3549	サウラ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12707	249	3549	サウラ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12708	245	1657	サウラ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12709			サウラ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12710			サウラ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12711			サウラ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12712			サウラ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12713			モミ属	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12714	247	1775	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12715	247	1754	ヒノキ	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12716	267	1958	モミ属	柏類(油杉)	柏類(油杉)	葉	1	葉身	葉身	近世
12717	262	2704	イヌザサ属	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12718	250	5348	ヒノキ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世
12719	251	1806	ヒノキ	柏類	柏類	葉	1	葉身	葉身	近世

年輪が明瞭な針葉樹材で、水平・垂直両樹脂道をともに持つ。晩材部は幅広く、早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭である。放射組織には、上下に放射仮道管があるが、細胞壁が劣化しており、鋸歯状肥厚は確認できない。放射柔組織の水平壁は平滑で、分野壁孔は大型の窓状で普通一分野につき存在する。以上の形質より、マツ科のマツ属（復緑質東亜属）の材と同定した。

三島市付近でこの出土材の候補となりうる樹種はアカマツかクロマツであるが、細胞壁の劣化によりそのいずれとも決めかねる。2006年の発掘調査報告では近世以降の統1点がアカマツとして報告されており、今回の材もアカマツである可能性は高い。本遺跡出土材は草履下駄1点である。

4 スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D.Don スギ科

写真図版II: 4a～c (木材番号12850)

水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行はやや急で年輪界は極めて明瞭である。樹脂細胞が晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。放射組織は、単列で放射柔組織のみからなる。分野壁孔は、大粒のスギ型で一分野あたり通常2個あり、漏孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、スギ科のスギの材と同定した。

スギ材は香川県南部から九州屋久島まで広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、木材が得易く、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。当遺跡出土材は橋樋の木栓8点、箸2点、曲げ物の蓋1点、ほかのある部材1点の合計12点である。

5 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科

写真図版II: 5a～c (木材番号12872)

水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で年輪界は明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪の色彩は大きく違わない。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ～トウヒ型で、一分野に2個ある。これらの中質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島まで分布し、特に中部地方の山地帯に多い。その材はわが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたもので、古代の畿内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、車輪、舟物など、広く用いられてきている。当遺跡出土材は曲げ物の蓋、底板など、棒錐などの木栓、刀の鞘、木彫像、漆塗り柄杓の頭、紡錘車、組み下駄など23点と最も多い。

6 サワラ *Chamaecyparis pisifera* Siebold et Zucc. ヒノキ科

写真図版II: 6a～c (木材番号12919)

ヒノキ同様、水平・垂直樹脂道を欠き、仮道管、放射柔組織、樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は少ない。樹脂細胞は晩材部付近に散在し、水平壁は数珠状を呈する。分野壁孔は中型のヒノキ型～スギ型で、1分野当たり普通2個存在し、ヒノキよりもやや孔口が大きく、開口部の長軸は水平に近くなる。以上の形質からヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは本州中部の山地に分布し、樹高30m以上、幹径1mになる。ヒノキより成長が早く同じ幹の太さではサワラの方が樹齢が少ない。材は木理通直で割裂性良く、ヒノキより軽軟で切削加工は容易であるが、光沢、香りはない。水湿に特に強いので種類に、また、香りが無いので瓶びつや簪に用いられる。ヒノキに比べ材質は劣り、ヒノキの代用とされるほか、スギ同様の用途がある。本遺跡出土材は曲げ物の蓋2点（うち1点は漆塗り）、漆塗り皿物の底板1点、柄のある部材1点、「円錐状木器」1点で

ある。

7 イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科

写真図版Ⅲ: 7a~c (木材番号12917)

材が均質で年輪界のはっきりしない針葉樹材で、早材から晩材への移行は大変緩やかで、晩材部がはっきりと認められない。樹脂細胞が多く、年輪内全体に均一に散在するが、スギ科やヒノキ科のもののように黒褐色の樹脂様物質が蓄積されることはないので、横断面では見つけにくい。また樹脂細胞の水平壁はイヌガヤと違い、薄く平滑で、数珠状に肥厚することはない。放射組織は背の低い単列で、分野壁孔は、小型のヒノキからトウヒ型、一分野あたり1~2個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

我が国にはイヌマキ属は関東地方南部の温暖地に生育するイヌマキとさらに南方に分布するナギの2種があるが、その分布から当遺跡出土材はイヌマキと考えられる。イヌマキの材は硬く緻密で粘りがあり特に水温に強く、また、シロアリにも強い。本遺跡出土材は矢板状1点である。

8 イチイ *Taxus cuspidata* Siebold et Zucc. イチイ科

写真図版Ⅲ: 8a~c (木材番号12866)

材が均質で年輪界のハッキリしない針葉樹材で、早材から晩材への移行はゆるやかである。樹脂細胞を欠き、仮道管と放射組織柔細胞のみからなる。仮道管の内壁には顕著な単独のらせん肥厚がある。分野壁孔はヒノキ型~スギ型で1分野あたり2~4個ほどある。これらの形質からイチイ科のイチイの材と同定した。

イチイは北海道から九州の山地帯上部に生育する高さ15m、幹径1mにある高木で、東高山帯には変種の矮生低木であるキャラボクがある。辺材は白く芯材は鮮やかな紅色となり光沢があって美しい材で、やや重硬だが均質で切削加工容易で仕上がりよく、彫刻、工芸材に良く用いられる。本遺跡出土材は漆塗りの包丁の輔かと思われるもの1点と漆塗りの桶の側板1点で、いずれも特別な用途を感じさせる。

9 カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科

写真図版Ⅲ: 9a~c (木材番号12887)

年輪界の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部は少ない。早材、晩材とも仮道管は整然と並び、樹脂細胞はない。仮道管の内壁には顕著な2~3本づつまとまつたらせん肥厚がある。放射組織は単列で背は低く、分野壁孔は小さなヒノキ型ないしトウヒ型で、一分野あたり2~4個ある。以上の形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イヌマキ、イヌガヤ、イチイに似るが、前二者は年輪が不明瞭で樹脂細胞が均一に散在していること、イヌガヤとイチイは仮道管内壁のらせん肥厚が2~3本づつまとまるではなく、常に単独であること、等により区別される。

カヤは本州から九州にかけての暖温帯に広く分布する針葉樹で、樹高30m、幹径1mになる高木だが、まとまって林を作ることはない。材は均質でやや重硬、弾力があり、割裂性よく切削加工が容易で光沢があり仕上がりがよく、特に優れた材質で、建築材、器具材によく用いられ、特に仏像などの彫刻材によく用いられる。当遺跡出土材は将棋駒1点で、これもカヤの特用である。

10 クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科

写真図版IV: 10a~c (木材番号12903)

年輪の始めに大道管が単独で1~3層に配列し、晩材部にかけて道管は小型、断面多角形で薄壁とな

り、徐々に径を減じ、火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一で、道管内部にはチローシスが著しい。木部柔組織は接線状・短接線状に配列する。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は対列状、あるいは横状となる。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道南部から九州まで分布する落葉高木で、樹高25m、幹径1mに達し、また二次林に最も普遍的な樹種の一つである。材はやや硬く、割裂容易で、保存性にすぐれ、特に水湿に強い。大材が得られることもあるって建築材、器具材、土木用材など実にさまざまな用途がある。当遺跡出土材は下駄2点としゃもじ1点である。

11 ブナ属 *Fagus* Fagaceae

写真図版IV: 11a~c (木材番号12842)

小型でやや角張った道管が、単独あるいは2個複合し、均一に密に分布する散孔材で、道管径は年輪の終わりに向かってかなり小さくなる。道管の穿孔は單一あるいは横排が14本程度の階段状である。放射組織は平伏細胞と上下端のみ直立細胞の異性で、1~14細胞幅からなり、大きな放射組織が目立つ。道管と放射組織間の壁孔は大型のレンズ状である。これらの形質からブナ科ブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州までの温帯に広く分布するブナと、主に本州の太平洋側の温帯に分布するイヌブナがあるが、材構造での区別は困難である。ブナ材は硬く緻密で割裂性はよいが保存性に劣る。イヌブナ材はブナ材より脆い。当遺跡出土材は漆器碗5点でうち2点は椀蓋である。

12 コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

写真図版IV: 12a~c (木材番号12884)

中型で丸い厚壁の道管がゆるくまとまりながら放射方向に年輪を越えて配列する放射孔材である。道管の穿孔は單一、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は接線状で比較的目立つ。放射組織は単列のものと複合放射組織があり、征目面では特有の放様をなす。これらの形質からブナ科のコナラ属のうち、常緑のカシ類であるアカガシ亜属の材と同定した。

アカガシ亜属（カシ類）はブナ科コナラ属のうち、常緑の樹種からなる亜属で、アカガシ、シラカシ、イチイガシ、ツクバネガシなど全国の暖温帯以南に広く分布し、照葉樹林を構成している。多数の種があり、材構造での種の識別は出来ていない。材は重硬で粘りがあり、割裂困難で加工性、保存性は中くらいである。本遺跡出土材は紡錘車1点である。

13 コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinns* ブナ科

写真図版V: 13a~c (木材番号12892)

年輪のはじめに丸い大道管が間隔をあけて一列に並び、そこから順次径を減じて晚材部では薄壁の小道管が散在する環孔材で、道管の穿孔は單一、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は周囲状、散在状及び独立帶状で、晚材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と極めて大きな複合放射組織で、後者にはしばしば結晶細胞を含む。道管・放射組織間壁孔は縦長の椎円形で槽状に並ぶ。以上の形質からコナラ属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には北海道南部から九州種子島までの冷温帯下部から暖温帯の二次林に広く分布するコナラ、北海道北部から九州までの冷温帯から暖温帯上部に広く分布するミズナラ、主に青森県以南の冷温帯から暖温帯に希に分布するナラガシワ、北海道から九州の冷温帯、暖温帯に分布するカシワなどがあるが、材構造での区別は困難である。コナラは幹径60cm、樹高20mくらいになる落葉高木で、材質はやや堅く、肌目は粗い。建築材、器具材、薪炭材に用いられる。ミズナラは幹径1m、樹高30mになる落葉大高木

で、材質は大変よく、重硬で緻密なため加工は難しいが木目美しく仕上がりが重厚で家具材としては第1級である。机、テーブル、書庫などの家具材のほか建築材、各種器具材など極めて広い用途がある。ミズナラ、コナラとも薪炭材、椎茸のはだ木に用いられる。当遺跡出土材は編み具の木綿1点のみである。

14 ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科

写真図版V:14a~c (木材番号12906)

年輪始めに大道管が1層に並ぶ環孔材で、晩材部には薄壁多角形の小道管が多数集まつた塊が分布する。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁には顯著ならせん肥厚がある。放射組織は3~6列の多列で背はあまり高くなくほんの同性、上下の縁に大きな結晶胞を持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県以南の暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径2m、樹高30mをこえる大木となる。材質に優れ、大材が得られることもある。大きな建物の建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物、臼、杵、太鼓、剣物容器、漆器木地など、実に多様に用いられる。特に漆器木地には繩文時代前期以降現在まで一貫して利用されてきている。当遺跡出土材は組み下駄の本体と歯の6点と櫛、皿の2点である。

15 カエデ属 *Acer* カエデ科

写真図版V:15a~c (木材番号12896)

丸い小道管が単独あるいは2ないし数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管密度は低く纖維組織の部分が多い。道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密にあり、顯著ならせん肥厚がある。木部柔組織は目立たない。放射組織は1~6細胞幅くらいで同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

カエデ属には多数の種があり、材構造は互いに似ていて区別は困難である。多くは温帯から暖帯に分布している落葉小高木~高木である。材は多くは堅硬で強靭であり、各種器具材、建築材などに用いられ、こけし材などの特用がある。当遺跡出土材は自在鉤1点であり、強韌な材質を活かした利用といえる。

16 キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科

写真図版VI:16a~c (木材番号12919)

赤褐色状を呈する遺跡出土材で、道管内にしばしば黒褐色の物質が蓄積している。大きな梢円形の道管が年輪はじめに単独あるいは2個複合して数層に配列し、順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まつて斜め接線状の幅広いゾーンをなす環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で、やや間隔をあけて交互状に配列し、小道管の内壁には顯著ならせん肥厚がある。柔組織は周囲状であまり認めだれない。放射組織は2~4細胞幅くらいの同性で、背は低く、板目面で見る輪郭が綺麗な紡錘形となる。これらの形質からキハダの材と同定した。

キハダは北海道から九州にかけての温帯に分布する落葉高木で、幹径60cm、樹高30mになる。材は柔らかいが強く粘りがあり、木理が美しく加工性も容易な優秀な材である。建築物の装飾的部材、家具、各種器具材などに用いられる。樹皮の内側部分がペルベリンを含んで黄色い「黄檗」で、薬用、染料とされる。当遺跡出土材は組み下駄の本体と歯3点である。

17 エゴノキ属 Styphax エゴノキ科

写真図版VI:17a~c (木材番号12905)

小型で丸い道管が多くは放射方向に数個複合したものが年輪界に向けて徐々に径を減じながら均一に散在する散孔材で、道管の穿孔は横棒の少ない階段状である。木部柔組織は晚材部で接縫状を呈し、放射組織は異性で、1~4細胞程度である。以上の形質から、エゴノキ属のエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボクが含まれ、いずれも落葉小高木である。最も普通な樹木はエゴノキで本州から沖縄まで広く山野に分布し、材は軽く、白色均質で粘りがあり、切削加工容易で玩具などに用いられる。当遺跡出土材は傘の頭及び手元隠據と一本下駄の3点である。

18 タケササ類 Bamboo イネ科

写真図版VI:18a~b (木材番号12895)

横断面で、向軸側の原生木部腔と、中間にある一对の大きな後生木部道管、背軸側の薄部からなる維束が不整に配列する木質の材であることからイネ科のタケ亜科の桿であると同定した。桿の直径が数cmを超えるのでマダケなどの竹類と思われる。本遺跡出土材は傘の柄1点である。

出土材の樹種組成

以上の同定結果を、資料番号順に表1に、用途別に表2に示した。

表2では木材の器種や形態から曲物等(曲物、柵などの側板や底、蓋材など)や橋脚(及びそれに用いる木栓)、杭、檣、炳杓などをまとめて「容器」とし、箸、下駄(組み下駄にあっては本体とその齒)、土木材、建具などの部材、「その他」の木器類に分けた。また平成18年度の青木原遺跡の報告書(静岡県文化財研究所調査報告172集『青木原遺跡』)に掲載の結果のうち、中・近世の木材30点の結果も「2006年」の桿に合わせて示した。

表2に示すように、タケササ類を含めて82点の木材から18の樹種が同定された。最も多かったのはヒノキの23点で、次いでスギが12点、ケヤキが8点、モミ属(6点)、トウヒ属、ブナ属、サワラ(以上5点)、エゴノキ属、キハダ、クリ(以上3点)、イチイ(2点)、マツ属、イヌマキ属、カヤ、アカガシ属、コナラ属、カエデ属(以上1点)となっていて、全体の7割が針葉樹である。それぞれの樹種の用途は各樹種の記載の項で述べているように、それぞれの材質に合った樹種選択がなされていると言って良い。一方、青木原遺跡から出土した中・近世の木材31点について既に報告がなされており、それを表2に合わせて表示してある。既報告分(ヒノキ科としか同定できなかった1点を除いた30点)は今回の82点が全て近世であるのに対し、「中・近世」と言う事で時代幅が若干異なるが、いずれも木材が商業経済の下で流通するようになってからのことであるので、ここでは合わせて扱った。これを合わせると樹種は6種増え、そのうち針葉樹はアステロ、イヌガヤ、カラマツ属が増えるので、針葉樹の合計は12種で全体の54%となる。

縄文時代以来、人びとは木材資源を大いに活用して生活を営んできたが、弥生時代後半以降の鉄器の普及と古代国家成立期以降の王都造営、都市建築物、寺社の大規模建築、そして多様な生活木器類等にはコウヤマキ、ヒノキ、スギ、モミなどの天然林を伐りだして利用されており、その結果として樹種及び地域によって時期は少しずつ異なるものの、針葉樹の天然資源の枯渇が顕著になってきた。元々天然資源の少なかったコウヤマキは古代の始め頃までは既にまとまった木材供給は出来なくなっていたと看做され、ヒノキは平安朝には消費地近くの天然資源は既に枯渇したと言える。静岡県地方では登呂遺跡や山木遺跡に見るよう、もともとスギ天然林が平地にもあり、弥生~古代の遺跡はそれらを資

源として「スギ文化」を発展させたが、やはり古代のうちにスギの平地～低山地の資源は枯渇したことが考えられ、中世以降はスギを中心とした造林・育林が計られてきたといえる。

このような視点から青木原遺跡で利用された針葉樹を見ると、全12種のうち、古代に最も利用されている針葉樹としてヒノキ、サワラ、スギ、モミ属の4種を挙げることが出来る。これらは天然林からの切り出しと共に人工林の生産品であることが考えられる。一方、縄文・弥生時代以来、常に利用されてきている樹種としてカヤ、イスガヤ、イヌマキを挙げることができよう。これらは決して大量に使われることではなく、天然林あるいは集落内外に自生あるいは植栽したものを探し出して利用してきたと考えられる。これらと性格を異にするのはトウヒ属、カラマツ属である。静岡県地方ではトウヒ属（トウヒ）は中央・南アルプスの冷温帯上部から亜高山帯に生育し、カラマツ属（カラマツ）は富士山の亜高山帯などにあるもので、遺跡近くに生育していたとは言いがたいもので、中世以降の奥地林の開発（伐採）の結果、市場に登場した「新顔」の木材であったことだろう。このように、当遺跡では、近世に至っての天然及び人工林の木材利用と、奥地林開拓による木材供給が台わざった形で認めることが出来たと言える。なお、本遺跡では漆塗りの桶と包丁の鞘かと思われるものにイチイ材が使われているが、一般に遺跡からのイチイ材の出土は極めて希で、「漆塗り」というある意味で特別な用途への利用の実例が明らかになった。また、マツ属は1点のみの出土で、近世の他の遺跡ではマツ類の出土例が多くなるのと大きく異なっている。マツ類の出土の増加は一般には近世における自然林の減少に代わるマツ林の拡大の結果と看做されているが、本遺跡での結果は、出土し、調べられた木材の「器種」の偏りによるものか、そもそも青木原遺跡がこの地域で未だマツ林が拡大する以前のものであることに依るのかは不明である。

表2 青木原遺跡出土木材の樹種組成

樹種	品種	寄	下数	土木材	備材	その他	合計	2006年
ヒノキ	15		1		2	5	23	9
スギ	9	2			1		12	5
ケヤキ	2		6				8	2
モミ属	3	1		1	1		8	1
トウヒ属	5						5	2
サワラ	3				1	1	5	
ブナ属	5						5	1
エゴノキ属			1			2	3	
キハダ			3				3	
クリ	1		2				3	
イチイ	1					1	2	
カヤ						1	1	1
イヌマキ属				1			1	
マツ属			1				1	
アカガシ属						1	1	
カエデ属						1	1	
コナラ属						1	1	
アスナロ								2
ケンボナシ属								2
トドノキ								2
イスガヤ								1
カツラ								1
カラマツ属								1
竹篭						1	1	
総計	46	3	14	2	5	14	22	30

2006年箇果からは「ヒノキ科」とされた1点を除いてある

写真図版 I

付録1 静岡県三島市青木原道新造土木材の构造



1a. モミ属 12867 木口×30.

1b. 同 板目×60.

1c. 同 横目×240.



2a. カシ属 12883 木口×30.

2b. 同 板目×60.

2c. 同 横目×240.

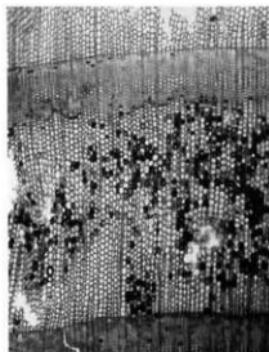


3a. マツ属 12902 木口×30.

3b. 同 板目×60.

3c. 同 横目×240.

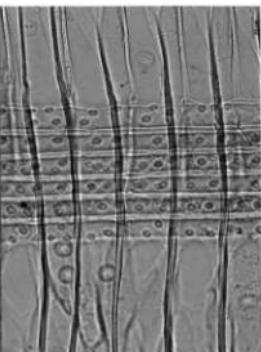
写真図版 II



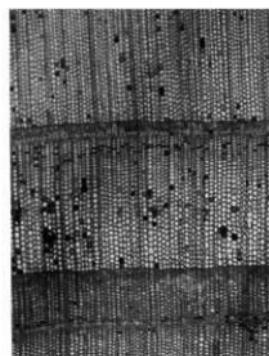
4a. スギ 12850 木口×30.



4b. 同 板目×60.



4c. 同 杖目×240.



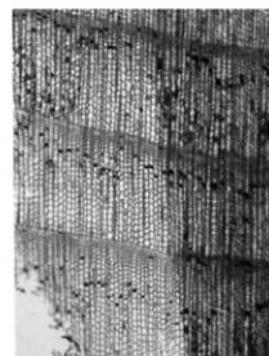
5a. ヒノキ 12872 木口×30.



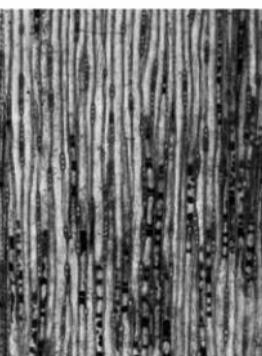
5b. 同 板目×60.



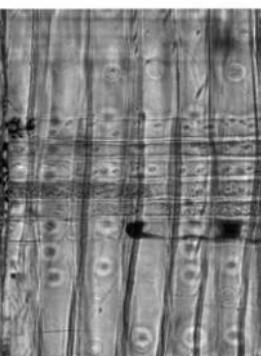
5c. 同 杖目×240.



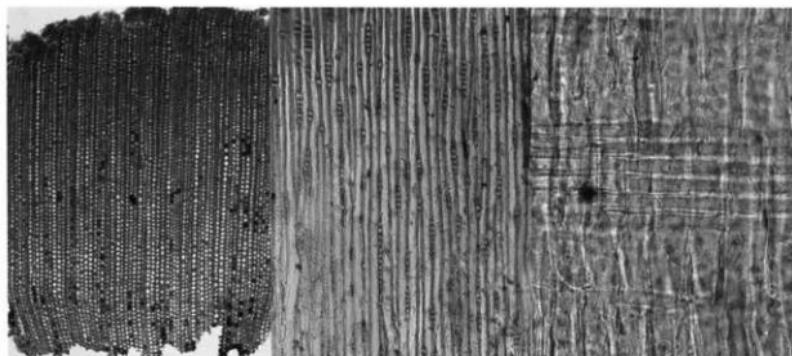
6a. サワラ 12919 木口×30.



6b. 同 板目×60.



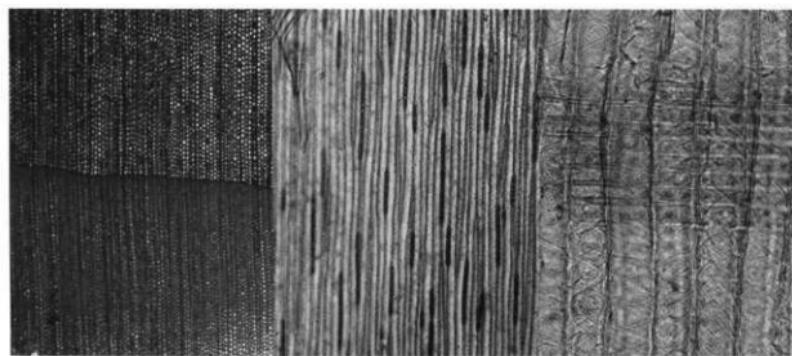
6c. 同 杖目×240.



7a. イヌマキ属 12917 木口×30.

7b. 同 板目×60.

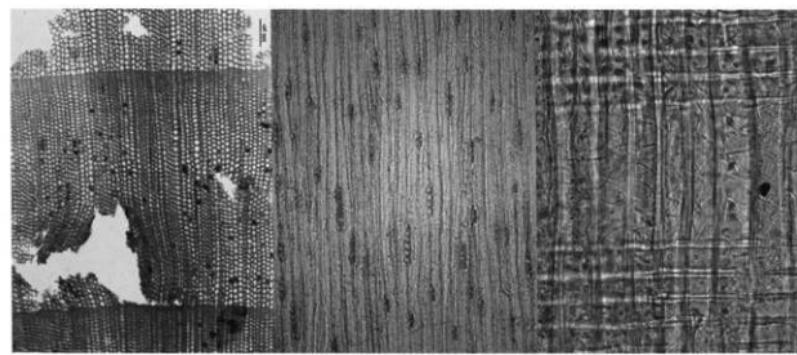
7c. 同 横目×240.



8a. イチイ 12886 木口×30.

8b. 同 板目×60.

8c. 同 横目×240.

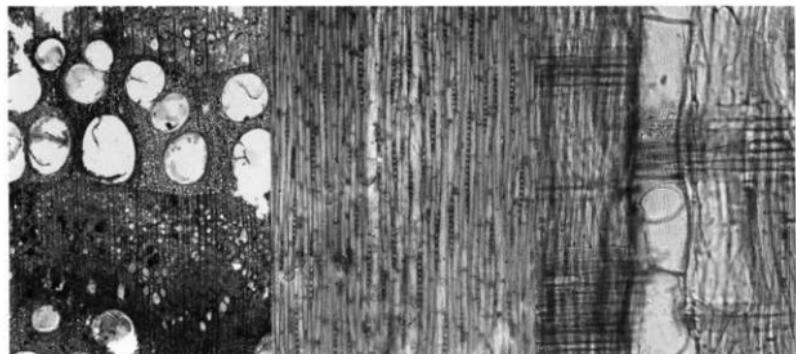


9a. カヤ 12887 木口×30.

9b. 同 板目×60.

9c. 同 横目×240.

写真図版IV



10a. クリ 12903 木口×30.

10b. 同 板目×60.

10c. 同 杢目×120.



11a. ブナ属 12842 木口×30.

11b. 同 板目×60.

11c. 同 杢目×120.



12a. アカガシ亞属 12884 木口×30.

12b. 同 板目×60.

12c. 同 杢目×120.



13a. コナラ節 12892 木口×30.

13b. 同 板目×60.

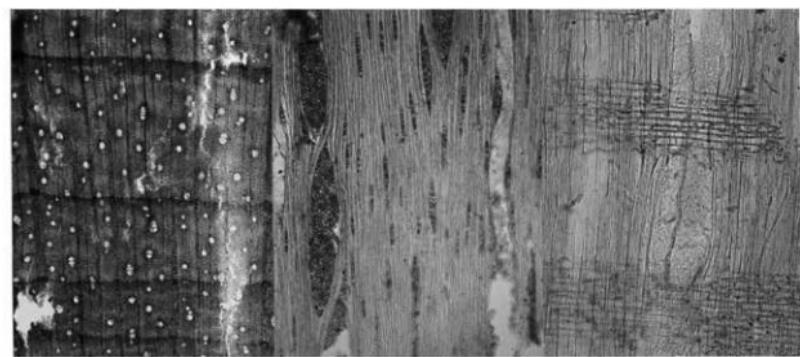
13c. 同 横目×120.



14a. ケヤキ 12906 木口×30.

14b. 同 板目×60.

14c. 同 横目×120.

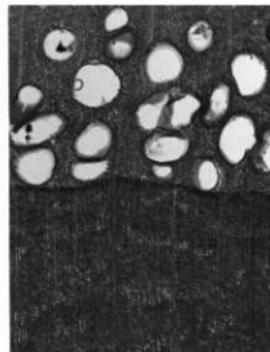


15a. カエデ属 12896 木口×30.

15b. 同 板目×60.

15c. 同 横目×120.

写真図版VI



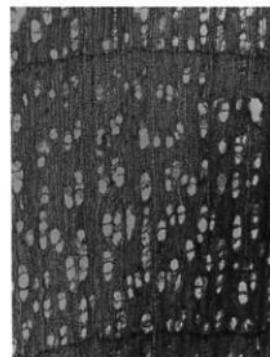
16a. キハダ 12919 木口×30.



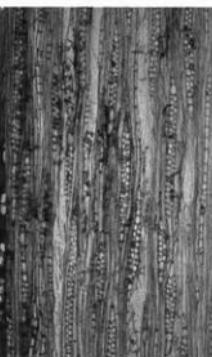
16b. 同 板目×60.



16c. 同 杢目×120.



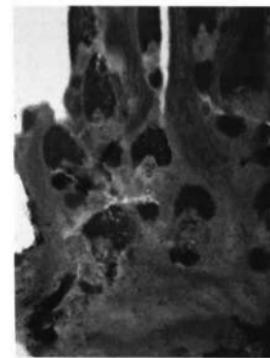
17a. エゴノキ属 12905 木口×30.



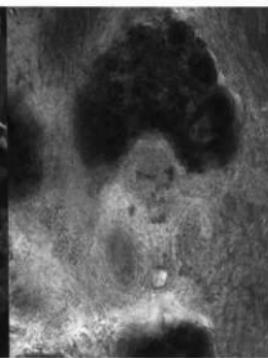
17b. 同 板目×60.



17c. 同 杢目×120.



18a. タケササ類 12895 木口×30.



18b. 同 木口×120.

付編2 青木原遺跡の自然科学分析

金井 優司（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

青木原遺跡(群馬県三島市南二日町に所在)は、三島・沼津平野の東部を北西～南東方向に走る御殿川中流域の左岸に位置する。これまでの発掘調査により、弥生時代後期～古墳時代前期の方形周溝墓、古墳時代～古代の住居跡などが検出されている。今回、調査区内から出土した動物骨について、その種類を明らかにして当時の動物利用などに関する資料を得ることにした。

1. 試料

試料は、発掘調査段階で取り上げられた骨13点(骨1～13)、歯牙41点(歯1～41)である。大半は1試料中に1点の骨あるいは歯牙片があるが、中には複数点の破片が含まれる場合がある。試料はいずれも水漬き状態である。なお、試料の詳細については結果と併せて表示する。

2. 分析方法

試料を肉眼で観察し、種類・部位を同定する。写真撮影後、蒸留水にエタノールを少量加えた溶液で保管する。なお、計測は、デジタルノギスを使用する。なお、骨格各部位の名称は、ウマを例として図1に示す。

3. 結果

確認された骨は、いずれも哺乳類であり、ヒト、イヌ、ウマ、ニホンジカ、ウシに同定された(表1)。同定結果を表2に示す。以下、試料ごとに結果を記す。

<骨1:取上番号4363> 頭蓋骨とみられる破片である。ヒトの可能性もあるが、詳細不明である。
 <骨2:取上番号1017> イヌの頭蓋骨である。破片となっており、左右上顎骨が比較的良好な状態で残り、左上顎骨では第4前臼歯から第2後臼歯までが、右上顎骨では第4前臼歯と第1・2後臼歯が植立する。

<骨3:取上番号127> ウマ/ウシの胸椎である。切断されるが、切断面は新しい。

<骨4:取上番号4201> イヌの第2頸椎である。ほぼ完存する。

<骨5:取上番号2070> ウマの左大脛骨である。両端が欠損する。

<骨6:取上番号2439> 大型獣類の四肢骨片である。酸化鉄が沈着顯著である。

<骨7:取上番号3217> 獣類の四肢骨片である。酸化鉄の沈着が顯著である。

<骨8:取上番号3218> ニホンジカの右中足骨である。3片あるが、同一骨である。

<骨9:取上番号3288> 獣類の四肢骨片である。

<骨10:取上番号3996> 獣類の四肢骨片である。

<骨11:取上番号4958> ヒトの右大脛骨である。

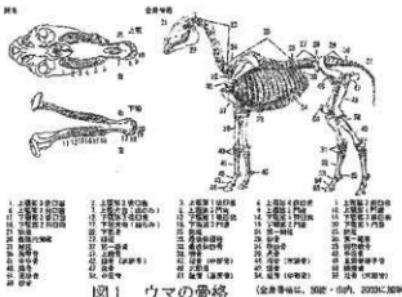
図1 ウマの骨格
(全骨格図は、SIMP・GIF・2020年3月)

表1 検出動物分類群の一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
哺乳綱	Class Mammalia
サル目(靈長目)	Order Primates
ヒト科	Family Hominidae
オニコロ目(食肉目)	Order Carnivora
イヌ科	Family Canidae
イヌ	Canis familiaris
ウマ目(奇蹄目)	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	Equus caballus
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	Cervus nippon
ウシ科	Family Bovidae
ウシ	Bos taurus

- <骨12:取上番号1329> 種類、部位とともに不明である。
- <骨13:取上番号4639> ウマ/ウシの椎骨片である。切断されているが、切断面は新しい。
- <歯1:取上番号410> ウマの右上顎第2後臼歯である。臼歯高76mm前後を計る。
- <歯2:取上番号706> ウマの歯牙片である。
- <歯3:取上番号709> ウマの門歯である。
- <歯4:取上番号869> ウシの左上顎第3後臼歯である。破損する。
- <歯5:取上番号1174> ウマの右上顎第2後臼歯である。臼歯高64mm前後を計る。
- <歯6:取上番号1318> ウマの歯牙片である。
- <歯7:取上番号1392> ウマの歯牙片である。
- <歯8:取上番号1490> ウマの歯牙片である。
- <歯9:取上番号1548> ウマの右下顎第2門歯である。被片である。
- <歯10:取上番号1859> ウマの右上顎第2前臼歯(歯10)20。
- <歯11:取上番号1911> ウマの左下顎歯牙片である。
- <歯12:取上番号1921> ウマの上顎歯牙片である。
- <歯13:取上番号1928> ウマの歯牙片である。
- <歯14:取上番号1965> ウマ右上顎第3後臼歯である。
- <歯15:取上番号1997> ウマの歯牙片である。
- <歯16:取上番号2204> ウマの左下顎第2後臼歯である。臼歯高67mm前後を計る。
- <歯17:取上番号2256> ウマの左上顎第3後臼歯である。臼歯高38mm前後を計る。
- <歯18:取上番号2342> ウマの歯牙片である。
- <歯19:取上番号2434> ウマの左上顎第4前臼歯である。臼歯高32mm前後を計る。
- <歯20:取上番号2569> ウマの左上顎第4前臼歯である。臼歯高42mm前後を計る。
- <歯21:取上番号2578> ウマの歯牙片である。
- <歯22:取上番号2801> ウマの右上顎歯である。
- <歯23:取上番号2855> ウマの右上顎歯である。
- <歯24:取上番号3022> ウマの右下顎歯である。第1後臼歯の可能性がある。
- <歯25:取上番号3784> ウシの左下顎第3後臼歯である。
- <歯26:取上番号3794> ウマの右下顎第4前臼歯である。臼歯高35mm前後を計る。
- <歯27:取上番号3799> ウマの歯牙片である。
- <歯28:取上番号3818> ウマの右下顎第2後臼歯である。臼歯高32.1mmを計る。
- <歯29:取上番号3871> ウマの左下顎第1後臼歯である。臼歯高39.6mmを計る。
- <歯30:取上番号4054> ウマの右上顎第4前臼歯である。臼歯高51mm前後を計る。
- <歯31:取上番号4271> ウマの左上顎第2後臼歯である。
- <歯32:取上番号4346> ウマの左下顎第4前臼歯である。臼歯高42.9mmを計る。
- <歯33:取上番号4430> ウマの右上顎第4前臼歯である。臼歯高28.9mmを計る。
- <歯34:取上番号4588> ウマの左上顎第3後臼歯である。
- <歯35:取上番号4853> ウマの門歯である。
- <歯36:取上番号4877> ウマの左上顎第3後臼歯である。
- <歯37:取上番号4903> ウマの右下顎第3前臼歯である。臼歯高76mm前後を計る。
- <歯38:取上番号5193> ウマの右下顎歯である。
- <歯39:取上番号5138> ウマの右下顎第3後臼歯である。臼歯高36.6mmを計る。

表2 骨同定結果

出土番号	種類	部位	年齢	部分	性別	備考	指定年齢
骨1 4266	ヒト?	頭顱骨		板片	1		
骨2 1617	イヌ	頭顱骨		板片	少數		
		上頸骨	女	P ₄ -M ₃	1	P-M ₃ 独立	
				P ₄ -M ₃	1	M ₃ 独立	
			右	P ₄ -M ₃	1	新しい切断	
骨3 1127	ウマ	脚骨		板片	1		
骨4 4261	イヌ	第2掌椎		ほぼ完全	1		
骨5 2670	ウマ	大脛骨	左	頭端矢	1		
骨6 2459	大鳥取熊	四肢骨		板片	1	毛包片+有・無化鉄が尻尾端部	
骨7 3217	鹿	四肢骨		頭端矢	1	種子頭部	
骨8 3216	ニホンジカ	中足骨	左	頭端矢	3	馬一骨	
骨9 3265	駒鹿	四肢骨		板片	1		
骨10 3955	駒鹿	四肢骨		板片	1		
骨11 4056	ヒト	大脛骨	右	板片	1	毛包片+3+有	
骨12 1329	不明			板片	1		
骨13 4830	ウマ?ウシ	頭骨		板片	1	新しい切断	
骨14 416	ウマ	上頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.0±	4歳程度?
骨15 708	ウマ	歯冠		板片	1		
骨16 709	ウマ	門歯		板片	1		
骨17 958	ウシ	上頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1		
骨18 1174	ウマ	上頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1	臼齒高4.4±	4~5歳程度?
骨19 1316	ウマ	歯冠		板片	1		
骨20 1392	ウマ	歯冠		板片	1		
骨21 1480	ウマ	歯冠		板片	1		
骨22 1544	ウマ	下頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1		
骨23 1590	ウマ	上頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1		
骨24 1911	ウマ	下頸歯牙	左	板片	1		
骨25 1921	ウマ	上頸歯牙		板片	1		
骨26 1928	ウマ	歯冠		板片	1		
骨27 1965	ウマ	上頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1		
骨28 1997	ウマ	歯冠		板片	1		
骨29 2201	ウマ	下頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1	臼齒高4.0±	4歳程度?
骨30 2295	ウマ	上頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.8±	10歳程度?
骨31 2342	ウマ	歯冠		板片	1		
骨32 2454	ウマ	上頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.9±	12~13歳程度?
骨33 2566	ウマ	上頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.2±	9~10歳程度?
骨34 2578	ウマ	歯冠		板片	1		
骨35 2821	ウマ	上頸歯牙	右	板片	1		
骨36 2835	ウマ	上頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1		
骨37 3022	ウマ	下頸歯牙	右	板片	1		
骨38 3784	ウシ	下頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1		
骨39 3793	ウマ	下頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.6±	11歳程度?
骨40 3797	ウマ	歯冠		板片	1		
骨41 3818	ウマ	下頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.2±	13~14歳
骨42 3871	ウマ	下頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.9±	10歳
骨43 4054	ウマ	上頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.1±	6~7歳程度?
骨44 4271	ウマ	上頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1		
骨45 4366	ウマ	下頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1	臼齒高4.2±	5~6歳
骨46 4499	ウマ	上頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.6±	14歳
骨47 4688	ウマ	上頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1		
骨48 4833	ウマ	門歯		板片	1		
骨49 4877	ウマ	上頸歯牙	左	P ₄ -M ₃	1		
骨50 4933	ウマ	下頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.6±	3歳程度?
骨51 5193	ウマ	下頸歯牙	右	板片	1		
骨52 5158	ウマ	下頸歯牙	右	P ₄ -M ₃	1	臼齒高3.6±	10~11歳
骨53 5127	ウマ	下頸歯牙	左	板片	1		
骨54 5253	ウマ	歯冠		板片	1		

注: I: 門歯 P: 白臼歯 M: 黑臼歯

<齒40: 取上番号5127> ウマの左下頸第3後臼歯である。

<齒41: 取上番号5353> ウマの歯冠である。

4. 考察

検出された骨は、ヒト、イヌ、ウマ、ウシに同定された。いずれも部分的にしか出土しておらず、さらに解剖学的な位置を保っていないことから、周辺から流れ込んできたと考えられる。ただし、摩滅が顎骨でない点を考慮すると、比較的近傍から流れ込んだ可能性もある。ヒトは、右大腿骨のみの出土で

あった。出土地点近傍の墓地から流れ込んだ可能性がある。ニホンジカは、当時、狩猟の対象となっていたり、食糧資源の他、皮や骨・角などが利用されていたと推定される。また、イヌ、ウマ、ウシは、当時、人間の生活に密接に関係していたと思われる。中でも最も多く出土したウマは、右上顎第3後臼歯が4本確認されることから（表3）、少なくとも4個体存在していたと推定される。また、破損している歯牙が多いが、西中川ほか（1991）を参考に臼歯高から年齢を推定すると、おおよそ3～4歳程度、6～7歳程度、10歳程度、14歳程度のウマが含まれていると考えられる。

一方、出土した地点をみると、見かけ上平面的なまとまりが捉えられているが（図2において点線で囲んだ部分）、まとまりごとに出土した骨の中でウマの年齢に統一性がみられない（表3）。これは、骨が他箇所から流れ込んだことに由来するとみられる。

ところで御殿川流域では、これまで発掘調査に伴って出土した骨について調査が既に行われており、ウマが主体となることが明らかにされている（金子、1994, 1995）。これらの調査では、比較的形質を保った骨が出土しており、トカラ馬程度の小型馬やこれよりやや大きい御崎馬との中间的な個体が多いことが明らかにされている。今回、ウマの大きさを推定できる部位が出土していないが、ウマが多く出土する点で共通する。おそらく、本地域では、こうした家畜の利用が定常的にあったと思われ、それを裏付ける資料である。

表3 ウマ出土歯牙の部位別数量

	右												左							
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	C	I3	I2	I1	I1	I2	I3	C	P2	P3	P4	M1	M2	M3
上顎	2	2		2		1												2	1	4
下顎	1	1		1	1					1							1	1	1	2

引用文献

- 加藤 泰太郎・山内 信二, 2003, 新編 家畜比較解剖図説 上巻, 群賢堂, 315p.
- 金子 浩昌, 1994, 静岡県三島市御殿川流域遺跡群出土の動物遺体, 静岡県埋蔵文化財調査研究会調査報告第50集
御殿川流域遺跡群Ⅱ 平成2・3年度一般河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
中島西原田遺跡・八反畠前田遺跡・梅名大曲田遺跡, 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究会調査報告第67集
- 金子 浩昌, 1995, 三島市御殿川流域遺跡群出土の動物遺体, 静岡県埋蔵文化財調査研究会調査報告第67集
御殿川流域遺跡群Ⅲ 平成6年度一般河川御殿川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
鷺吹前田遺跡, 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, 164-170.
- 西中川 駿・木田 道輝・松元 先春, 1991, 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡來時期とその経路に関する研究
平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書, 99p.

图2 水母触须在圆平面上的分布

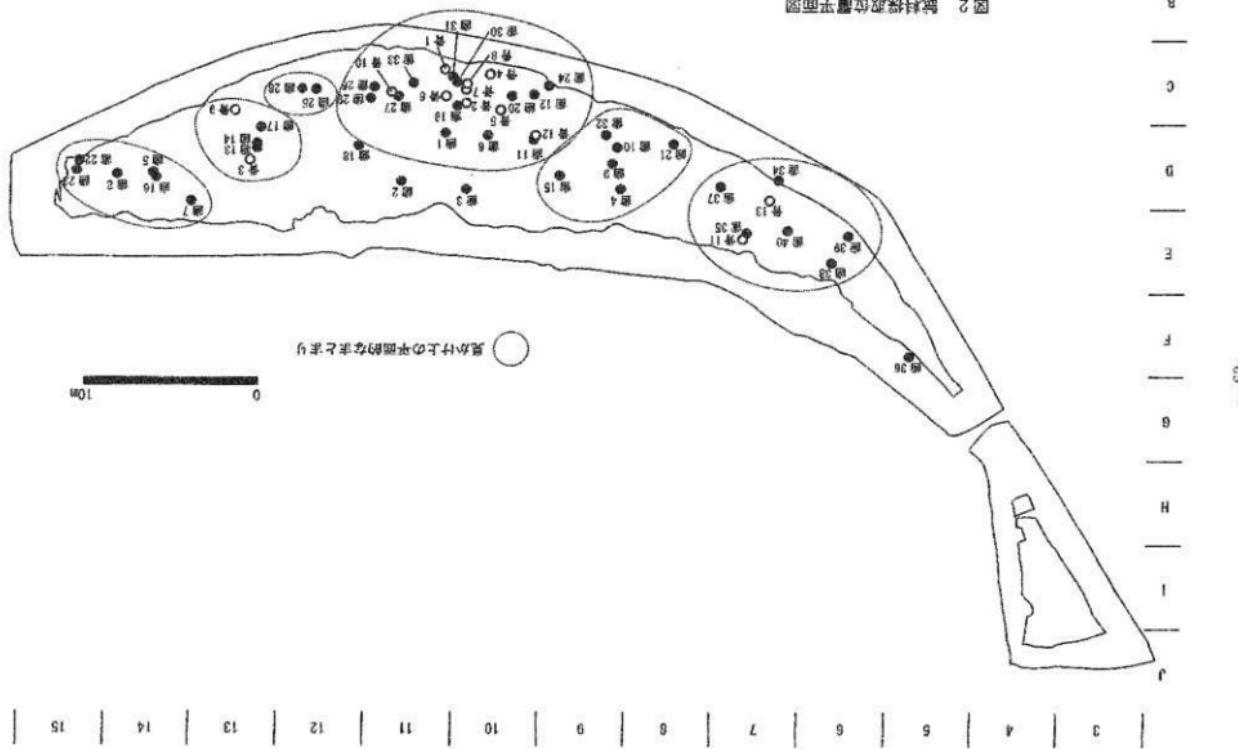
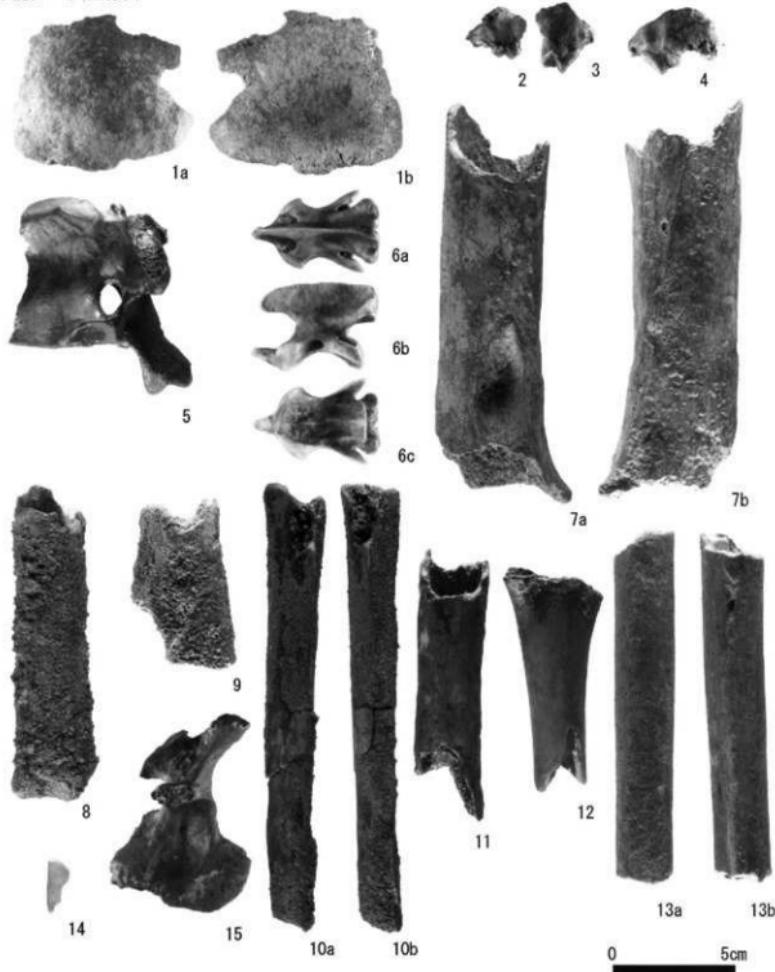


表4 平面まとまり別出上状況

致上番号	種類	部位	左右	部分	度量	備考	当年年齢
皆28	ウマ	下頬歯牙	右	破片	1		
皆39	ウマ	下頬歯牙	右	毛	1	臼齒高36.6	10~11歳
皆40	5127	ウマ	下頬歯牙	左	毛	1	
皆13	4520	ウマ/ウシ	被骨	破片	1	新しい切歎	
皆11	4528	ヒト	大顎骨	右	破片	1	他破片3つ有
皆34	4580	ウマ	上頬歯牙	左	毛	1	
皆35	4583	ウマ	門歯	破片	1		
皆37	4603	ウマ	下頬歯牙	右	P ₁	1	臼齒高79.1
皆21	2578	ウマ	歯牙	破片	1		
皆4	569	クシ	上頬歯牙	左	毛	1	
皆9	1548	ウマ	下頬歯牙	右	P ₁	1	
皆10	1589	ウマ	上頬歯牙	右	破片	1	
皆32	4546	ウマ	下頬歯牙	左	P ₁	1	臼齒高49.9
皆15	1867	ウマ	歯牙	破片	1		
皆11	1011	ウマ	下頬歯牙	左	破片	1	
皆24	3522	ウマ	下頬歯牙	右	破片	1	毛?
皆12	1921	ウマ	上頬歯牙	破片	1		
皆20	2569	ウマ	上頬歯牙	左	P ₁	1	臼齒高42.1
皆8	1316	ウマ	歯牙	破片	1		
皆12	1529	不明		破片	1		
皆5	2070	ウマ	大顎骨	左	兩歯欠	3	
皆4	4201	イヌ	第2強根		はげむし	2	
皆2	1017	イヌ	歯根骨		破片	多枚	
		上頬骨	左	P ₁ ~M ₁	1	P ₁ ~M ₁ 被立	
			右	P ₁	1	P ₁ 被立	
			毛	毛	1	P ₁ 被立	
皆7	3217	駄解	四肢骨	破片	1	駄化物跡	
皆6	3218	ニオンジカ	中足骨	右	角端炎	3	同一骨
皆19	2484	ウマ	上頬歯牙	左	P ₁	1	臼齒高38.0
皆1	416	ウマ	上頬歯牙	右	毛	1	臼齒高76.6
皆30	4584	ウマ	上頬歯牙	右	毛	1	臼齒高51.1
皆31	4271	ウマ	下頬歯牙	左	毛	1	6~7歳程度?
皆6	2429	大型駄解	四肢骨	破片	1	他破片3つ有, 駄化物が边缘附着	
皆1	4363	ヒト?	頭骨骨	破片	1		
皆33	4430	ウマ	下頬歯牙	右	P ₁	1	臼齒高26.9
皆27	3199	ウマ	歯牙	破片	1		
皆10	5896	駄解	四肢骨	破片	1		
皆26	3784	ウマ	下頬歯牙	右	P ₁	1	臼齒高35.1
皆29	3871	ウマ	下頬歯牙	左	E ₁	1	臼齒高36.6
皆25	3784	ウシ	下頬歯牙	左	E ₁	1	
皆25	3818	ウマ	下頬歯牙	右	E ₁	1	臼齒高32.1
皆17	2255	ウマ	上頬歯牙	左	M ₁	1	臼齒高38+
皆15	1526	ウマ	歯牙	破片	1		10歳程度?
皆14	1865	ウマ	上頬歯牙	右	毛	1	
皆3	127	ウマ/ウシ	頭骨	破片	1	新しい毛	
皆9	2755	駄解	頭骨骨	破片	1		
皆7	1382	ウマ	歯牙	破片	1		
皆16	2204	ウマ	下頬歯牙	左	毛	1	臼齒高67.1
皆5	1174	ウマ	上頬歯牙	左	毛	1	臼齒高64.1
皆3	1490	ウマ	歯牙	破片	1		4~5歳程度?
皆22	2801	ツバ	上頬歯牙	右	破片	1	
皆23	2895	ウマ	上頬歯牙	右	毛	1	
皆36	4577	ウマ	上頬歯牙	左	毛	1	
皆2	709	ウマ	歯牙	破片	1		
皆3	709	ウマ	門歯	破片	1		
皆18	2347	ウマ	歯牙	破片	1		
皆41	5833	ウマ	歯牙	破片	1		

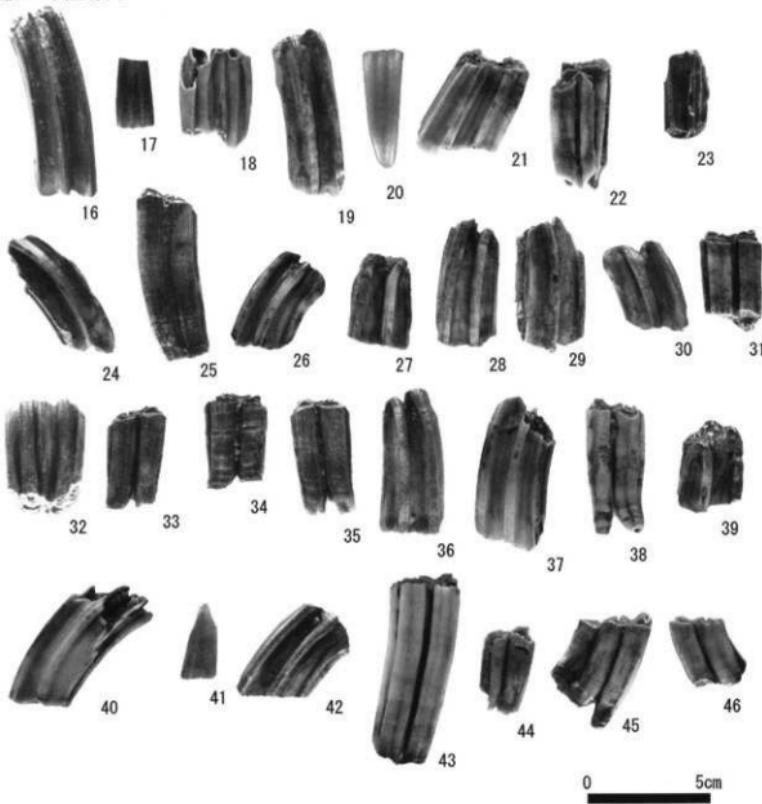
(左) L:門歯 P:前臼齒 M:後臼齒

図版1 出土骨(1)



1. ヒト？頭蓋骨(骨1;取上番号4368)
2. イヌ右上顎骨P4部(骨2;取上番号1017)
3. イヌ右上顎骨M1-2部(骨2;取上番号1017)
4. イヌ左上顎骨P4-M2部(骨2;取上番号1017)
5. ウマ/ウシ胸椎(骨3;取上番号127)
6. イヌ第2頸椎(骨4;取上番号4201)
7. ウマ左大腿骨(骨5;取上番号2070)
8. 大型獸類四肢骨(骨6;取上番号2439)
9. 獣類四肢骨(骨7;取上番号3217)
10. ニホンジカ右中足骨(骨8;取上番号3218)
11. 獣類四肢骨(骨9;取上番号3288)
12. 獣類四肢骨(骨10;取上番号3996)
13. ヒト右大腿骨(骨11;取上番号4958)
14. 不明(骨12;取上番号1329)
15. ウマ/ウシ椎骨(骨13;取上番号4639)

図版2 出土骨(2)



- 16. ウマ右上顎第3後臼歯(歯1;取上番号410)
- 17. ウシ左上顎第3後臼歯(歯4;取上番号869)
- 20. ウマ右下顎第2門歯(歯9;取上番号1548)
- 22. ウマ左下顎歯牙(歯11;取上番号1911)
- 24. ウマ右上顎第3後臼歯(歯14;取上番号1965)
- 26. ウマ左上顎第3後臼歯(歯17;取上番号2256)
- 28. ウマ左上顎第4前臼歯(歯20;取上番号2569)
- 30. ウマ右上顎歯牙(歯23;取上番号2855)
- 32. ウシ左下顎第3後臼歯(歯25;取上番号3784)
- 34. ウマ右下顎第2後臼歯(歯28;取上番号3818)
- 36. ウマ右上顎第4前臼歯(歯30;取上番号4054)
- 38. ウマ左下顎第4前臼歯(歯32;取上番号4346)
- 40. ウマ左上顎第3後臼歯(歯34;取上番号4588)
- 42. ウマ左上顎第3後臼歯(歯36;取上番号4877)
- 44. ウマ右下顎歯牙(歯38;取上番号5193)
- 46. ウマ左下顎第3後臼歯(歯40;取上番号5127)
- 17. ウマ門歯(歯3;取上番号709)
- 19. ウマ右上顎第2後臼歯(歯5;取上番号1174)
- 21. ウマ右上顎第2前臼歯(歯10;取上番号1859)
- 23. ウマ左顎歯牙(歯12;取上番号1921)
- 25. ウマ左下顎第2後臼歯(歯16;取上番号2204)
- 27. ウマ左上顎第4前臼歯(歯19;取上番号2434)
- 29. ウマ右上顎歯牙(歯22;取上番号2801)
- 31. ウマ右下顎歯牙(歯24;取上番号3022)
- 33. ウマ右下顎第4前臼歯(歯26;取上番号3794)
- 35. ウマ左下顎第1後臼歯(歯29;取上番号3871)
- 37. ウマ左上顎第2後臼歯(歯31;取上番号4271)
- 39. ウマ右上顎第4前臼歯(歯33;取上番号4430)
- 41. ウマ門歯(歯35;取上番号4853)
- 43. ウマ右下顎第3前臼歯(歯37;取上番号4903)
- 45. ウマ右下顎第3後臼歯(歯39;取上番号5138)

写 真 図 版

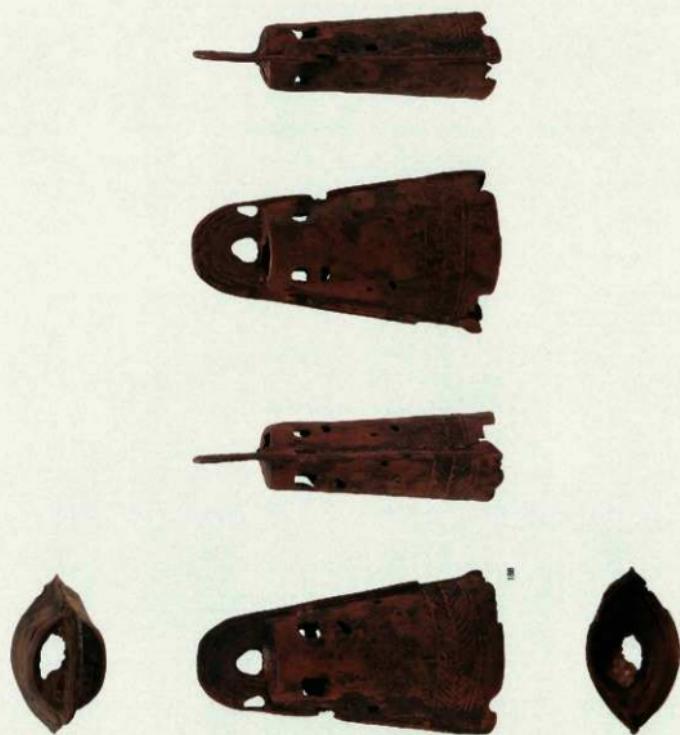
図版1



1. 調査区南東部（西側より撮影）



2. 調査区北西部（北西側より撮影）



小銅鐸

(六件合拍)

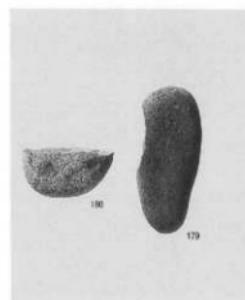
圖版 3



1. 銅銷再加工品



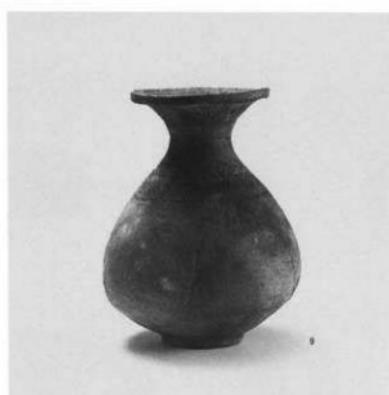
2. 網文土器



3. 敲 石



2



9

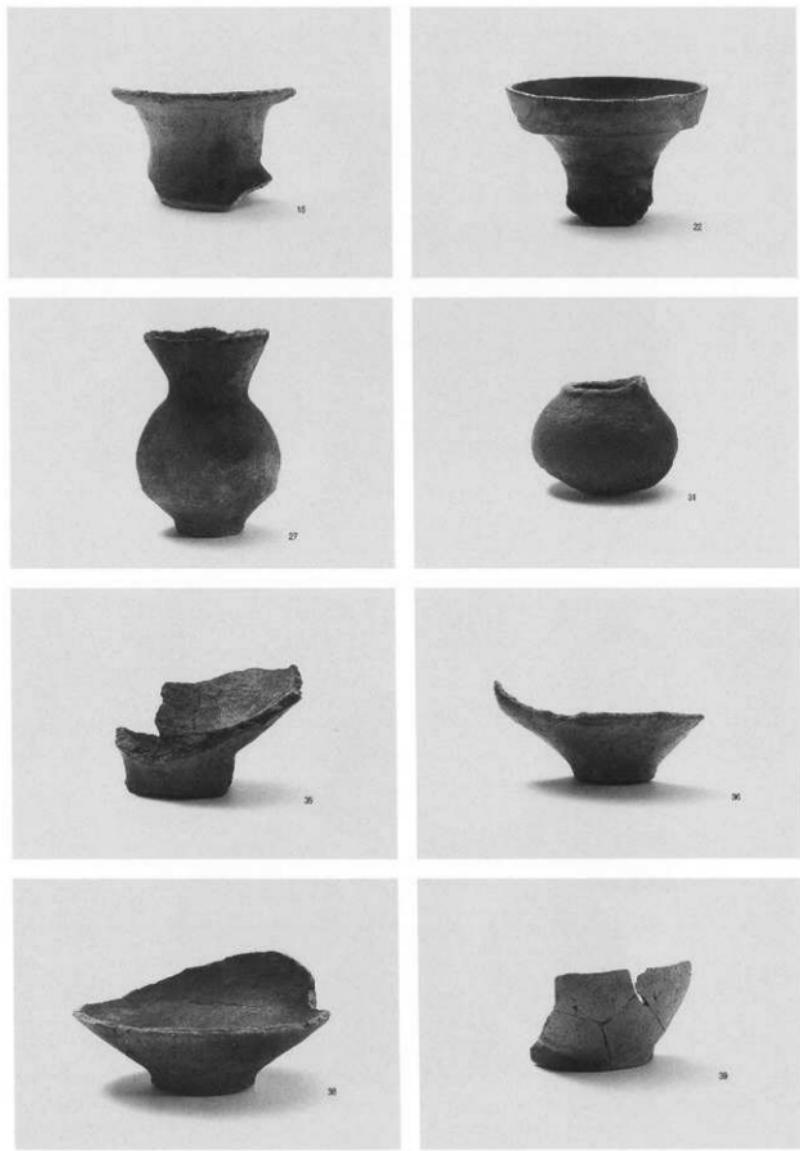


10



11

4. 弛生土器（壺）



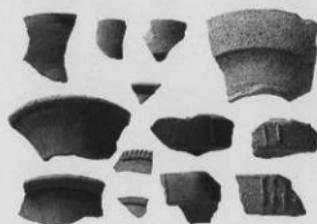
赤生土器・土師器（壺・小型壺・鉢）



1. 弥生土器・土師器（壹・台付壺集合）



2. 弥生土器・土師器（高环集合）



壺（口縁部）



壺（頸～底部）



46



台付壺



51



57

弥生土器・土師器（壺・高环・台付壺）



1. 土器器（壺）



4. 須惠器（壺蓋）

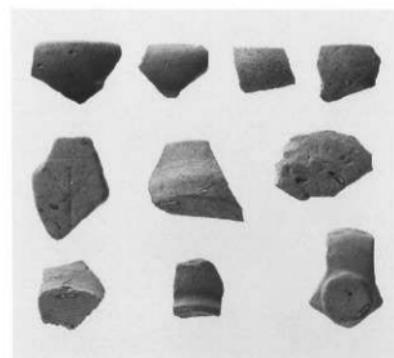


75

2. 土器器（壺）



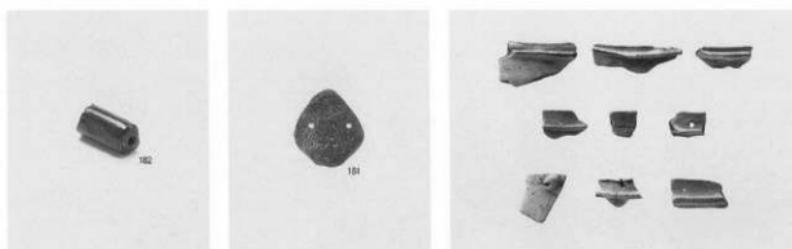
5. 須惠器・灰釉陶器・山茶壺（壺・碗類）



3. 土器器（壺・柱状高台）



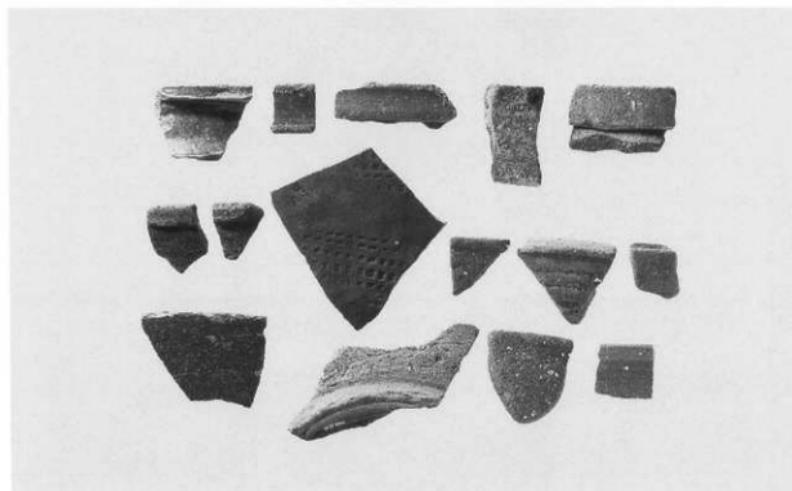
6. 須惠器（壺・甕類）



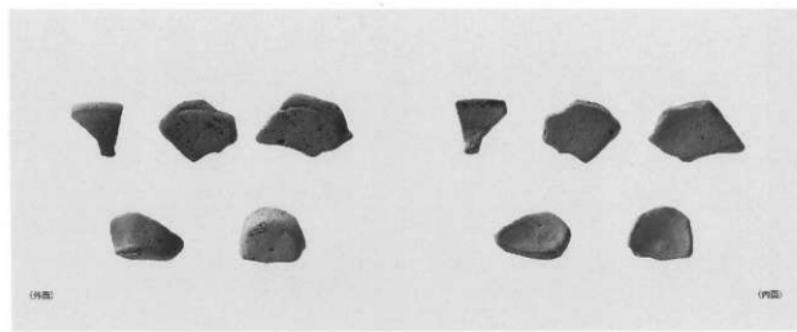
1. 管 玉

2. 石製模造品

4. 中世煮沸具（鍋・羽釜）



3. 中世常滑産炻器



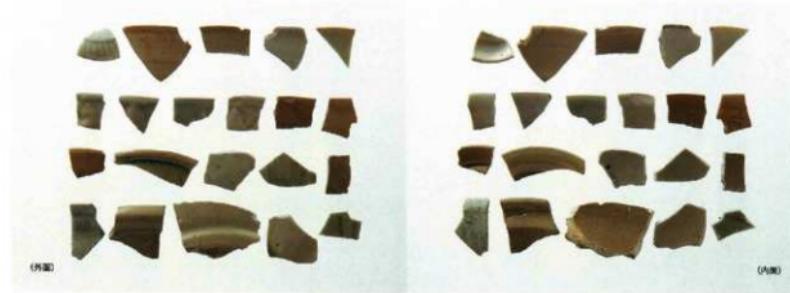
5. かわらけ皿類



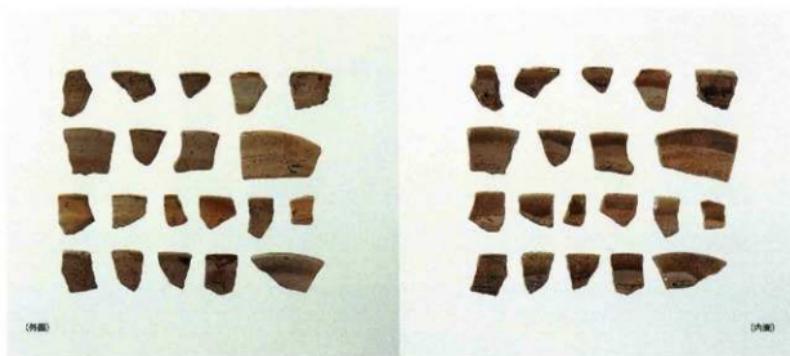
1. 古代瓦集合



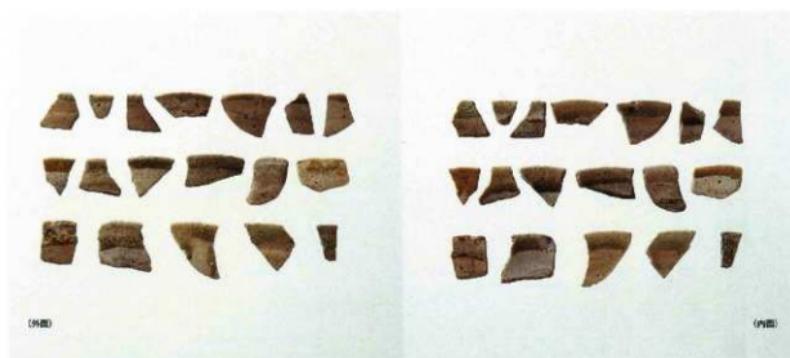
2. 古代 瓦



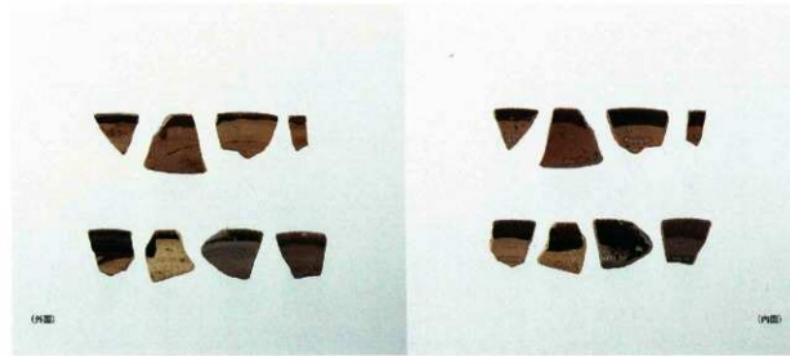
3. 中世輸入磁器



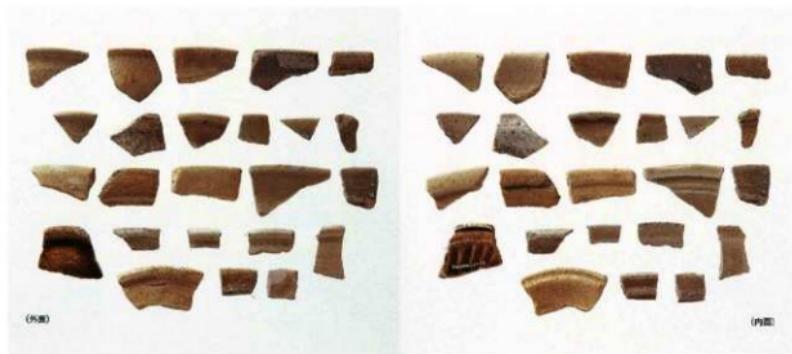
1. 中世瀬戸・美濃系陶器（緑釉皿 灰釉塗布1）



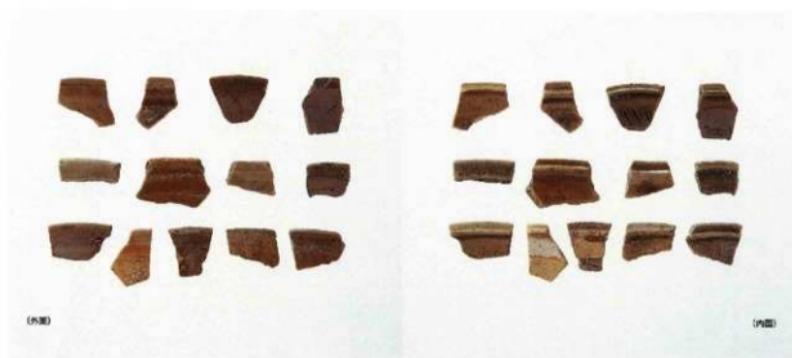
2. 中世瀬戸・美濃系陶器（緑釉皿 灰釉塗布2）



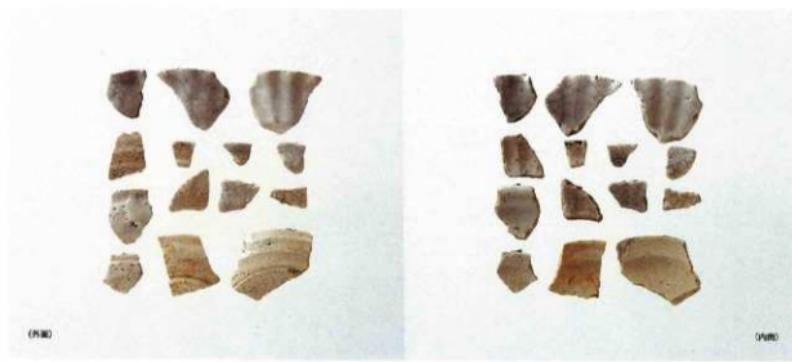
3. 中世瀬戸・美濃系陶器（緑釉皿 鉄釉塗布）



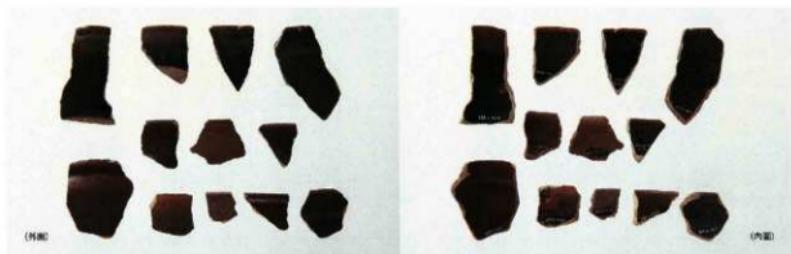
1. 中世瀬戸・美濃系陶器（折縁皿）



2. 中近世瀬戸・美濃系陶器（側皿）



3. 中世瀬戸・美濃系陶器（皿類 志野繪塗布）



1. 中近世瀬戸・美濃系陶器（天目碗）



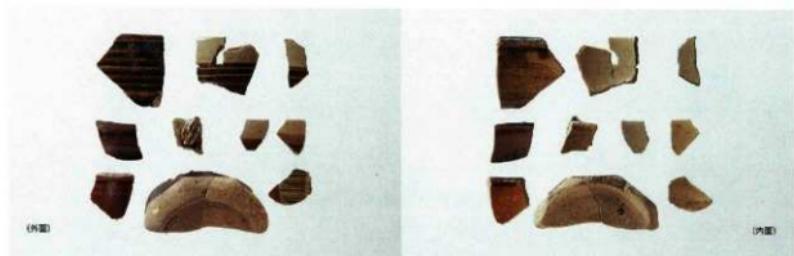
2. 中近世瀬戸・美濃系陶器（抹鉢）



3. 近世瀬戸・美濃系陶器（鉢類・片口・灯明皿）



4. 中近世瀬戸・美濃系陶器（壺・花瓶類）・瓦器



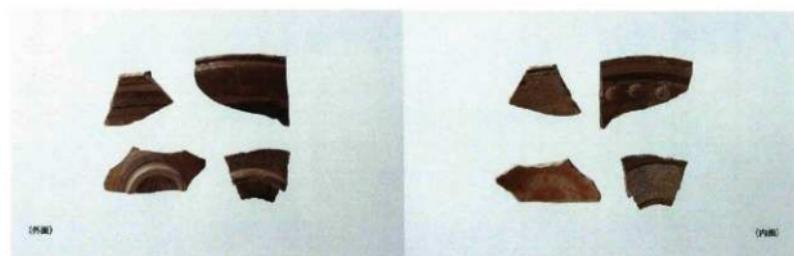
1. 近世瀬戸・美濃系陶器（腰錫碗・香炉・灰落とし）



2. 近世瀬戸・美濃系陶器（仏供具）



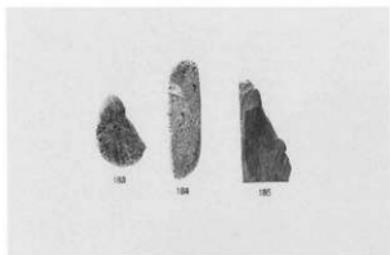
3. 近世瀬戸・美濃系陶器（瓶類）



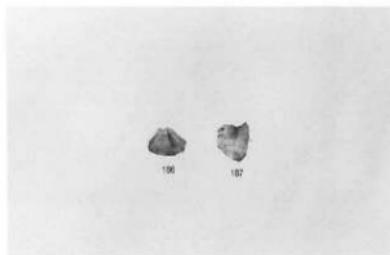
4. その他の近世陶器（鉢類・輪禿皿）



5. 肥前系磁器



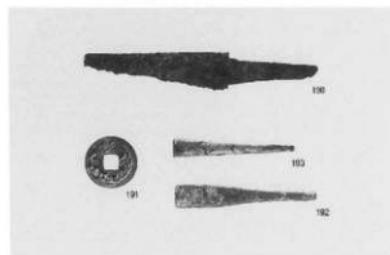
1. 石器（砾石・硯）



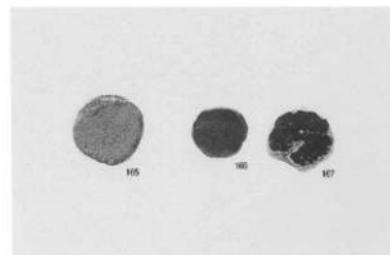
2. 石器（火打石）



3. 近世・近代瓦



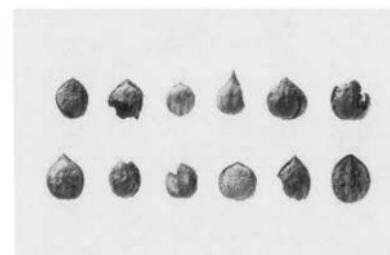
4. 金属製品（刀子・錢貨・煙管）



5. 土製品（土器片加工円盤）



6. 土製品（土人形）



7. 種子（胡桃）



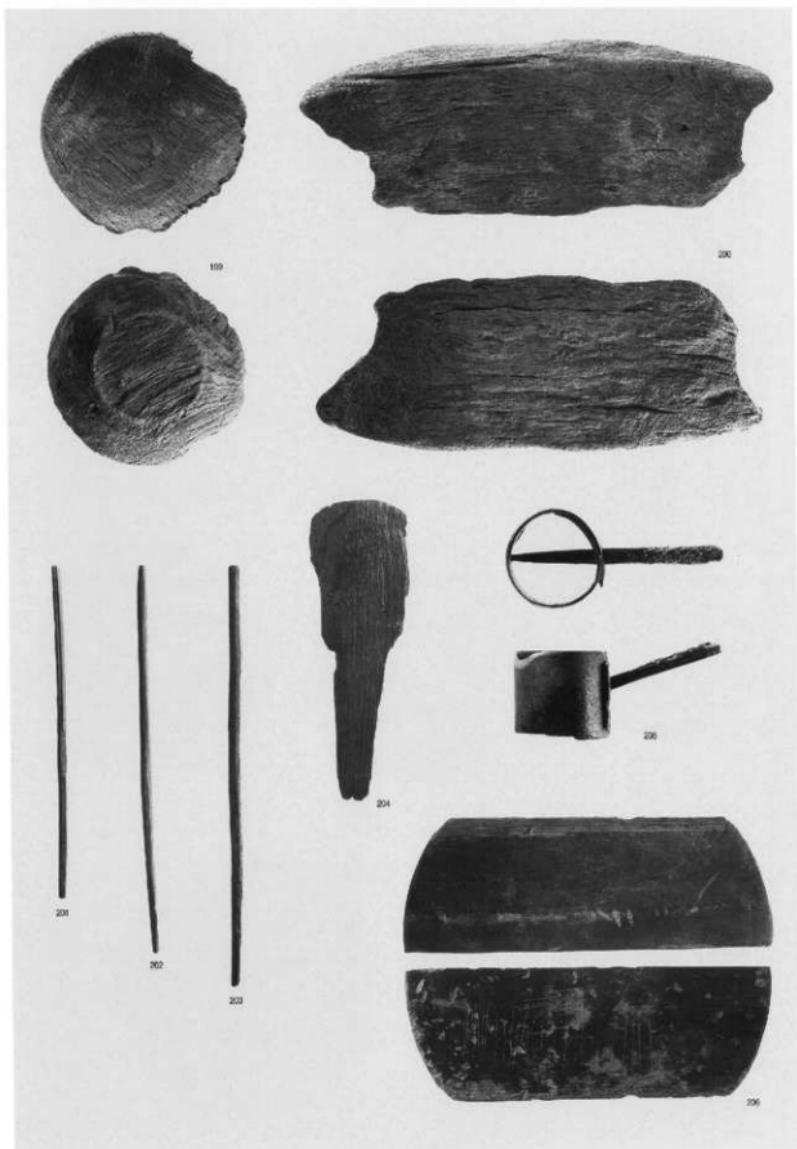
8. 種子（桃または、梅）



1. 漆製品集合

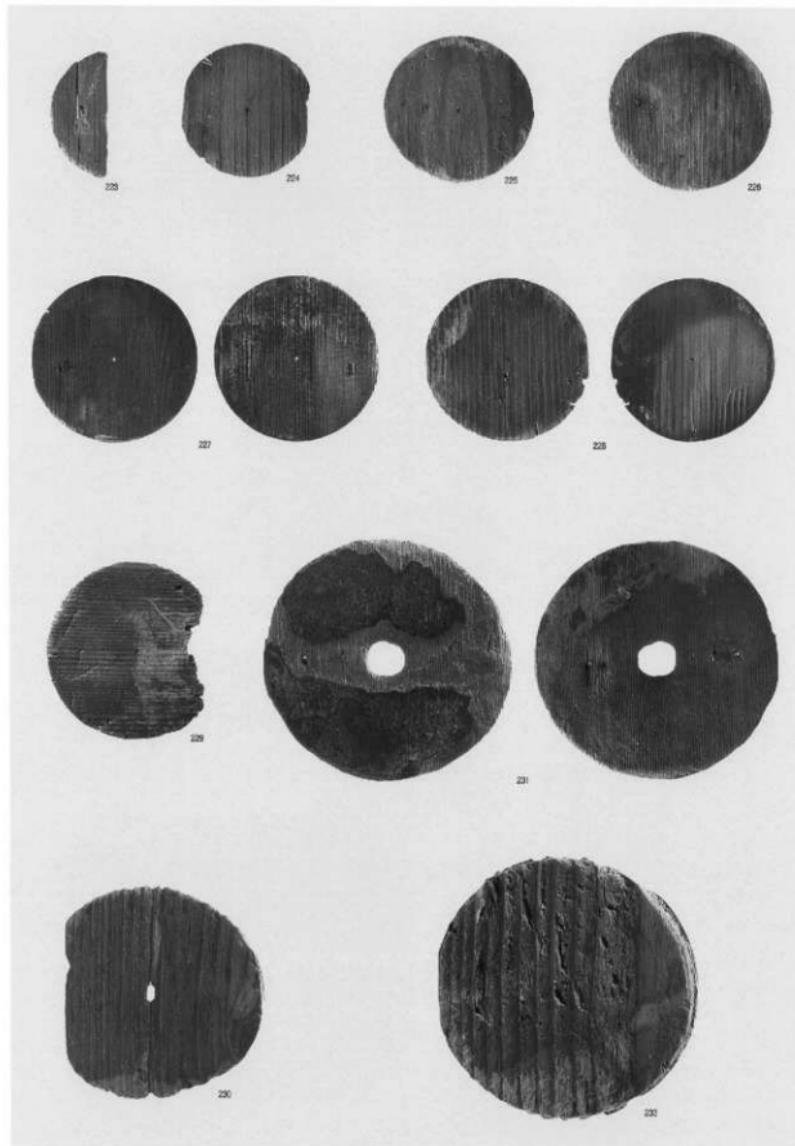


2. 柱 集 合

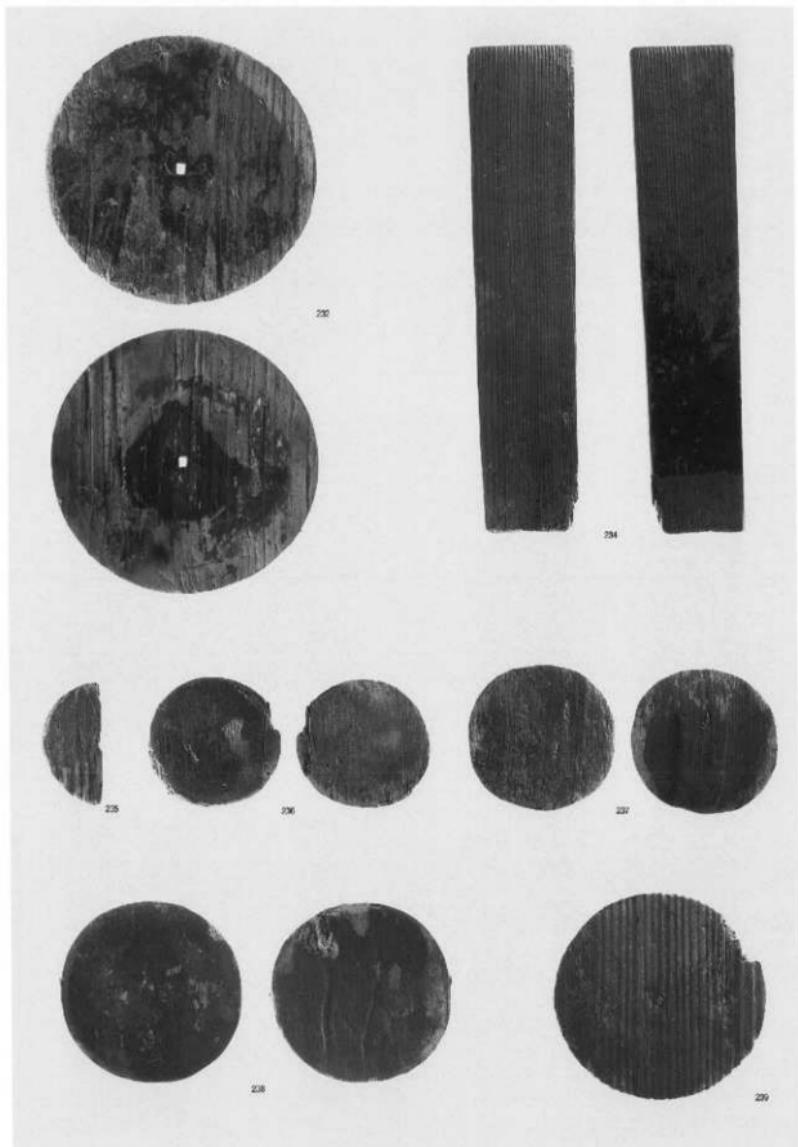


木製品（容器・食事具）

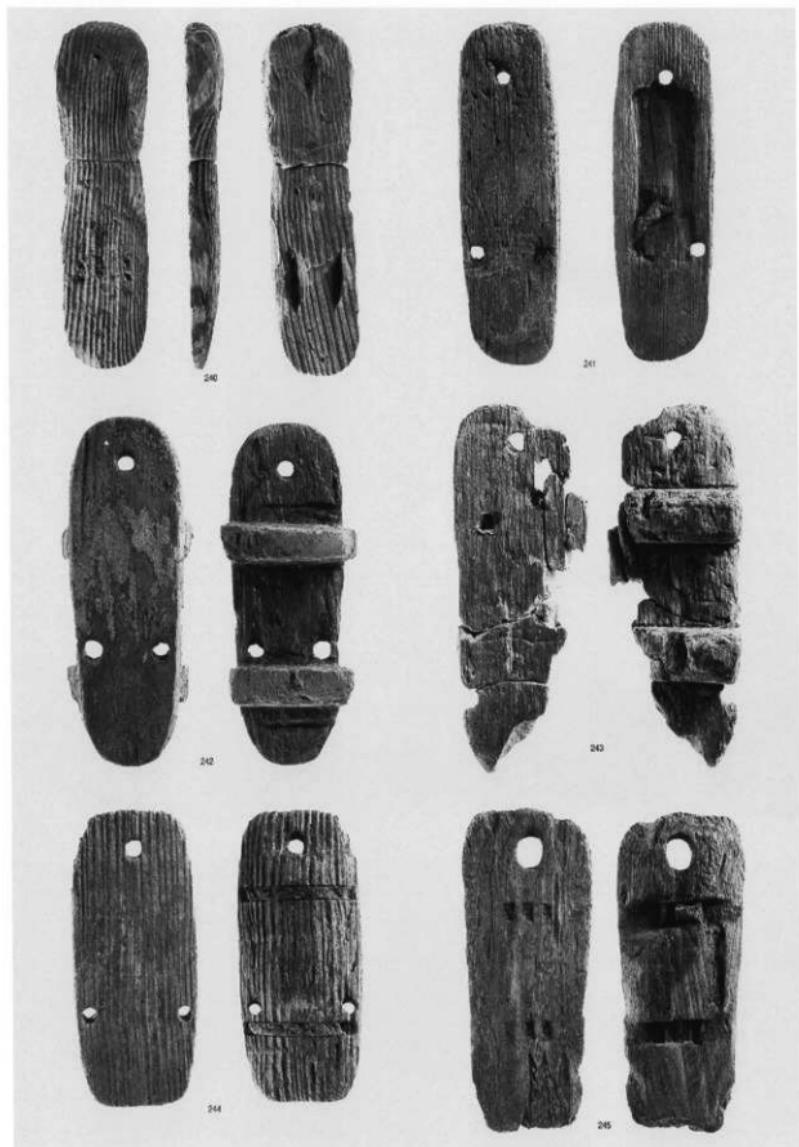
図版17



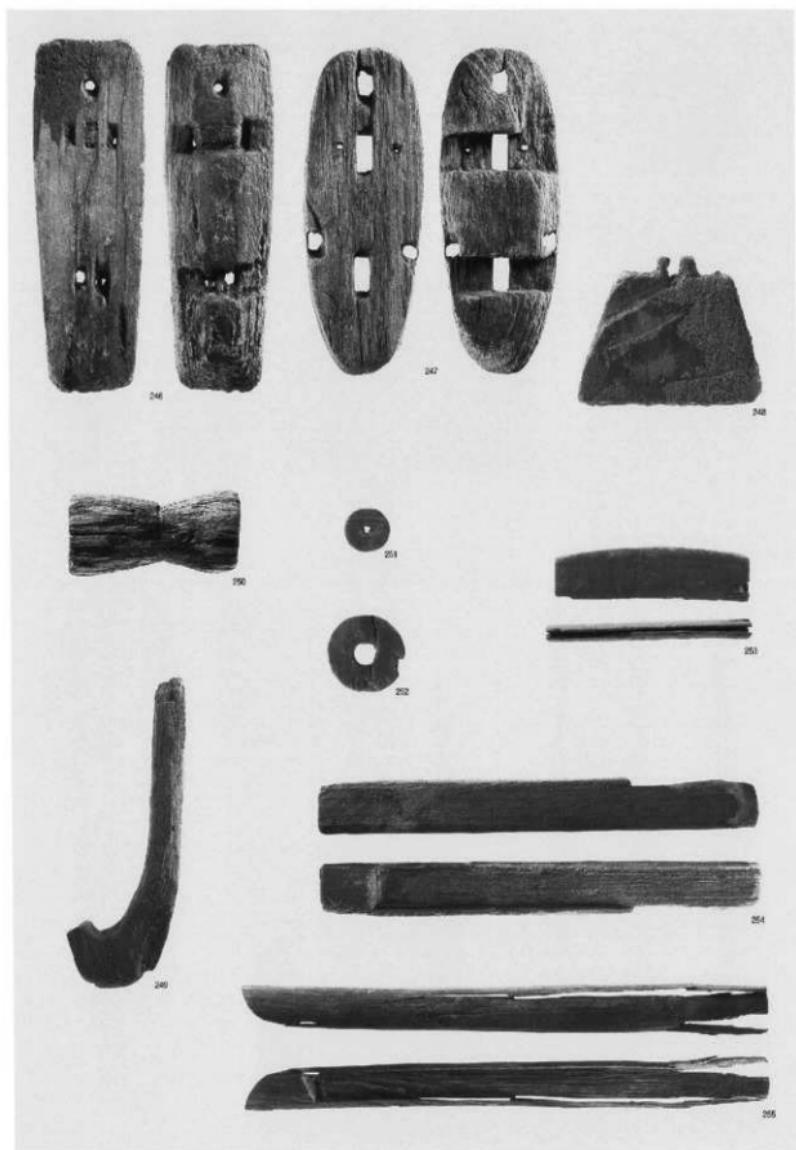
木製品（蓋板1）



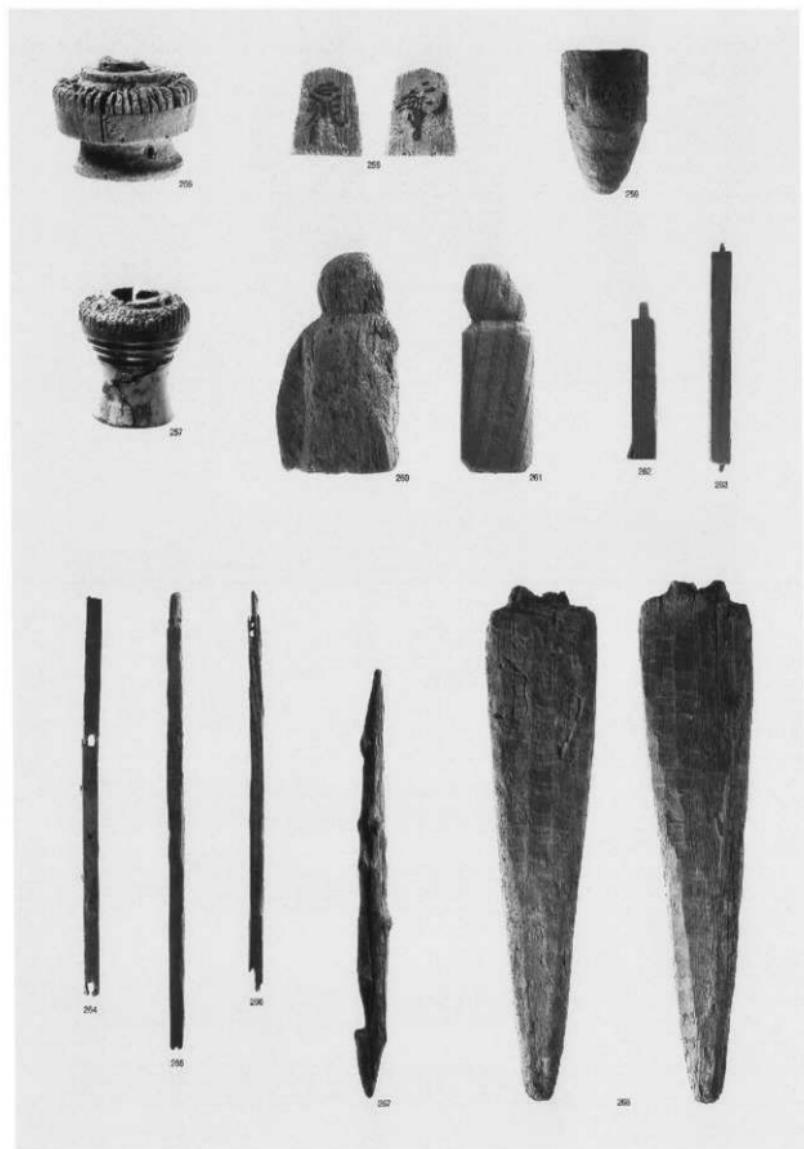
木製品（蓋板2・側板・底板）



木製品（下駄 1）



木製品（下駄2・その他の木製品1）



木製品（その他の木製品2・部材類）

報告書抄録

ふりがな	あおきばらいせき							
書名	青木原遺跡Ⅱ							
副題名								
巻次								
シリーズ名	静岡県立歴史文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第244集							
著者名	岩名龍太郎 小川とみ 小林和典 美木三男 会井俊司							
編集機関	静岡県立歴史文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL054-282-4261 FAX054-287-0521							
発行年月日	2011年3月10日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	施設面積 m ²	調査原因	
あおきばら 青木原	しづかぜん 静岡縣 みよし市 あおきばらさと 南二丁目 626-4	22206	368	35° 6' 19" (日本高地系) 35° 6' 31" (世界高地系)	138° 55' 29" (日本高地系) 133° 55' 17" (世界高地系)	20090618 ~ 20100226	829.45	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
青木原	散在地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中世 近世 近代	柱列	土器 (弥生土器、 土師器、煮烹器、 灰堆陶器、壺、 陶器等) 瓦、 石器 (磨製石) 金属製品 (小銅鏡、 銅頭角加工品、刀子、 鏡、鏡管) 木製品 (漆椀、下駄) 石製品 (石器標造品、 管玉、火打石)	小銅鏡の出土 は、静岡県内 6例目。鏡を 備え、外縁に 文様を持つ三 連式銅鏡の小 型模造品で、 同様の出土例 は、千葉県で 報告されてい る。			
要約	青木原遺跡は、三島崩状地上を流れる御殿川蛇行曲間の築堤地から河岸部に当たる。埋没した旧河道中より、 弥生時代から近世・近代に至る遺物が出土した。この内、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される小銅鏡は、 出産地域と他地域との交流を示す上で重要な資料である。							

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第244集

青木原遺跡 II

平成21・22年度一級河川御殿川河川改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年3月10日発行

編集発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒420-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL (054) 262-4261㈹

FAX (054) 262-4266

印刷所 株式会社 ニシガイ

〒424-0946 静岡県静岡市清水区本町12-6

TEL (054) 352-2188㈹

